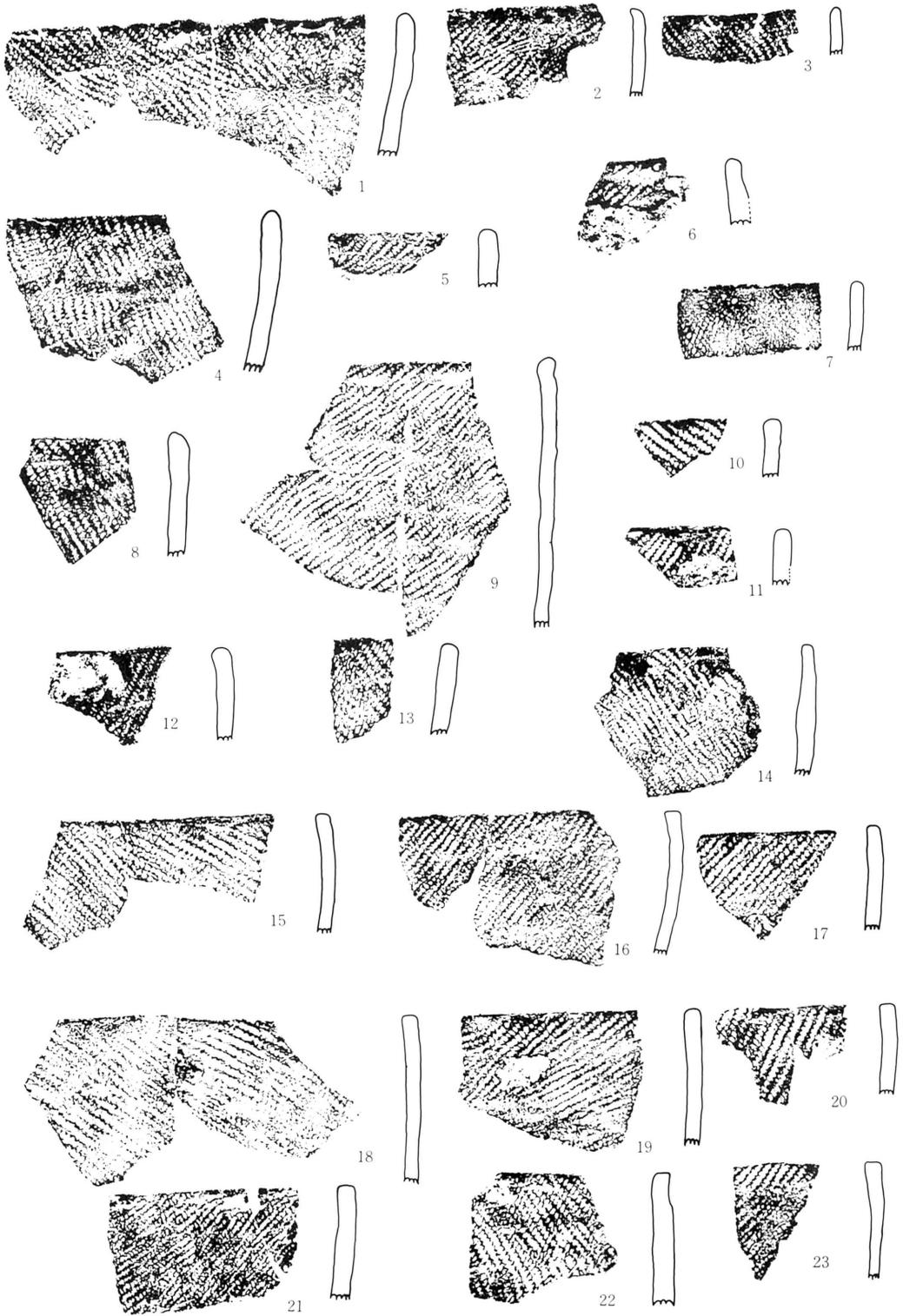
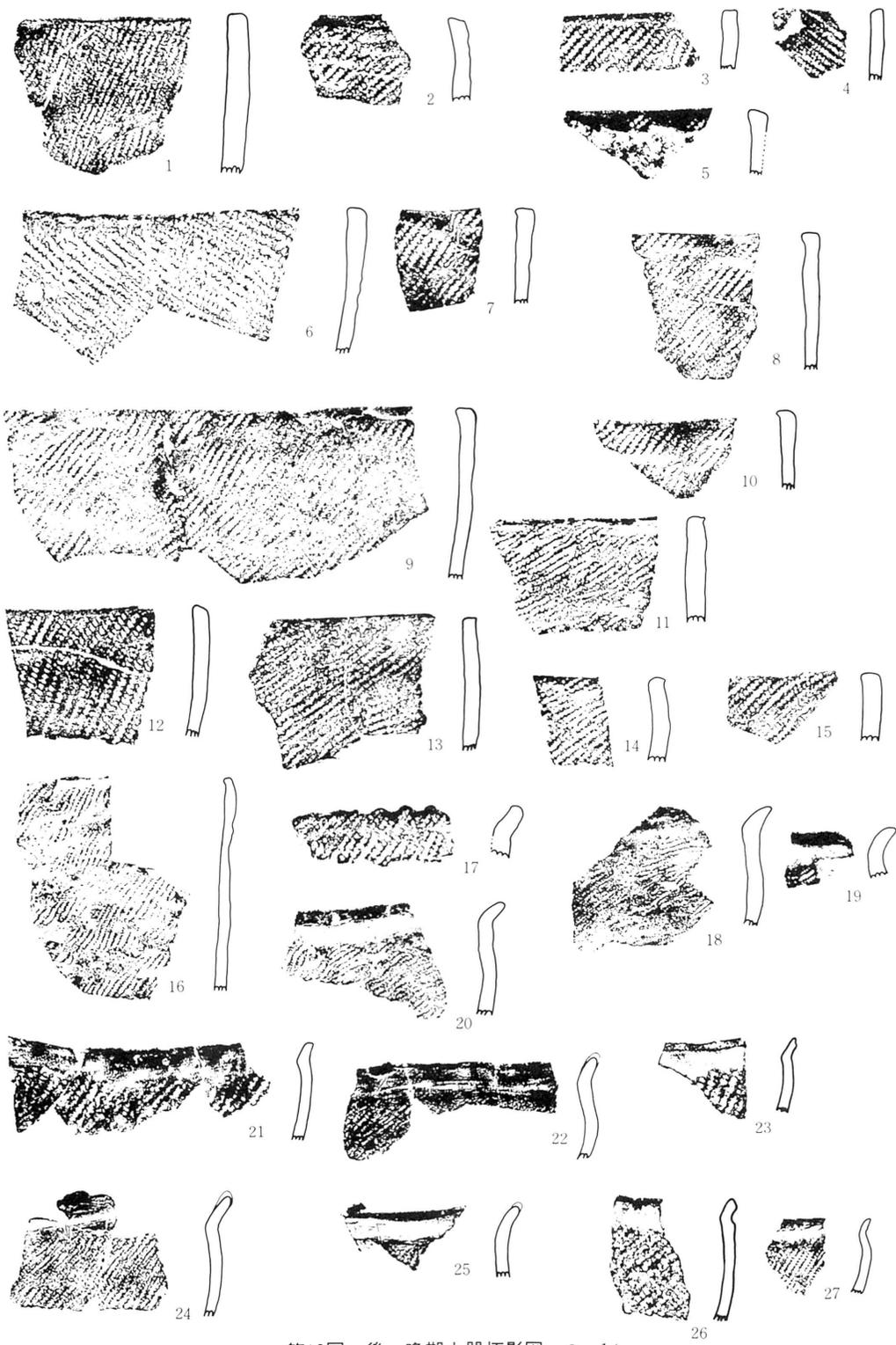


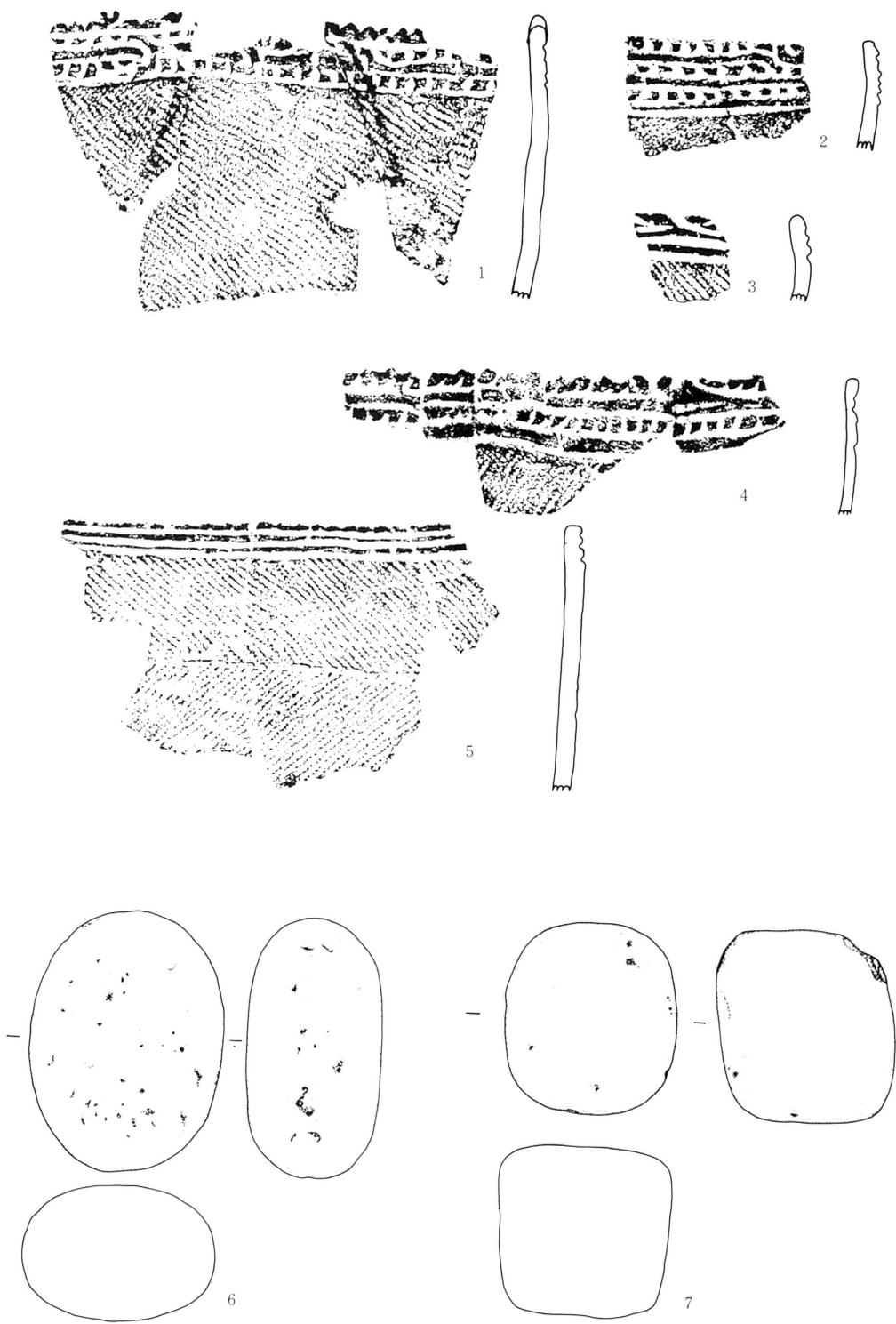
第16图 後・晚期土器拓影图 S=1/3



第17図 後・晩期土器拓影図 S = 1/3



第18图 後・晚期土器拓影图 $S = \frac{1}{3}$



第19图 晚期土器拓影图·石器实测图 $S = \frac{1}{3}$



第20图 石器实测图 $S = \frac{1}{2}$

卯^う遠^{とう}坂^{ざか}遺跡

遺跡名：卯遠坂(略号UT77)

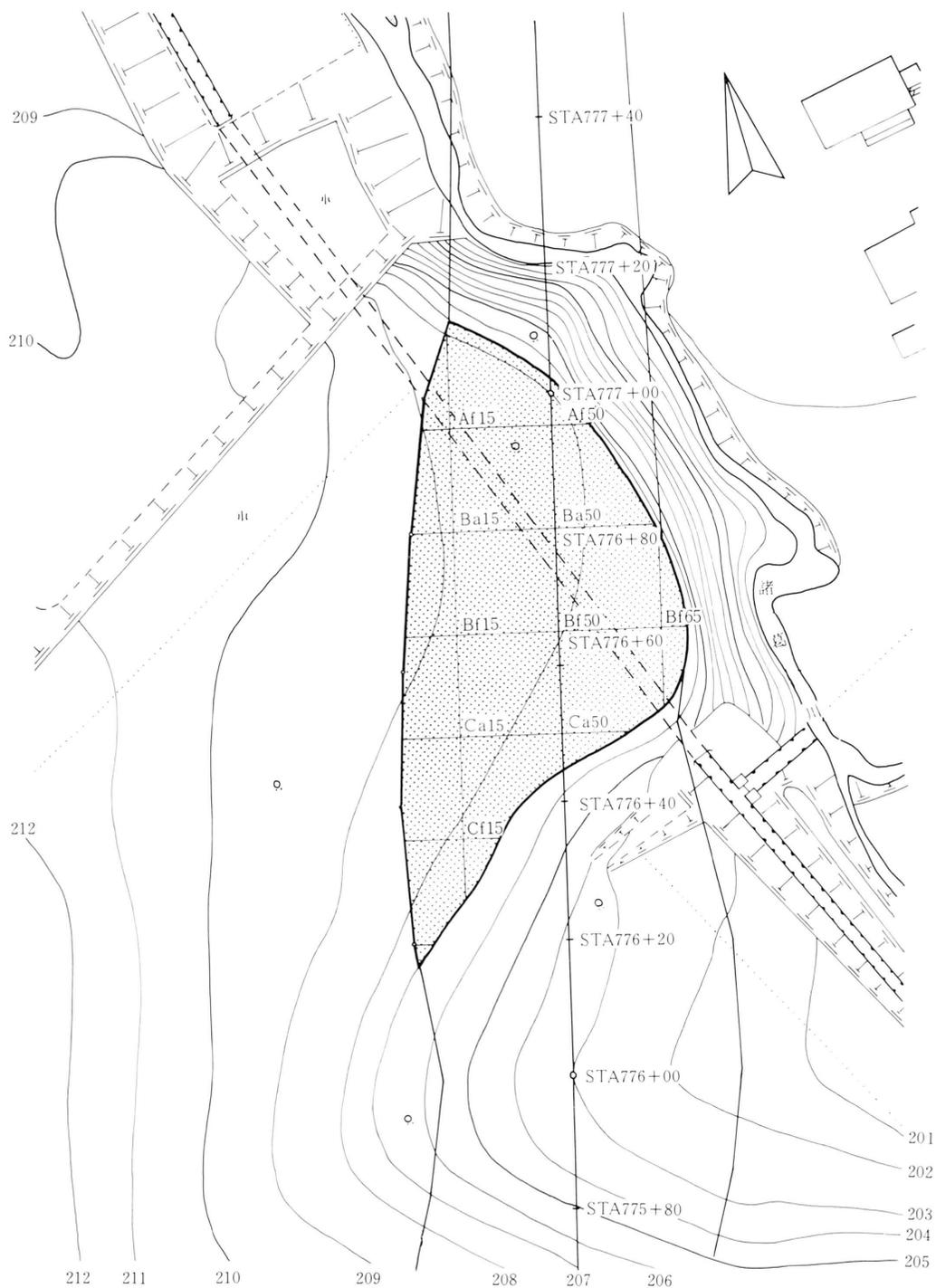
所在地：岩手郡滝沢村大字滝沢第11地割卯遠坂340-2

調査期間：昭和52年6月7日～7月5日

昭和52年7月4日～9月3日

調査対象面積：3,200㎡

発掘調査面積：3,200㎡



第1図 地形図

I 位置と立地（第1図）

卯遠坂遺跡は岩手郡滝沢村大字滝沢第11地割字卯遠坂340-2にあり、東北本線盛岡駅の北西約8km、滝沢村役場の北東約6.5kmに所在する。北西に岩手山（2,041m）が聳え、その南東に第三紀安山岩類からなる山地が連なる。一方、東には北上川が南流し、市街で雫石川・中津川を合流して北上平野を形成する。山地の東麓には諸葛川・木賊川等の小河川が東流し、裾部で流路を南に変えて雫石川に流入する。当遺跡は諸葛川が丘陵の狭窄部を通り、流路を南にとる変換点にあり、南西岸の丘陵上に立地する。調査地域は遺跡の東端にあたり、調査地点の標高は207～209mで北側と東側が諸葛川によって浸食され10m以上の急崖をなしている。南面は谷がはいり斜面となっており、北西は盛岡第一高等学校グラウンドとなっている。現状は山林である。

当遺跡周辺には諸葛川を隔てた北岸に木賊川遺跡があり、南西約1kmに滝沢Ⅰ～Ⅶ遺跡がある。丘陵裾部には各種の遺跡が分布し、当遺跡はこれらの中のひとつである。

II 調査経過

当遺跡は昭和52年6月6日に木賊川遺跡の関連遺跡分布調査の際に発見されたもので、既に東北縦貫自動車道の建設工事が進められていた。翌6月7日から遺構確認調査を行ないブルドーザーの表土削平後をクリーニングした。一部の炉跡・焼土が露出し、遺物が散乱しており遺跡として登録された。

小字名をもって「卯遠坂遺跡」と命名され、昭和52年6月14日から本調査となった。調査は分布調査・遺構確認調査の経緯もあり、検出遺構が炉跡・焼土のみで大規模遺跡とは見られないため、木賊川遺跡調査班が引き続き調査することになった。調査範囲は東北縦貫自動車道が台地の縁辺部を通るため、半円状の東西約40m、南北約90mの3,200㎡である。その後緊急を要する道路中心杭東側と北側橋梁架設工事に伴う掘削部分が優先となり、これを一次調査地域とし、二次にわたって行なうことになった。一次調査終了の時点で木賊川遺跡調査との関係で、当遺跡は卯遠坂遺跡調査班が担当することになり、7月4日から残りの西半部分を調査することになった。これが二次調査である。なお、調査地の隣接地域（北側）は遺跡範囲にあるにもかかわらず、道路敷地外という理由で目前で破壊されたことを付記しておく。

地区割は調査地域を30mごとのブロックに、さらに3mを単位とするグリットに区割した。この時道路中心杭STA 776+80、STA 777+00を基準とし、一次・二次調査とも同一メッシュとした。STA 777+00以北をA区とし、順次南にB・C区とした。

一次調査は、まずブルドーザーで攪乱された調査地全面をクリーニングし、移動している遺物をグリットごとに取り上げた。これと平行して遺構検出面の確認と調査現段階面との関係を

把握するため、表土から観察できる西端に土層観察トレンチを設定した。それによると、現状は遺物包含層、または更に、若干下がった下層上面と推定され、包含層を除去しなければ遺構検出されないと判断された。包含層を除去し、炉跡・焼土を中心に精査を行なうも壁・床面が確認されず、竪穴住居跡は検証されなかった。そのため、まわりの検出面を除去して柱穴の確認に努めた。しかし、一次調査では期間に制約があって竪穴住居跡として確認されないまま終わっているものが多い。また、遺構の検出面、遺物包含層との関係等も削平されたこともあって、十分把握されていない。

二次調査は一次調査の後を受け、調査地西半（A区西半の約4分の1、B・C区の西半）を調査地域とした。二次調査地域は道路敷西半であるが、一次調査の計画に統一性を欠いた点があり、調査範囲が再三にわたって変更された。そのため、一部調査によって、既に焼土・炉跡が露出する部分もあり、また、遺物包含層に厚く覆われていた区域もあって必ずしも同条件で調査に入ったものではない。

調査地では既に焼土・炉跡が露出して、竪穴住居跡が推測され、集落跡が予想された。一次調査地域では検出された焼土・炉跡のうち住居跡の確認されたものは1棟であるが、炉跡・焼土は本来的には竪穴住居跡に伴うものと考え、二次調査では竪穴住居跡に伴うものと仮定して住居跡の検出に努めた。そして確認されない場合に屋外炉とすることにした。

調査は一次調査の成果を勘案し、特に竪穴住居跡の検出のため次の方法を用いることとした。

①できるだけセクションベルトを残して断面観察を行ない壁の検証を行なう。

②調査地全域の遺構検出面を除去して柱穴の検出を行なう。

など、また遺構の検出には自然石の配置、遺物の分布、焼土の散乱などに細心の注意をはらい、遺物の取り上げには混同のないようチェックした。さらに遺構には遺物が多く含まれることがあり、出土遺物のポイント（出土地点）とレベル（標高）の記録を作成して遺物から遺構の復原を試みた。

基本層序（第2図）

調査地は比高10mの台地上で、緩やかに傾斜する平坦地にある。既に削平されて堆積層は明確ではないが、調査地西端によると基本的には次のようになる。

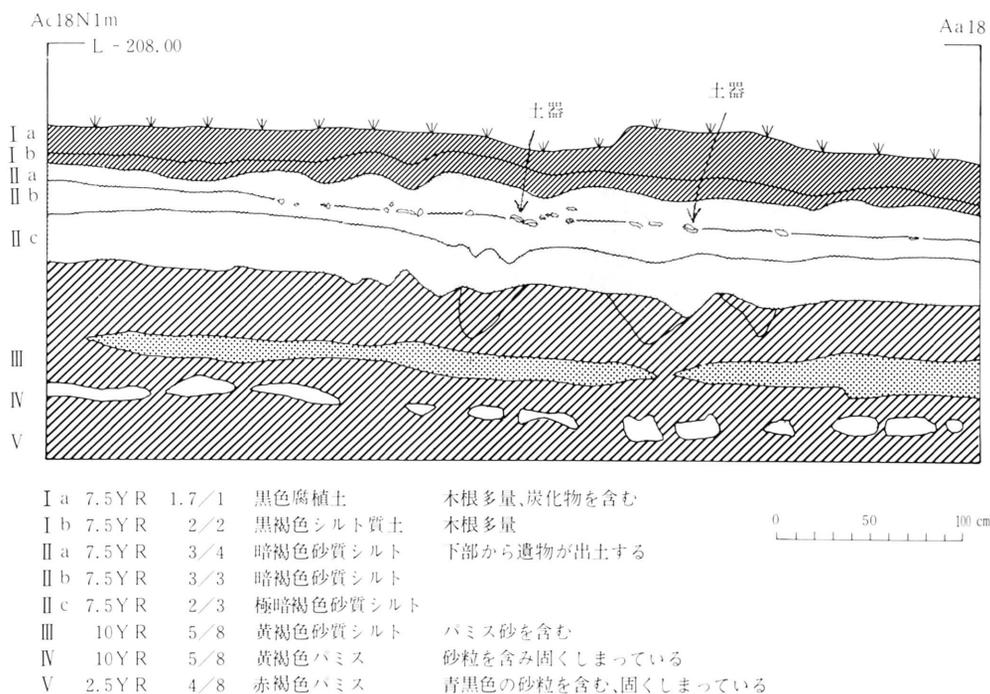
I a層……黒色腐植土。木根・草根が多量にみられ、炭化物を含む。ボソボソしてしまりが
ない。

I b層……黒褐色シルト質土。木根がみられボソボソしている。I a層とともに表土を構成するが、II層に類似する。

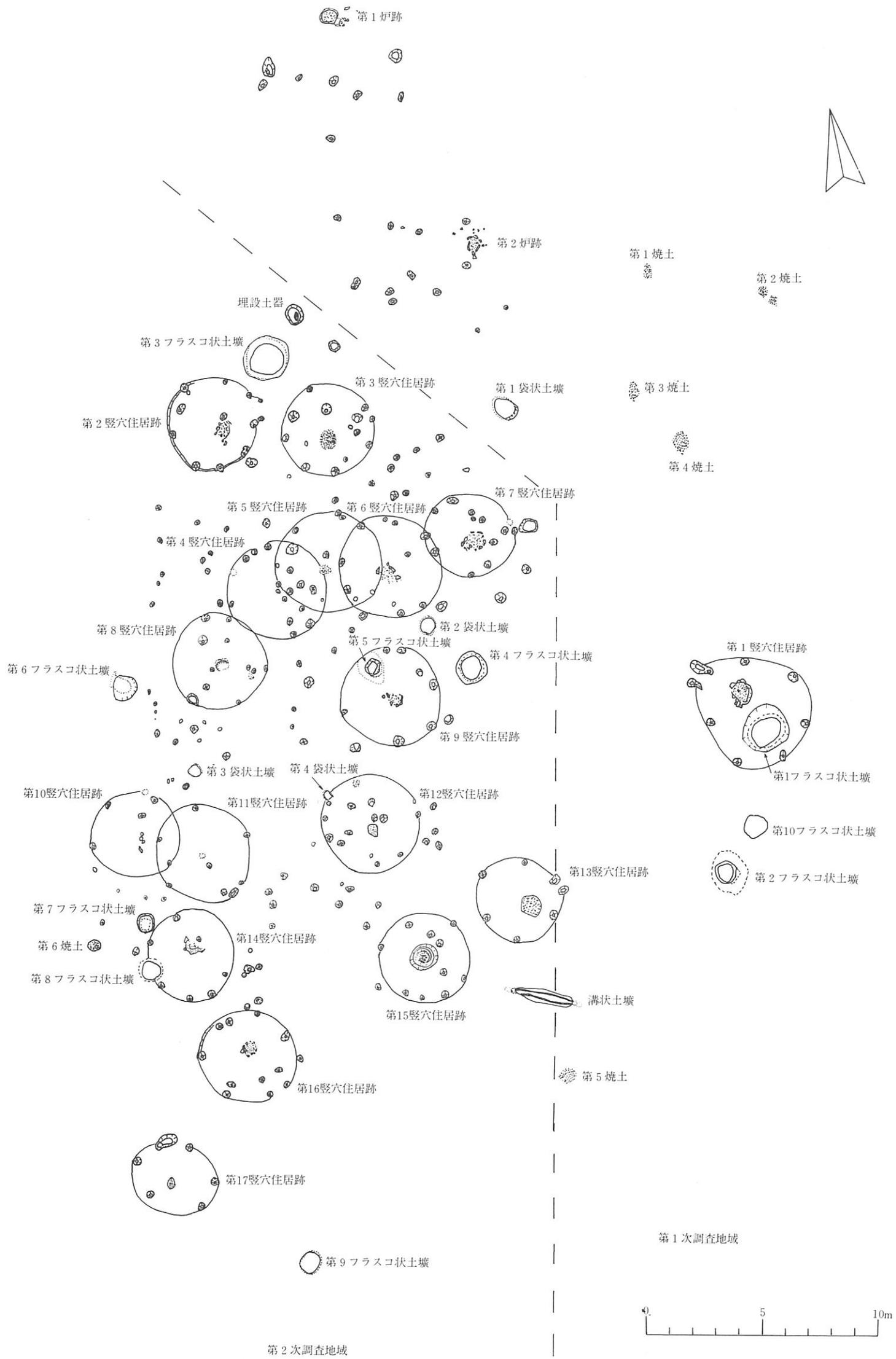
II a層……暗褐色砂質シルト。下層より木根が多く、木根の周辺が黒色化している。I層より粘性がある。

- II b層……暗褐色砂質シルト。II a層とほとんど変化がない。II a・II b層の間に遺物がはいる。遺物包含層と考えられる。
- II c層……極暗褐色砂質シルト。II a・II b層とほとんど変化ないが黒色が強くなり、III層がブロック状に混入する。混土様を呈す。遺物は含まない。本来の遺構検出面である。
- III 層……黄褐色砂質シルト。バミス粒を含み、若干木根がはいる。やや粘性があり、固くしまっている。遺構確認面で柱穴のほとんどがこの層から検出される。
- IV 層……黄褐色バミス。砂粒を多く含み、固くしまっている。バミスは2～5mmであるが、8mmのものもある。乾燥すると白色化する。
- V 層……赤褐色バミス。青黒色砂（スコリア）を多量に含む。固くしまっている。バミスは乾燥すると白色化する。

以上の層はいずれも火山放出物で、分火山灰に相当するものと思われる。この下には黄褐色シルト質土が2 m以上にわたって堆積している。



第2図 基本層序



第3図 遺構配置図

Ⅲ 調査結果

検出遺構（第3図）

今回の調査は工事中に発見された遺跡であり、調査期間が制約された緊急調査であったが、一次調査では竪穴住居跡1棟、炉跡2基、焼土遺構5基、フラスコ状土壇3基、袋状土壇1基、柱穴様ピット群が検出され、二次調査では竪穴住居跡16棟、焼土遺構2基、フラスコ状土壇7基、袋状土壇3基、溝状土壇1基、埋設土器1が検出された。

これらの遺構は全て遺物包含層に覆われており、包含層形成より古い。遺構の分布は調査地全域にわたり、各種の遺構が集中して群をなしている。中には重複しているものもある。

竪穴住居跡は確認されたものが17棟で、炉跡を伴わないものが5棟以上考えられ、また、炉跡2基、焼土7基の中には住居跡の想定されるものがあり、数はさらに増加すると推測される。その分布は密集しており集落を形成していたと見られる。保存状態は良好とは言えず、ほとんどが削平されていた。内部施設としては炉跡・柱穴・入口・土壇・埋設土器等が検証されたが、壁・床面は確認されないものが多い。

フラスコ状土壇が10基で袋状土壇が4基である。いずれも竪穴住居跡の近くに存在している。溝状土壇は1基のみである。

この外に遺物包含層がある。全ての遺構を覆っており遺跡全体に及んでいる。

出土遺物

今回の調査で発見された遺物は約10,000点である。このうち土器が約90%を占め、石器・土製品は少ない。大多数が遺物包含層の遺物で遺構に伴うと見られるものは竪穴住居跡の埋設土器と埋設土器炉に使用された土器、それに土壇内出土土器だけである。炉跡、埋設土器に利用されているものは二次使用されたものが多い。

土器は完全な形で出土したものは1点のみで、ほとんどが破片である。接合して復原可能となるものが20点、実測できるものが50点である。器種には深鉢形・甕形・壺形・鉢形・浅鉢形土器等があり、深鉢形・鉢形・甕形土器が多い。この外には片口の付いた鉢形土器・高台付鉢形土器・注口土器?等がある。中には釣手の付くもの、肥手の付くものがあり、赤色顔料を塗布しているものもある。時期は縄文後期初頭に位置づけられ、十腰内Ⅰ式・堀之内Ⅰ式に併行するものと思われる。

石器は石鏃、石錐、石匙、磨製石斧、搔器、石皿、凹石、石錘、擦石等各種にわたる。石錐石匙等はそれほど多くなく、搔器類の多いのが目に付く。また石核、剥片などの石材、石器製作の際に派生する屑片が多く含まれる。土製品には土偶、管状土錘、滑車状耳飾、鐸形土製品円盤状土製品等があり、土器片利用の円盤状土製品が圧倒的に多い。

1. 検出遺構

(1) 竪穴住居跡

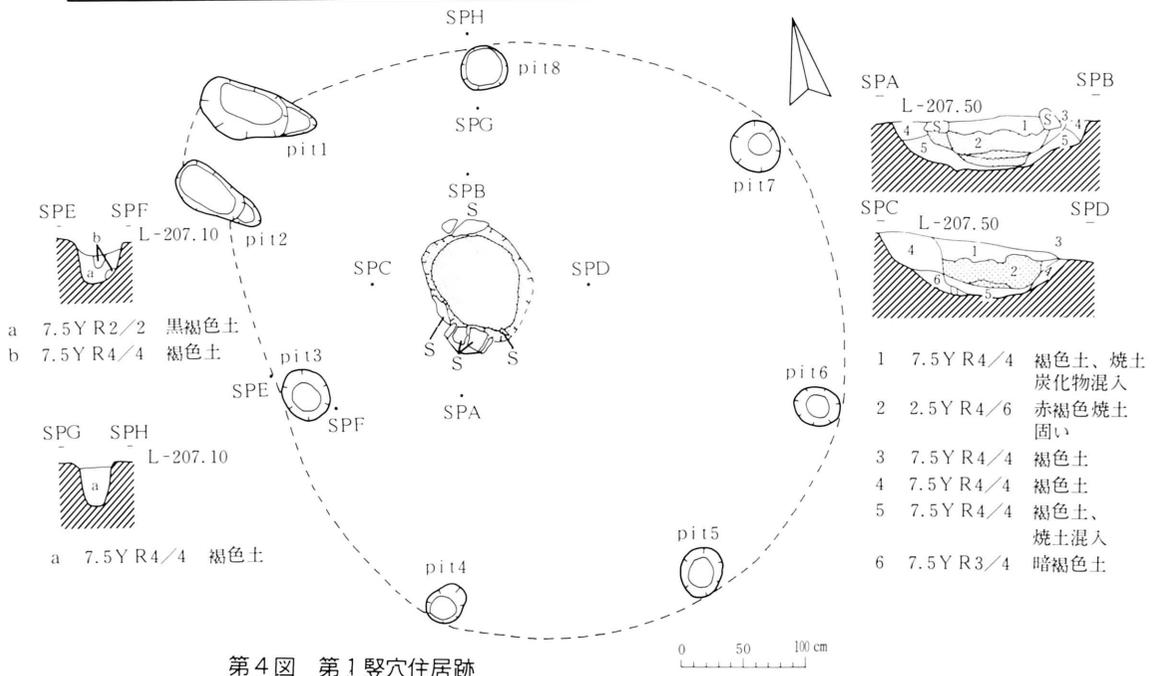
第1 竪穴住居跡（第4図、図版2）

一次調査で検出された唯一の竪穴住居跡である。壁は既に削平されていたが、卵形に配列された柱穴8個が確認され竪穴住居跡の検出となった。第1 フラスコ状土壙が住居跡南東部内側にあり住居跡を切っている。平面形は北西に若干突き出した卵形を呈し、規模は柱穴間で575 × 485 cmで当遺跡最大となる。入口と炉跡を結ぶ線を基準にして線対象となる。

〔炉跡〕 住居跡の中央やや北西寄りにあり入口の近くに位置する。7個の炉縁石が残っている石囲い炉で95 × 90cmの円形をなす。中央部が約10cm凹んでおり、焼土は凹んだ燃烧部の内側にあり、固くなっている。特に底部は火熱を強く受けて固くなり厚さ25cmに達する。炉縁石は焼土に接し火熱を受けた痕跡が見られる。中には割れているものもある。15～30cmの川石を用い、表面あるいは側縁を上に設置している。焼土の下には掘り込みが認められ、焼土粒が混

第1表 第1 竪穴住居跡ピット一覧表

Pit No.	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8
大きさ	95 × 45	75 × 35	40 × 35	35 × 25	40 × 35	35 × 35	40 × 40	40 × 35
炉跡上面からの深さ	206.73 (47)	206.73 (47)	206.675 (45)	206.595 (60)	206.56 (64)	206.445 (75.5)	206.57 (63)	206.59 (61)
備考		胴部						胴部



入している。

〔柱穴〕 卵形に配されており全て住居跡に伴うものと思われる。柱穴は30～40cmの円形で柱痕は確認されなかった。

〔入口〕 ピット1・ピット2の間は75cmと狭くなっており、ピット1は95×45cm、ピット2は75×35cmの卵形を呈し2個分の大きさを示す。両柱穴は「ハ」の字状に開いており入口と考えられる。住居跡の北西にあたり突き出た卵形の先端に位置する。

〔埋土遺物〕 住居跡に伴う遺物を抽出することはできないが、埋土遺物は多数にのぼる。その中には滑車状耳飾(図版24の3)と円盤状土製品(図版21の2)が含まれている。

第2 竪穴住居跡(第5図、図版3)

本住居跡は卯遠坂遺跡で検出された竪穴住居跡の中では最も良好に保存されていたもので、他の住居跡のメルクマールとなるものである。焼土の検出によって住居跡が想定されたものであるが、輪郭を掌握するのが困難であった。そこで東西、南北にセクションベルトを残し、断面観察を行ないながら壁の検証に努めた。西・南壁が確認され、柱穴8個が検出されて竪穴住居跡の検証となった。内部施設では炉跡・柱穴・入口・埋設土器・土壌が確認された。平面形は385×400cmの円形で壁際に柱穴がめぐり、入口が取り付く形となる。

〔埋土〕 埋土は2層に分けられるが基本的には単層である。遺物は1層に多く含まれ2層に若干見られる程度である。両層の遺物は相互に接合し、1層は住居跡外に続いており、基本層序のⅡa・Ⅱb層の遺物包含層に該当する。

〔炉跡〕 住居跡中央部にあたるが僅かに南東に寄る。炉跡そのものは直径60cmの円形であるが、110×70cmの範囲に焼土が散乱している。西側に6個の川石が並べられており石囲い炉と思われる。焼土の厚さは15cmで炉縁石が一部その中に埋まっている。また、中にはその上に乗っているものもある。焼土の下には振り込みが認められ、焼土・炭化物混入土が堆積している。

〔柱穴〕 ピット1・3～5・7・8・11・12の8個が壁際に配列され壁際柱穴(以後「側柱」と呼ぶ。)を構成し、ピット13は炉跡の北方約60cmにあり中央柱(以後「主柱」と呼ぶ。)と考えられる。主柱柱穴は他の柱穴より一段深くなっている。

第2表 第2 竪穴住居跡ピット一覧表

Pit No	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9	Pit 10	Pit 11	Pit 12	Pit 13	Pit 14
大きさ	30×30	45×35	35×35	35×30	30×25	20×20	20×20	30×30	25×20	20×20	15×15	20×20	35×25	45×40
炉跡上面からの深さ	207.80 (40)	207.84 (36)	208.035 (16.5)	207.988 (21)	207.92 (28)		207.58 (62)	207.77 (43)	207.70 (50)	207.72 (48)	207.85 (35)	207.65 (55)	207.56 (64)	207.66 (54)
備考	チップ	胴部					胴部2	胴部2 底部			胴部		主柱	

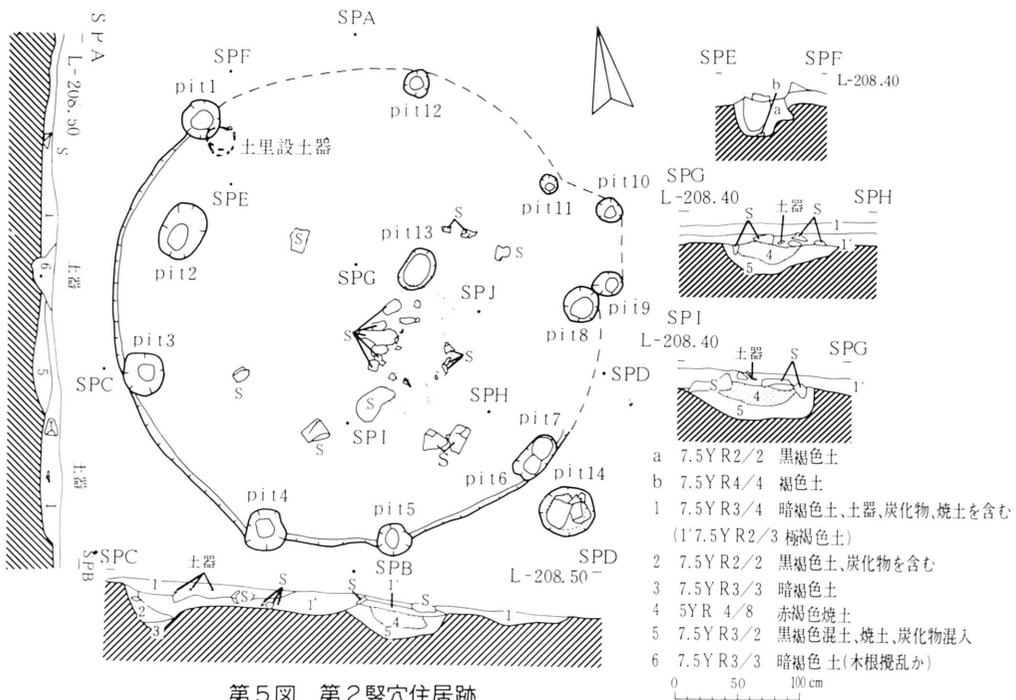
〔入口〕 住居跡東部に位置し入口柱穴をもつ。入口柱穴間は60cmと狭く側柱から約40cm外側に出ている。南側列は相互に接しており、北側列は約50cm離れている。柱穴はいずれも直径20cm前後と小さく直に穿たれており、深さは約50cmである。入口中央をたどると主柱に達する。

〔埋設土器〕 埋設土器は住居跡北西の側柱内側に接しており、土器よりひとまわり大きい直径40cmの土壇に直立した形で埋設されている。土器のまわりが約15cm他より高くなっており、口縁部はその床面から約5cm露出している。土器は体部下半が脆く、内外両面に炭化物が付着している。体部下半には一部穴があいており二次使用されたことを示している。

〔土壇〕 この住居跡では2個検出された。①は住居跡の北西にあたり側柱と側柱の中間に位置する（ピット2）。平面形は45×35cmの長円形で深さが35cmである。埋土から胴部破片1点が出土している。②は住居跡の南東にあたり側柱（ピット6・7）の外側に位置する（ピット14）。45×40cmの円形プランを呈し深さが55cmである。土壇底部から折り重なった状態で深鉢形土器（第43図5）が出土している。底部は欠損していた。

〔壁〕 遺物の出土状況によると2段になっているようである。一段壁は側柱の間にあり高さ約20cmで、二段壁はそれより50cm外側にあり西側で約15cmの壁高をもつ。柱穴は一段壁に接するか、外側に若干とび出している。

〔床面〕 遺物の少なくなる所を床面と仮定すると、ほとんど水平で平坦である。ただ埋設



土器の周辺が約15cm高くなっている。また、入口の部分がスロープになっているようである。

〔伴出遺物〕 明らかに住居跡に伴うと認められるものは埋設土器と土壌内出土土器の2例である。前者(第39図2)は頸部にゆるやかにびれをもち、外反ぎみに立ち上がる甕形土器で4個の波状突起をもつ。口縁部から頸部にかけては無文で、下半は縦位の撚糸文を地文とする。波状突起から体部にかけては沈線による装飾文を付す。後者(第43図5)は6個の波状口縁をもつ深鉢形土器で口縁部が最大となる。口縁部文様帯は隆帯刺突と沈線文からなり、体部文様帯は磨消縄文である。

〔埋土遺物〕 住居跡範囲内から出土した遺物は下表のとおりである。総数633点で、この中には完形土器(第32図5)と5個体の実測可能土器が含まれる。第33図4・5、第35図2の3例は住居跡西方の土器と接合し、第32図10は第3フラスコ状土壌の埋土土器と接合する。また第33図1は第9竪穴住居跡の埋土土器と接合する。土製品では鐔形土製品(第55図8)、ミニチュア土器(第55図9)が含まれ、石器では石鏃(第56図1・13・25)、石錐(第56図29)、石斧(第57図40)、石皿(第60図119)等が含まれている。

第3表 第2竪穴住居跡出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石鏃	石斧	スクレーパー	石皿	磨石	コア	フレーク	チップ	その他
数	59	481	11	1	3	1	1	1	0	6	7	56	6

第3竪穴住居跡(第6図)

この住居跡は既に削平されており、壁が確認されず、焼土が薄くなっていた。焼土と柱穴の配置から範囲を推定した。柱穴間で420×390cmの円形プランをなす。

〔炉跡〕 住居跡のほぼ中央に焼土があり地床炉と見られる。焼土は88×86cmの円形に広がり厚さが約10cmである。レンズ状に堆積しており、ボソボソして柔らかい。

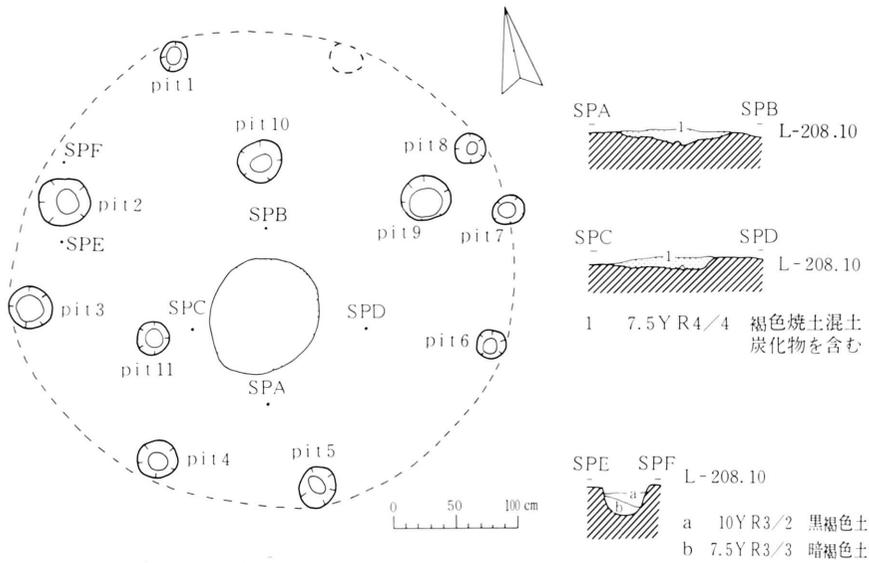
〔柱穴〕 ピット1・3～8の7個が壁際に並び側柱を構成している。ピット8・ピット1の間が250cm離れており中間に柱穴がはいると推測される。

第4表 第3竪穴住居跡ピット一覧表

Pit No.	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9	Pit 10	Pit 11
大きさ	25×20	40×35	35×35	30×30	35×30	25×25	20×25	25×25	40×35	35×30	25×30
炉跡上面からの深さ	207.91 (14)	207.81 (24)	207.84 (21)	207.84 (21)	207.82 (23)	207.78 (27)	207.75 (30)	207.77 (28)	207.70 (35)	207.78 (27)	207.83 (22)
備考							胴部				

〔入口〕 ピット7・ピット8の間が55cmと狭くなっており入口と考えられる。住居跡の東部に位置している。

〔土壌〕 この住居跡では2個発見された。①は住居跡の北西にあたり側柱柱穴間に位置する(ピット2)。40×35cmの円形で深さが25cmである。②は住居跡の北東にあたり入口の直前に



第6図 第3竪穴住居跡

位置する（ピット9）。プランは35×40cmの円形で深さが35cmをはかる。両者とも中から何も検出されなかった。

〔埋土遺物〕 既に掘り下げられており遺物が非常に少ない。

第5表 第3竪穴住居跡出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石	鉄	石	斧	スクレーパー	石	皿	磨	石	コ	ア	フレーク	チップ	その他
数	0	9	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

第4竪穴住居跡（第7図）

東半が第5竪穴住居跡と重複し、南西の一部が第8竪穴住居跡と切り合っている。本住居跡が両住居跡より古い。住居跡範囲は遺物包含層と焼土・柱穴の配置等を総合的に判断して推定した。平面形は柱穴間で430×420cmの円形である。なお、北西約1mに炉跡を伴わない住居跡が推測される。

〔炉跡〕 住居跡の中央にあり東半が第5竪穴住居跡に破壊されている。石が4個並んでおり石囲い炉と見られる。2個は山石で中央にあり、他の2個は川石で火熱を受けた痕跡を残す。焼土は炉跡周辺に散在しており厚さが4～5cmと薄くボンボンしている。炭化物を含む。

〔柱穴〕 壁際に並ぶピット1・2・4～8の7個が側柱と見られ、ピット4・5間が300

cm、ピット7・8間が250cmであり中間に柱穴がはいると考えられる。ピット8は45×50cmと大きく他の施設と重複していると推測される。なお、ピット11・13は第5 竪穴住居跡の側柱である。

第6表 第4 竪穴住居跡ピット一覧表

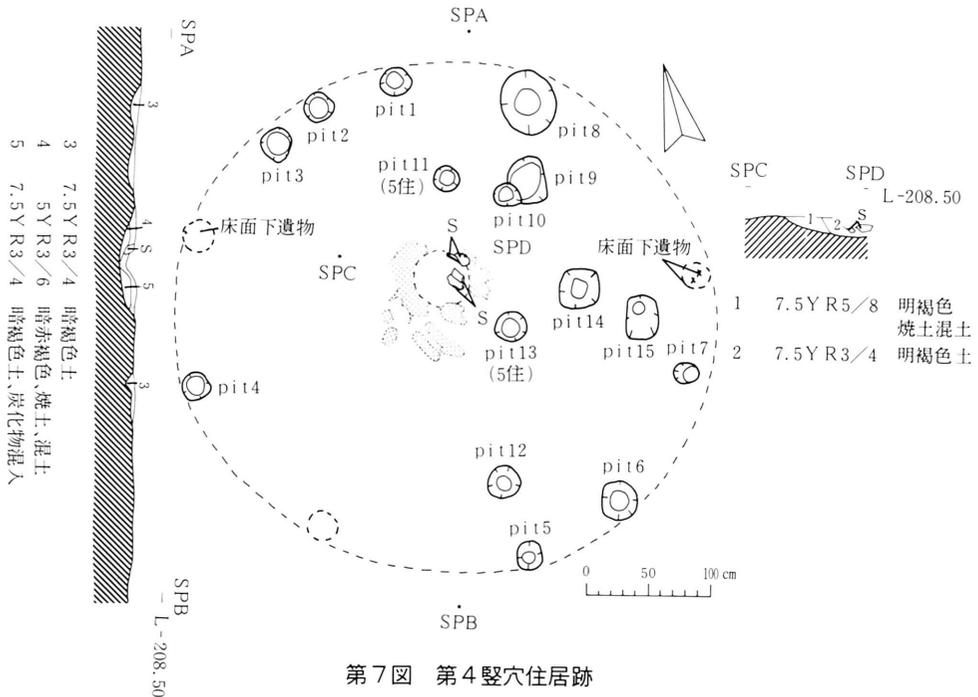
Pit No	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9	Pit 10	Pit 11	Pit 12	Pit 13	Pit 14	Pit 15
大きさ	25 × 20	25 × 25	25 × 25	25 × 25	20 × 25	30 × 30	20 × 25	45 × 50	30 × 35	25 × 25	20 × 20	25 × 25	25 × 25	35 × 30	25 × 35
住跡上面からの深さ	207.86 (39)	207.78 (47)	207.565 (68.5)	207.824 (42.5)	208.14 (11)	207.88 (37)	207.94 (31)	207.84 (41)	207.708 (54)	207.58 (67)	207.706 (54.5)	208.15 (10)		207.89 (36)	207.80 (45)
備考		胴部 チップ	主柱								5住P2		5住P3		

〔入口〕 ピット1・ピット2の間が65cmと狭くなっており入口と見られる。入口は住居跡の北東にあたる。

〔埋土遺物〕 埋土遺物の中には第5 竪穴住居跡範囲内の口縁部破片2点、胴部破片14点が含まれ、挿器（第58図83）、石錘（第61図128）を含む。

第7表 第4 竪穴住居跡出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石	鉄	石	斧	スクレパー	石	皿	磨	石	コア	ア	フレーク	チップ	その他
数	10	90	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	2



第5 竪穴住居跡（第8 図）

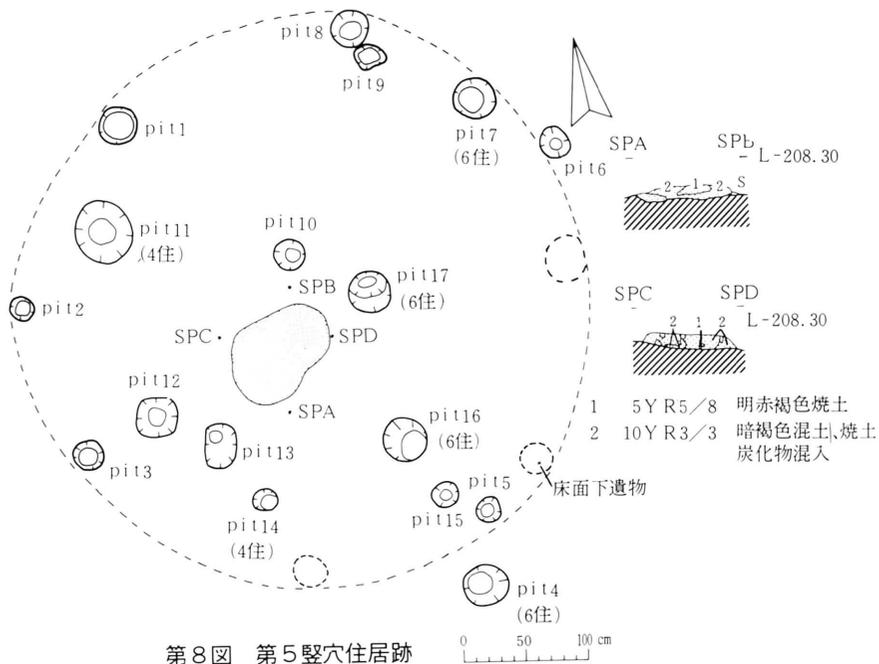
西半が第4 竪穴住居跡と重複し、東半が第6 竪穴住居跡と切り合っており、当住居跡が新しい。住居跡範囲は遺物の分布をもとに焼土と柱穴の配置、前後関係により推定した。平面形は柱穴間で415 × 455 cmを計測する円形である。

〔炉跡〕 住居跡のほぼ中央にあり、90 × 65cmの楕円形に焼土が広がっている。石組み等の施設が認められなく地床炉と考えられる。焼土は明赤褐色を呈し固く焼きしまっており、その厚さは約10cmである。焼土下には掘り込みが確認されない。

〔柱穴〕 ピット1～3・5・6・8の6個が炉跡に伴う側柱と見られ、ピット10が炉跡の北方約70cmにあり主柱と考えられる。ピット3・5、ピット5・6の間がそれぞれ325cm、300cmであり中間に柱穴がはいると思われる。また、ピット5は小さく深さが9cmと浅い、あるいはその北約50cmに深さ28cmの床面下土器の出土地点がありそれが側柱なのかもしれない。なお、ピット11・14は第4住居跡の側柱で、ピット4・7・16・17は第6住居跡の側柱である。

第8表 第5 竪穴住居跡ピット一覧表

Pit No	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9	Pit 10	Pit 11	Pit 12	Pit 13	Pit 14	Pit 15	Pit 16	Pit 17
大きさ	30 × 30	20 × 20	25 × 25	35 × 30	20 × 20	20 × 25	35 × 30	30 × 30	25 × 15	25 × 25	45 × 50	35 × 35	25 × 35	20 × 15	20 × 20	35 × 35	30 × 30
炉跡上面からの深さ	207.70 (33)	207.705 (32.5)		207.77 (33)	208.01 (9)	207.82 (28)	207.82 (28)	207.66 (44)	207.62 (48)	207.61 (49)	207.84 (26)	207.89 (21)	207.80 (30)	207.94 (16)	208.07 (3)	207.72 (38)	207.55 (55)
備考	胴部			6住P4			6住P1			主柱	4住P8			4住P7		6住P3	6住P2



第8 図 第5 竪穴住居跡

〔埋土遺物〕 埋土遺物の中には第4住居跡の16点、第6住居跡の22点が含まれ、石鏃（第56図20）、搔器（第58図69）を含む。

第9表 第5竪穴住居跡出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石鏃	石斧	スクレーパー	石皿	磨石	コア	フレーク	チップ	その他
数	10	58	0	0	1	0	1	0	0	1	3	2	1

第6竪穴住居跡（第9図、図版6の下）

西半が第5竪穴住居跡と重複し、東部の一部が第7竪穴住居跡と切り合っている。当住居跡が第5住居跡、第7住居跡より古いようである。範囲は炉跡と柱穴の配置から推定した。平面形は柱穴間で440×465cmの円形である。

〔炉跡〕 住居跡のほぼ中央にあり僅かに南西に寄る。西側の石囲い炉と東側の埋設土器炉からなる複合炉である。焼土は燃焼部で70×60cmの楕円形を呈し、厚さは約10cmである。土器内にも若干見られる。炉縁石は半円状に5個認められ、20cm前後の川石を用い側縁を上にして設置されている。埋設土器には口縁部から肩部にかけての甕形土器を用い倒立状態で埋設している。東半が破損し約140cmの範囲に散乱している。

〔柱穴〕 炉跡に伴う側柱は1～6・8・9の8個が考えられる。ピット4は若干外に出ており、ピット6は深さが6cmと非常に浅い。ピット6・8間が295cmであり間に柱穴が予想されるが、あるいはピット5・8間にはいるものであろうか。ピット12は炉跡の北東110cmにあり支柱を構成すると考えられる。

第10表 第6竪穴住居跡ピット一覧表

Pit No	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9	Pit 10	Pit 11	Pit 12	Pit 13	Pit 14	Pit 15	Pit 16
大きさ	35×30	30×30	35×35	35×30	30×30	25×25	40×30	35×25	20×20	15×15	20×25	20×20	20×20	20×20	20×20	40×40
炉跡上面からの深さ	207.820 (13)	207.550 (40)	207.720 (23)	207.770 (18)	207.700 (25)	207.910 (4)	207.560 (39)	207.540 (41)	207.540 (41)	207.580 (37)	207.470 (48)	207.400 (55)	207.160 (79)	208.008	208.010	207.54 (41)
備考	5住P7				胴部 底部 チップ		胴部 7住P3				5住P6			5住P5		

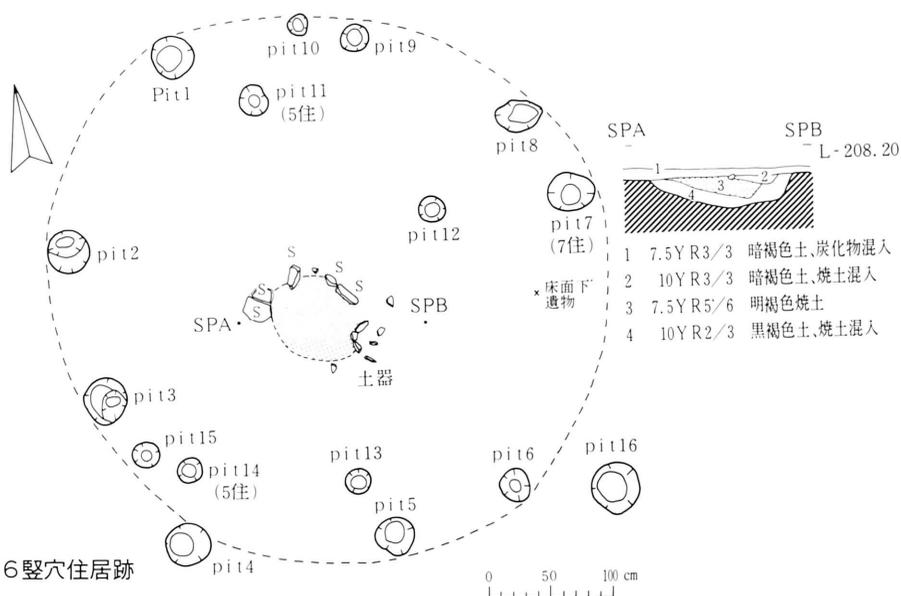
〔土壇〕 住居跡の南東にあり側柱（ピット6）の東に位置する（ピット16）。40×40cmの円形で深さが41cmである。

〔伴出遺物〕 住居跡に伴うものは炉跡に使用された甕形土器である（第49図1）。6個の波状突起を有する口縁から肩部にかけてのもので頸部にゆるやかにびれをもつ。口縁から頸部にかけて無文で下半が単節斜縄文を地文とする。波状突起から体部にかけて沈線による装飾文を付す。

第11表 第6竪穴住居跡出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石鏃	石斧	スクレーパー	石皿	磨石	コア	フレーク	チップ	その他
数	21	206	19	0	0	1	0	0	1	1	2	5	1

〔埋土遺物〕 埋土遺物の中には第5 竪穴住居跡の口縁部1点、胴部19点、底部1点等が含まれ、石斧（第57図48）を含む。



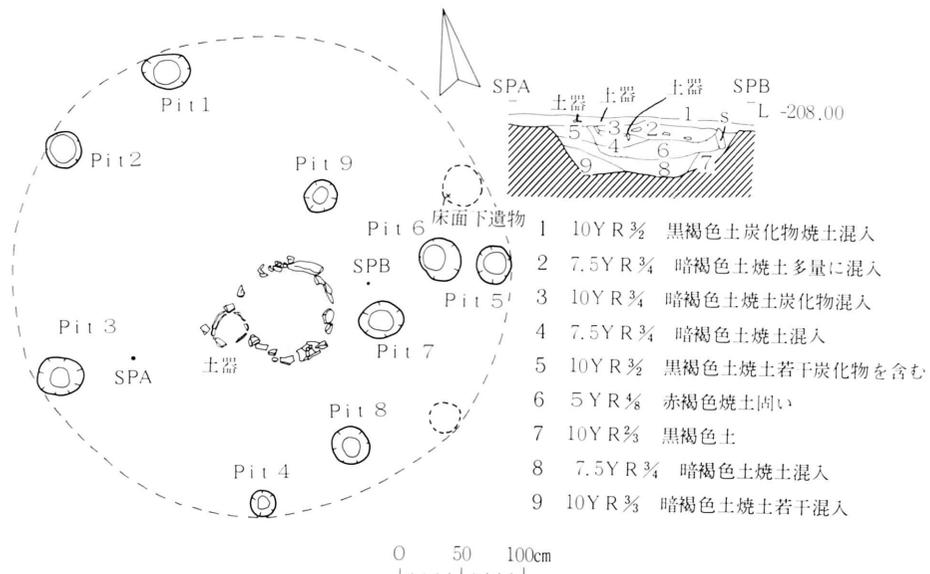
第9図 第6竪穴住居跡

第7 竪穴住居跡（第10図、図版5の下・6の中）

西の一部が第6 竪穴住居跡と切り合っており、当住居跡が新しい。出土遺物による推定壁と炉跡、柱穴の配置によって範囲を推定した。北東端が攪乱を受けている。平面形は柱穴間で、 395×380 cmの円形である。

〔炉跡〕 東側の石囲い炉と西側の埋設土器炉からなる複合炉で、住居跡の中央やや南寄りに位置する。土器は炉跡のまわりに散乱しているが、良く原形をとどめており、両者はダルマ状に接合し100 cmを計測する。直径80 cmの石囲い炉に燃焼部があり焼土の厚さが18 cmに達する。炉縁石の中には火熱を受けて赤色変化したもの、あるいは破碎したものが見られるが、10～25 cmの扁平な川石を用い、2重・3重にめぐらしている。埋設土器は口縁部から肩部にかけての甕形土器で、逆位に設置している。この土器は焼土の上に乗っており後から補なわれたものと推測される。焼土の下には掘り込みをもち、焼土・炭化物の混入土が堆積している。

〔柱穴〕 ピット1～5の5個が側柱を構成し、ピット9が炉跡の北80 cmに存在し主柱と考えられる。ピット4・5の間が265 cmで、ピット5・1の間が305 cmであり中間に柱穴がはいると推測される。



第10図 第7竪穴住居跡

第12表 第7竪穴住居跡ピット一覧表

Pit No.	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9
大きさ	40 × 25	30 × 30	40 × 30	20 × 20	25 × 30	35 × 30	35 × 30	30 × 30	
炉跡上面からの深さ	207.590 (11)	207.450 (25)	207.560 (14)	207.620 (8)	207.290 (41)	207.320 (38)	207.480 (22)	207.540 (16)	207.15 (55)
備考									

〔入口〕 ピット5の北方の床面下26cmから遺物が出土している。この地点とピット5の間が65cmと狭く入口が推測される。入口は住居跡の東部にあたる。

〔土壌〕 住居跡東部にあたり入口の内側に位置する（ピット6）。35×30cmの円形プランをなし深さが38cmである。遺物は発見されない。

〔伴出遺物〕 住居跡に伴う遺物は埋設土器炉に使用されていた甕形土器である（第35図4）。肥厚する平口縁から肩部にかけてのもので頸部にゆるやかにびれをもつ。文様は口縁部文様帯のみで沈線を主体とし上下に刺突を有する粘土紐を貼付している。下半はL-Rの単節斜縄文である。

〔埋土遺物〕 総数238点である。この中には復原可能土器2点が含まれる（第32図4、第47図5）。前者は第4フラスコ状土壌の埋土土器と接合する。土製品では完形のミニチュア土器（第55図5）、石器では石鏃（第56図22）、搔器（第58図73）、石皿（第60図120）を含む。

30cmに位置し支柱と見られる。ピット2は60×50cmと一段大きく他の施設と重複していると思われる。

〔埋土遺物〕 範囲内に含まれる遺物は次のとおりである。

第15表 第8 竪穴住居跡出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石 鉄	石 斧	スクレーパー	石 皿	磨 石	コ ア	フレーク	チップ	その他
数	5	82	4	0	0	0	0	0	0	2	1	2	0

第9 竪穴住居跡（第12図）

住居跡北西部内側に第5 フラスコ状土壌があり当住居跡が新しい。内部施設では炉跡・柱穴入口・土壌が検証された。柱穴間で440×435cmの正円に近い平面プランをなす。

〔炉跡〕 住居跡の中央に位置する石囲い炉である。焼土は直径60cmの円形に配された石の内側にあり、火熱を強く受けて固くなり厚さ15cmに達する。炉縁石には20cm前後の川石を用い間隙なく並べ、側縁を上若若干内側に傾斜するように設置している。炉縁石の中には一部焼土に埋まっているものがある。焼土下には掘り込みが認められ、焼土混入土が堆積している。

〔柱穴〕 ピット1～6の6個が住居跡の側柱を構成している。ピット1・2の間が330cmで、ピット2・3の間が、260cmである。それぞれ中間に住穴があったものと推測される。柱穴は30～40cmのものが多くほぼそろっている。

第16表 第9 竪穴住居跡ピット一覧表

Pit No.	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8
大 き さ	30×25	30×30	40×40	35×35	30×40	25×20	30×30	30×40
炉跡上面からの深さ	207.700 (10)	207.595 (20.5)	207.600 (20)	207.650 (15)	207.610 (19)	207.650 (15)	207.600 (20)	207.510 (29)
備 考								

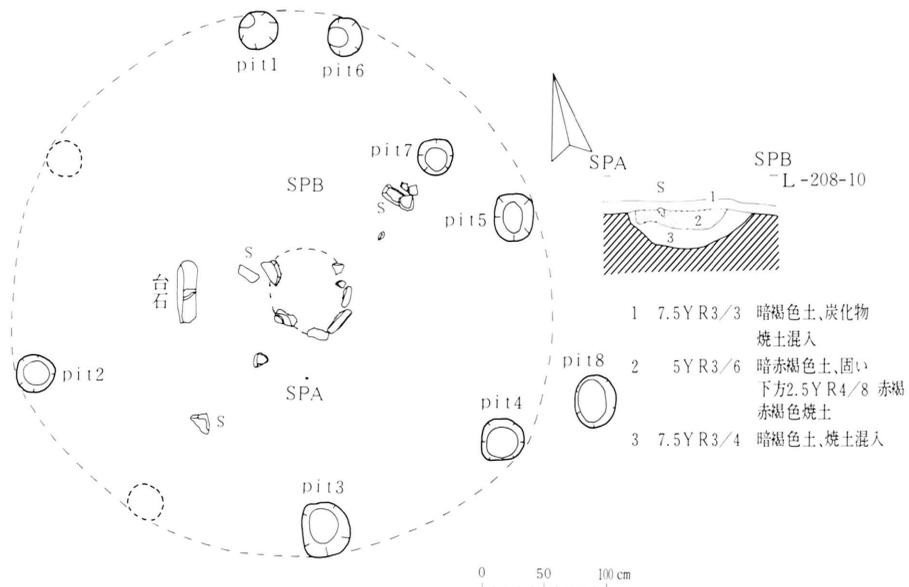
〔入口〕 ピット1・ピット6の間が70cmと狭くなっており入口と考えられる。この入口は住居跡の北に位置している。入口中央をたどると炉跡にあたる。

〔土壌〕 住居跡南東にあたりピット4の外側に位置する（ピット8）。30×40cmの長円形で深さは29cmである。特に遺物は見られなかった。

〔埋土遺物〕 埋土遺物の中には実測可能土器が含まれ、第33図1は第2 竪穴住居跡の埋土土器と接合する。土製品では鐸形土製品の破片、石器では石斧（第57図43）が含まれている。

第17表 第9 竪穴住居跡出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石 鉄	石 斧	スクレーパー	石 皿	磨 石	コ ア	フレーク	チップ	その他
数	16	178	27	3	0	1	0	0	0	1	1	8	1



第10竖穴住居跡 (第13図)

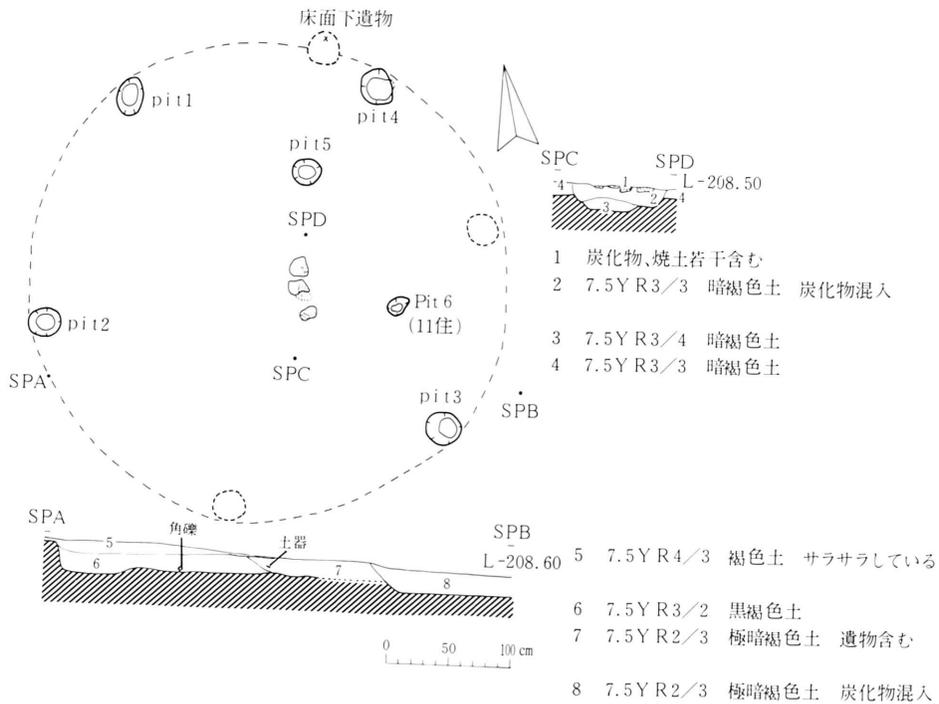
東半が第11竖穴住居跡と重複しており当住居跡が古い。検出された炭化材と柱穴の配置によって範囲を推定した。なお、炭化材は日本アイソトープ協会の¹⁴C年代測定の結果2070 ± 90年B・Pという年代が与えられている。平面形は柱穴間で390 cmをはかる円形と推測される。

〔炉跡〕 炭化材は多いが焼土が非常に少なく炉跡かどうか不明である。一応炉跡としておく。住居跡のほぼ中央にあり、3つのブロックに分かれる炭化材と極く少量の焼土からなる。

〔柱穴〕 ピット1～4の4個が住居跡の側柱を構成すると思われ、ピット2・3、ピット3・4の間がそれぞれ335 cm、275 cmであり中間に柱穴がはいると推測される。ピット6は第11住居跡の側柱である。

第18表 第10竖穴住居跡ピット一覧表

Pit No.	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6
大きさ	20 × 30	25 × 20	30 × 25	25 × 30	25 × 20	15 × 15
炉跡上面 (からの深さ)	207.980 (42)	208.049 (35)	207.760 (64)	207.897 (50.5)	207.800 (60)	
備考			胴部5	胴部		11住P1



第13図 第10竪穴住居跡

〔入口〕 ピット4の西に床面下21cmから遺物が出土しており、その地点とピット4との間
が60cmと狭く入口が想定される。それは住居跡の北に位置している。

〔埋土遺物〕 埋土遺物の中には第11住居跡の胴部破片31点、底部破片2点等が含まれ、第
45図4の復原可能土器を含む。

第19表 第10竪穴住居跡出土遺物一覧表

種 類	口縁部	胴部	底部	土製品	石	鉄	石	斧	スクレーパー	石	皿	磨	石	コ	ア	フレーク	チップ	その他
数	5	111	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0

第11竪穴住居跡（第14図、図版5の上）

西半が第10竪穴住居跡と重複しており当住居跡が新しい。平面図、断面図、遺物断面投影図
等の比較検討の結果西壁を把握することができた。範囲は遺物分布図をもとに炉跡、柱穴の配
置によって推定したが、確認された側柱柱穴が少なく床面下の遺物出土地点による所が大であ
る。直径420cmの正円に近い円形プランを呈すと思われる。

〔炉跡〕 住居跡のほぼ中央に25×20cmの焼土があり、炉縁石等の施設は認められなく地床
炉と考えられる。焼土の厚さは6cmで、その下に掘り込みをもつ。

〔柱穴〕 ピット1・4・6の3個が側柱を構成していると考えられ、ピット1・4の間に

2個、ピット6・1の間に2ないし3個の柱穴がはいると見られる。1・4間では床面下21.5cmから胴部破片が出土し、6・1間では床面下31.5cm、17.5cmからそれぞれ遺物が出土しており柱穴と推測される。ピット2は第10住居跡の側柱である。

第20表 第11竪穴住居跡ピット一覧表

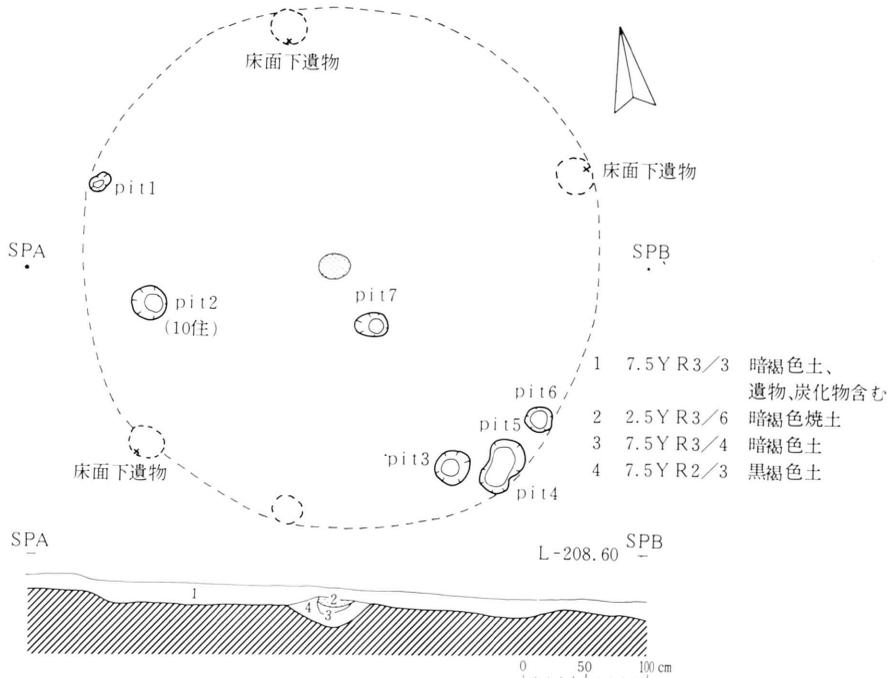
Pit No.	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7
大きさ	15 × 15	30 × 25	25 × 25	20 × 20	30 × 30	20 × 20	25 × 20
(炉跡上面からの深さ)		207.760 (49)	207.652 (60)	207.718 (53)		207.756 (49.5)	207.730 (52)
備考		10住P3		胴部 石 鏃	胴部		

〔入口〕 ピット4・ピット6の間が60cmと狭くっており入口が想定される。住居跡の南東部にあたる。

〔埋土遺物〕 埋土遺物の中には第10住居跡の重複部分の遺物が含まれ、石鏃（第56図15）、石筥（第57図33）を含む。

第21表 第11竪穴住居跡出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石 鏃	石 斧	スクレーパー	石 皿	磨 石	コ ア	フレイク	チップ	その他
数	29	240	9	0	1	0	1	0	0	6	1	14	1



第14図 第11竪穴住居跡

第12竪穴住居跡（第15図）

住居跡範囲は焼土と柱穴の配置によって推定したが、ピットが多く重複していると見られる。東1 m に炉跡を伴わない住居跡が推測される。北西に第4 袋状土壌があり、北に攪乱部分がある。平面形は円形か楕円形で長径が425 cmである。

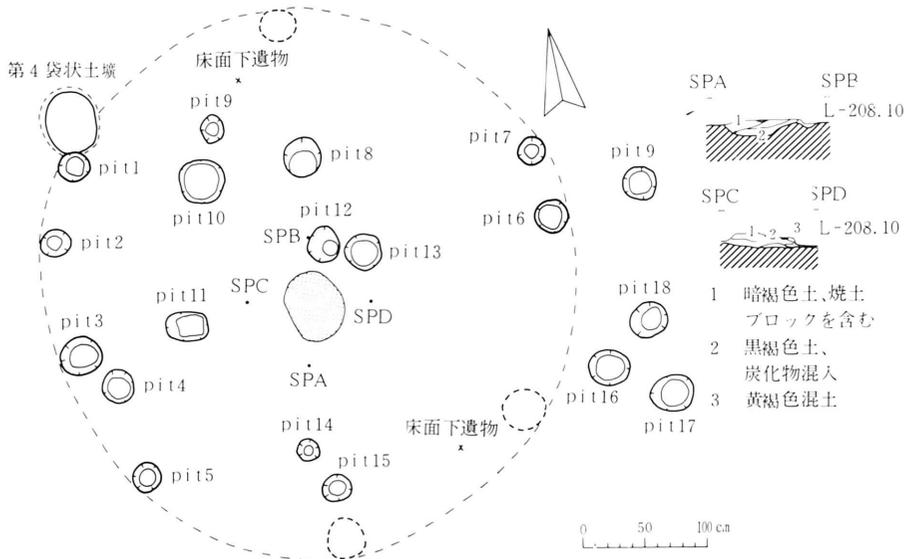
〔炉跡〕 住居跡のほぼ中央にあり僅かに東に寄る。55×50cmの不整形円形に焼土が散乱している。厚さが1～2 cmと極めて薄くボソボソしており焼土混土のようである。

〔柱穴〕 ピットは東西に多く見られ南北には少ない。炉跡に伴う柱穴はピット1・3、5～7の5個が側柱を構成し、ピット12は炉跡の北35cmにあり主柱と考えられる。ピット5・6間、ピット7・1間にそれぞれ1ないし2個の柱穴が予想される。これとは別にピット10・11・15・18・19の炉跡を伴わない住居跡が考えられる。

〔入口〕 ピット6・ピット7の間が55cmと狭くなっており入口が考えられる。住居跡の東

第22表 第12竪穴住居跡ピット一覧表

Pit No	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9	Pit 10	Pit 11	Pit 12	Pit 13	Pit 14	Pit 15	Pit 16	Pit 17	Pit 18	Pit 19
大きさ	25×25	25×20	35×30	25×25	20×20	25×25	20×20	25×30	15×20	35×35	35×20	25×25	30×30	15×15	25×20	35×30	35×30	30×25	25×25
お椀上の深さ	207 600	207 560	207 660	207 480	207 510	207 510	207 420	207 590		207 650	207 680	207 250	207 570	207 490	207 500	207 740	207 600	207 500	207 630
	(30)	(34)	(24)	(42)	(39)	(39)	(48)	(31)		(25)	(22)	(65)	(33)	(41)	(40)	(16)	(30)	(40)	(27)
備考												主柱							胴部4



第15図 第12竪穴住居跡

部に位置している。

〔埋土遺物〕 埋土遺物の中には第32図1の復原可能土器と丹塗土器が含まれている。

第23表 第12豎穴住居跡出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石	鉄	石	斧	スクレパー	石	皿	磨	石	コ	ア	フレイク	チップ	その他
数	12	93	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	3	3	1

第13豎穴住居跡（第16図）

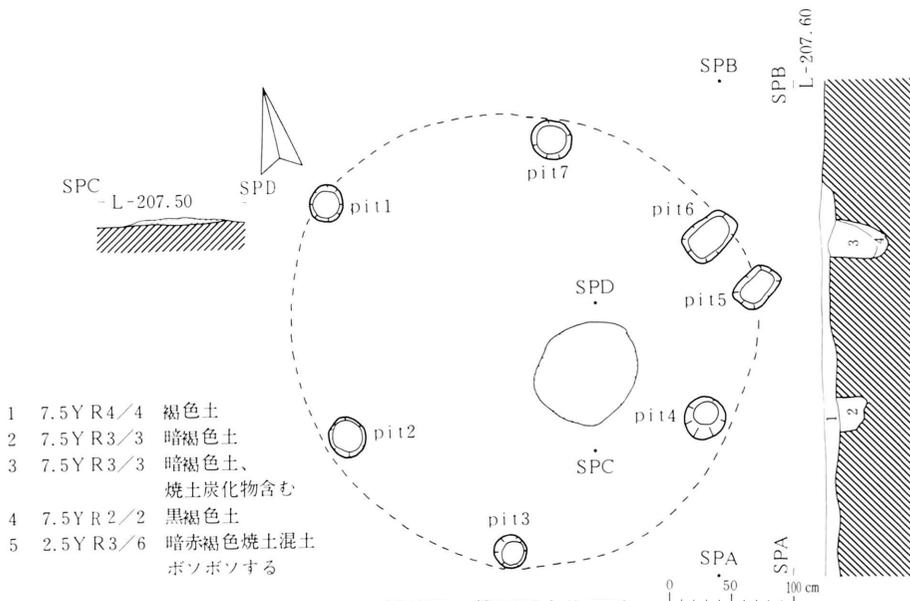
一次調査中に焼土が発見され、セクションに柱穴がかかって住居跡が想定されたものである。壁は削平されており焼土も薄く残っているだけである。第Ⅱ層を除去して柱穴を検出し、その配置によって推定した。柱穴間で385×365cmの円形である。

〔炉跡〕 住居跡中央から南東に寄り、直径85cmの円形に焼土が広がっていた。

焼土の厚さは5cmと薄くボソボソし、焼土混土のようである。

第24表 第13豎穴住居跡ピット一覧表

Pit No.	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7
大きさ	25×30	30×35	25×25	30×35	35×35	40×35	30×30
炉跡上面 (からの深さ)	207.020 (38)	207.070 (33)	206.940 (46)	206.810 (59)	206.840 (56)	206.910 (47)	207.130 (27)
備考							



第16図 第13豎穴住居跡

焼土は炉縁石の内側70×80cmにあり、厚さが10cmである。焼土下には掘り込みが認められ、焼土混土が堆積している。

〔柱穴〕 ピット1～5の全てが炉跡に伴なう側柱と見られる。ピット5・1間が320cmと大きく開いており、間に2個の柱穴が予想される。

第26表 第14竪穴住居跡ピット一覧表

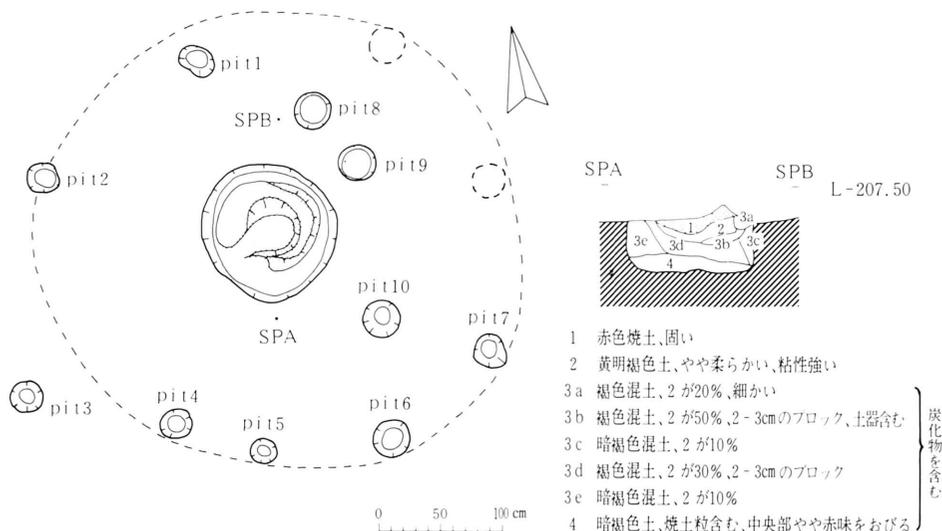
Pit No.	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5
大きさ	30×30	20×20	25×25	30×30	25×20
灯跡上面 (からの深さ)	207.748 (45)	207.854 (34.5)	207.653 (54.7)	207.676 (52.5)	
備考				胴部	

〔埋土遺物〕 範囲内の遺物は多数にのぼるが、伴出遺物を抽出できないので、全て下表に掲げておく。

第27表 第14竪穴住居跡出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石	鉄	石斧	スクレーパー	石皿	磨石	コア	フレーク	チップ	その他
数	15	159	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	17	0

第15竪穴住居跡（第18図）



第18図 第15竪穴住居跡

一次調査中に焼土が検出され断面に露出していたものである。範囲は炉跡と柱穴の配置によって推定した。平面形は柱穴間で415×370cmの楕円形プランをなす。

〔炉跡〕 住居跡のほぼ中央に85×70cmの範囲に焼土があり中央が窪んでいる。現地性の焼土で全体的に火熱を受けて固くなり厚さ15cmに達する。焼土の下に直径110cm、深さが40cmの土壌がある。埋土は4層に細分され1層は赤色焼土、2層は黄明褐色粘質土で炉跡構築土である。3層は褐色混土で炭化物を含み、4層は暗褐色混土で焼土・炭化物を含む。3・4層は人為的に埋められたものと見られ、炉跡のために構築された土壌と考えられる。2・3層間に土器が混入していた。

〔柱穴〕 ピット1・2・4～7の6個が側柱を構成していると見られる。ピット7・1間は330cmと大きく開いており中間に柱穴がはいると推測される。

第28表 第15竪穴住居跡ピット一覧表

Pit No	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9	Pit 10	Pit 11	Pit 12	Pit 13	Pit 14
大きさ	25×25	25×30	25×30	30×25	25×25	25×30	25×45	20×25	25×35	30×25	20×20	30×25	30×25	30×35
炉跡上面からの深さ	207.815 (18.5)	207.960 (4)	207.535 (46.5)	207.635 (36.5)	207.595 (40.5)	207.738 (26)	207.504 (49.5)	207.745 (25.5)	207.468 (53)	207.750 (25)	207.138 (26)	207.551 (45)	207.485 (51.5)	207.394 (60.5)
備考			胴部2				胴部2							

〔埋土遺物〕 埋土遺物の中には炉跡構築の際に混入したものが含まれる。破片で器形の復原できるものはないが、口縁部に耳状の突起を有するものである。範囲内に実測可能土器（第33図3）、石鏃（第56図14）を含む。

第29表 第15竪穴住居跡出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石鏃	石斧	スクレパー	石皿	磨石	コア	フレーク	チップ	その他
数	19	91	2	3	1	0	1	0	0	3	4	24	0

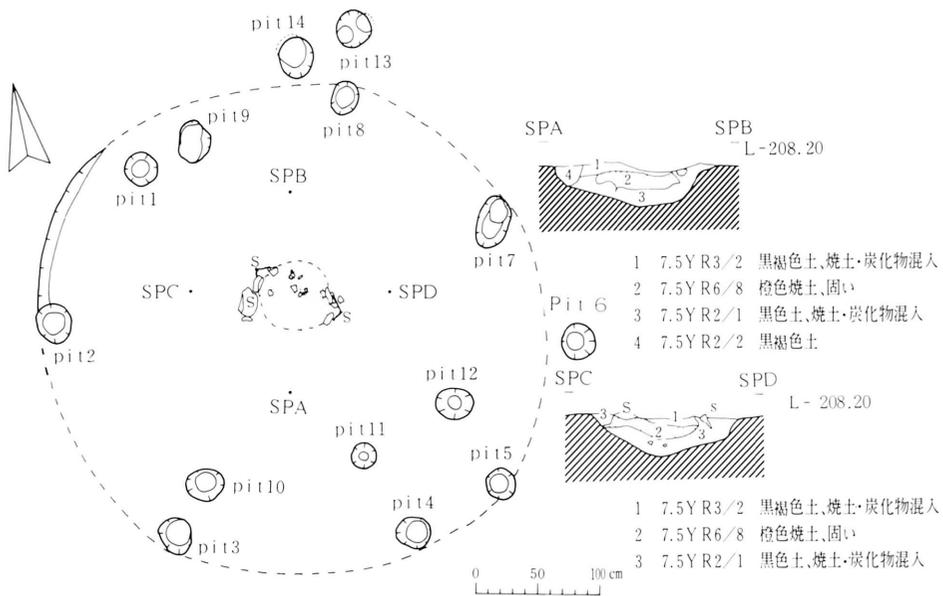
第16竪穴住居跡（第19図、図版4）

柱穴が多数検出され、北東50cmに炉跡を伴わない住居跡が推測される。炉跡と柱穴の配置、遺物の分布によって推定した。柱穴間で410×400cmの円形である。

〔炉跡〕 住居跡のほぼ中央にあり僅かに北に寄る。25から10cm前後の小さな川石をめぐらした石囲い炉で、焼土は炉縁石の内側にあり厚さが13cmである。炉縁石は内側に傾斜するように設置され、一部焼土に乗っている。焼土の下に掘り込みを有し焼土・炭化物を混入する。

第30表 第16竪穴住居跡ピット一覧表

Pit No	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9	Pit 10
大きさ	25×25	25×25	25×25	25×25	20×20	30×30	25×25	30×30	30×25	30×30
炉跡上面からの深さ	207.330 (7)	207.300 (10)	207.230 (17)	207.210 (19)	207.110 (29)	207.070 (33)	207.060 (34)	207.340 (6)	207.300 (10)	207.050 (35)
備考										



第19図 第16竪穴住居跡

〔柱穴〕 ピット1～5・7・8の7個が炉跡に伴なう側柱と考えられる。ピット7は85×55cmで2つの柱穴が接していると見られる。この外にピット10～12・7・14を側柱とする住居跡が推測される。

〔埋土遺物〕 埋土遺物の中には実測可能土器（第35図6）と石斧（第57図44）、使用痕のあるフレーク（第58図68）が含まれる。

第31表 第16竪穴住居跡出土遺物一覧表

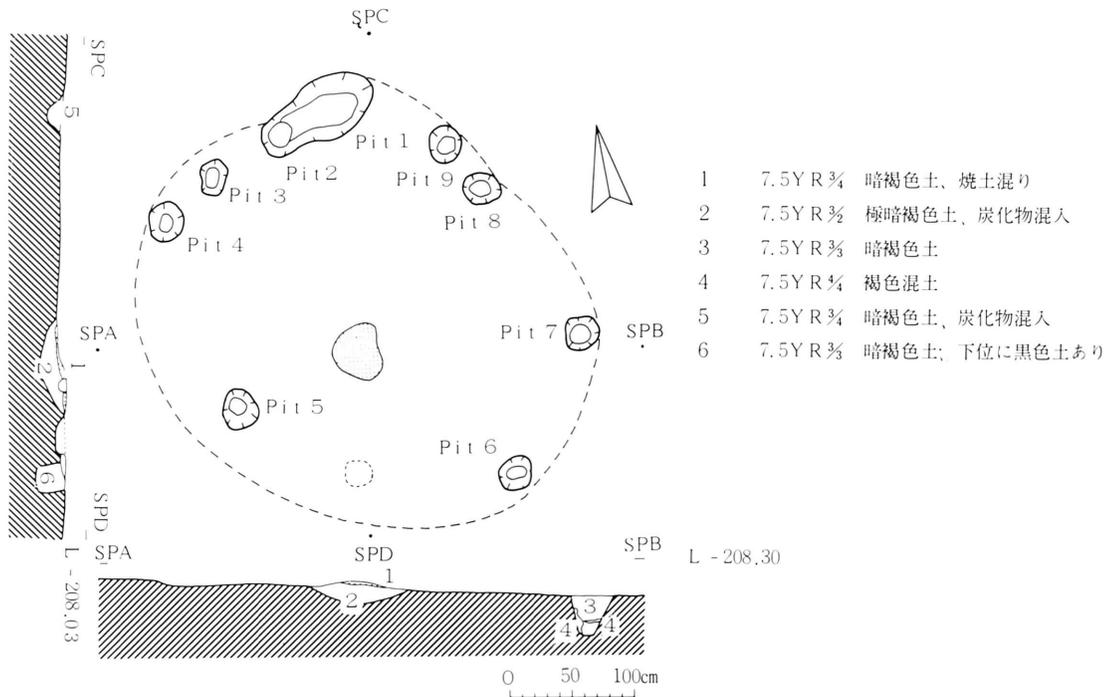
種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石 鉄	石 斧	スクレパー	石 皿	磨 石	コ ア	フレーク	チップ	その他
数	11	68	2	0	0	1	1	0	0	1	0	6	1

第17竪穴住居跡（第20図）

遺物が少なくかなり削平されていたもので、断面図と柱穴の配置によって推定した。380×310cmの小判形を呈し、当遺跡最小である。

〔炉跡〕 住居跡の中央に位置し、焼土のみの地床炉である。焼土は非常に薄く現地性焼土と見られないが、下に掘り込みを有す。

〔柱穴〕 ピット1・2・4～9が住居跡に伴なうと見られ、ピット1・9を除いた6個が側柱を構成していると見られる。



第20図 第17竪穴住居跡

第32表 第17竪穴住居跡ピット一覧表

Pit No.	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9
大きさ	65 × 50	30 × 30	20 × 25	30 × 30	30 × 30	25 × 25	30 × 30	30 × 25	25 × 30
深 さ	207.781 (32)		207.931 (17)	207.881 (22)	207.891 (21)	207.876 (22.5)	207.731 (37)	207.816 (28.5)	207.871 (23)
備 考									

〔埋土遺物〕 埋土遺物の中にはスクレパー（第58図71）が含まれる。

第33表 第17竪穴住居跡出土遺物一覧表

種 類	口縁部	胴 部	底 部	土製品	石 鏃	石 斧	スクレパー	石 皿	磨 石	コ ア	フレーク	チップ	その他
数	3	32	1	0	0	0	1	0	0	1	0	3	1

(2) 炉跡・焼土遺構

竪穴住居跡として確認されなかった焼土が9例ある。このうち炉縁石等の施設のあるものを炉跡、そうでないものを焼土遺構として説明する。

第1 炉跡（第21図）

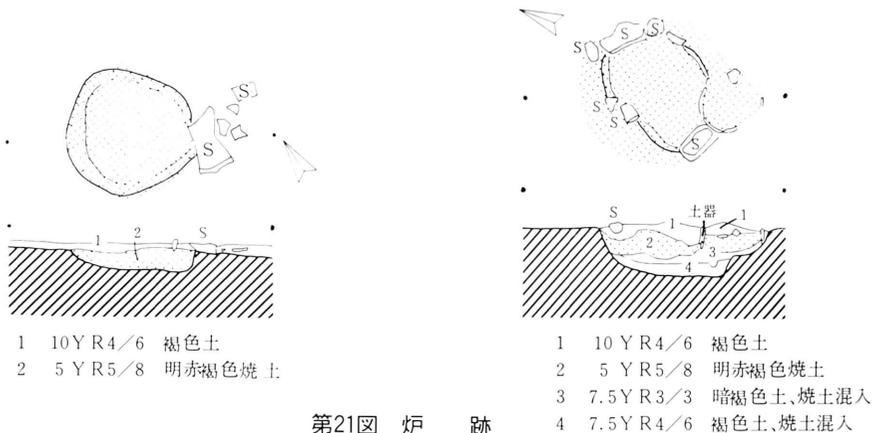
A d 12グリットから発見された直径70cmの焼土である。焼土の厚さは10cmに達し炉跡と見られる。南東部に扁平な石が乗っているが、特に火熱を受けた痕跡は見られない。周囲からピット8個が検出されたが竪穴住居跡としては確認されなかった。

第2 炉跡（第21図、図版6の上）

A g 6 グリットから検出された北西の石囲い炉と南西の埋設土器炉からなる複合炉である。炉縁石は7個発見され、西方の2個が中央にせり出し75×50cmの楕円状をなす。本来は直径80cmの円形を呈していたと思われる。炉縁石は横に、あるいは側縁を上を設置されている。石囲い炉に燃焼部があり焼土の厚さが13cmに達する。埋設土器（第39図5）は口縁部から肩部にかけての甕形土器で逆位に埋設していた。土器内にも焼土が認められる。焼土の下には掘り込みを有し、焼土混土が堆積している。周辺からピット15個が検出されたが、炉跡に伴うものは確認されなかった。

第1 焼土遺構

A g 53グリットから検出された焼土で、68×38cmの楕円形を呈し厚さが7cmである。焼土はブロック状を呈し炭化物を若干含む。A g 53グリットから131点の遺物が出土している。



第21図 炉 跡

第2 焼土遺構

A h 56グリットから検出されたもので調査地東端の崖際に位置する。100×40 cmの楕円状を呈し東西に2分されている。焼土はブロック状で密度の高い所がある。

第3 焼土遺構

A i 53グリットから検出された現地性の焼土で、強く火熱を受けて固くなり厚さ11cmに達する。石組み等の施設は認められなく地床炉と考えられる。90×50cmの楕円形で炭化物を含む。

A h 50グリットから285点の遺物が出土している。

第4 焼土遺構

A j 53グリットから発見された焼土のみである。規模は直径100 cmの円形で厚さは10cmである。ボンボンしており現地性焼土とは見られない。

以上の4 焼土は一次調査中に発見されたものであるが、作業の手違いにより記録されなかったものである。

第5 焼土遺構

調査終了後にB i 50グリットから発見された焼土で位置を確認するのみであった。上部は削平されており炉縁石等の施設は観察されなかった。70×60cmの円形で火熱を強く受けている。特に北側が強く受け厚さ22cmに達する。僅かに炭化物を含む。

第6 焼土遺構

B g 21グリットで検出されたもので、極めて微量の焼土が混入するものである。断面では確認できない。中央部が若干凹んでおり、石が観察される。焼土下の掘り込みははっきりしない。なお、炭化材は日本アイソトープ協会の¹⁴C年代測定の結果2020 ± 90年B・Pという年代が与えられている。

第7 焼土遺構

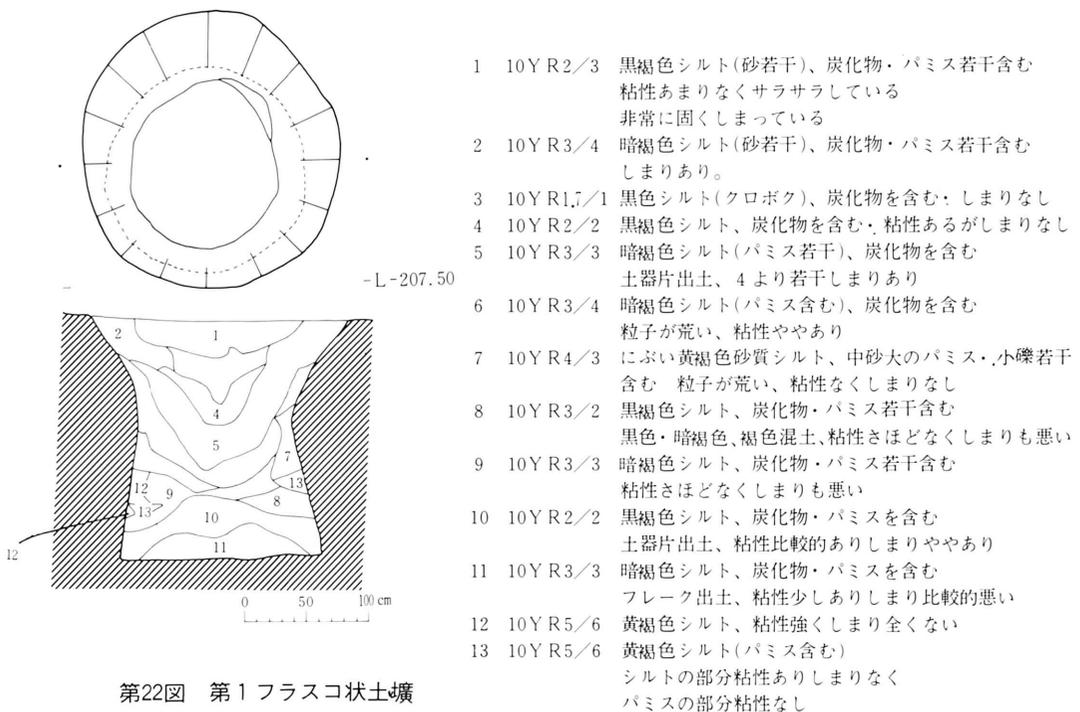
C b 21グリットからC c 21グリットにかけて発見されたもので、記録できないくらい微量の焼土が認められたものである。近くから川石1個が発見されたが火熱を受けた痕跡は認められなかった。

(3) 土壌

円筒形で柱穴様のもの以外で人為的に構築されたものを土壙とみなした。形状によりフラスコ状土壙・袋状土壙・溝状土壙に分類した。フラスコ状土壙は平面円形で断面が底部の平らな三角フラスコ状を呈したものである。袋状土壙は開口部より底部あるいは胴部が広がっているもので、底部が鍋底状になっているものである。溝状土壙は平面形が細長い溝状を呈し、断面が幅の狭い円筒状となるものである。以下個々の土壙について説明する。

第1 フラスコ状土壙（第22図、図版7の中）

第1 竪穴住居跡の南東部にあたり住居跡を切っている。開口部が228 × 222 cmで、底部が158 × 164 cmである。断面は下半が直線的な壁をもつフラスコ状を呈し、上半が逆に大きく開く。最狭部は開口部より80cm下がった所にあり、116 × 135 cmを計測する。深さは検出面から197cmである。埋土は凸レンズ状、U字状に堆積する自然堆積で、黒色・黒褐色・暗褐色・褐色土に細分できる。褐色土は壁の崩落したもので最狭部の下に堆積し、凸状堆積とU字状堆積とを二分する。黒色・黒褐色・暗褐色土は壁の崩落土と流入土の混土で、汚れの度合いにより違いが生じたものである。遺物は最下層を含むすべての層から出土している。出土遺物は下表のとおりで、遺物包含層の土器と接合するものが2点含まれる。5例は接合して復原可能となる（第



第22図 第1 フラスコ状土壙

32図2)。

第34表 第1 フラスコ状土壌出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石 鏃	石 斧	スクレパー	石 皿	磨 石	コ ア	フレーク	チップ	その他
数	4	27	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第2 フラスコ状土壌 (第23図、図版7の下)

第1 竪穴住居跡の南方6 mの位置にある。一部ブルドーザーによって攪乱されていた。縦に長く均整のとれたフラスコ状を呈し、開口部が若干開く。開口部で107×115 cmの不整円形、底部が171×181 cm、最狭部が30 cm下がった所にあり90×100 cmである。深さは217 cmである。埋土は黒色・黒褐色・褐色土に細分されるが、褐色土が大部分を占める。遺物は褐色土の下位と上位に分れ褐色土には含まれない。下位の遺物の中には遺物包含層の遺物と接合するものがある。出土遺物は下表のとおりである。この中には復原可能土器 (第32図6) を含む。

第35表 第2 フラスコ状土壌出土遺物一覧表

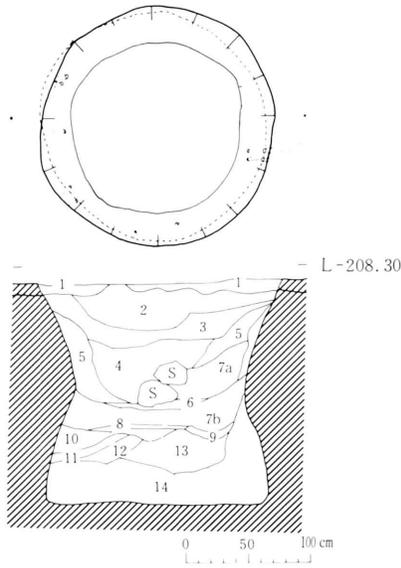
種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石 鏃	石 斧	スクレパー	石 皿	磨 石	コ ア	フレーク	チップ	その他
数	6	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

a 10Y R5/8 黄褐色土
 b 7.5Y R3/2 黒褐色土
 c 暗褐色混土、黄褐色シルト混土で1 2 3に分けた
 d 7.5Y R3/1 黒褐色土・下層に笹、草根が堆積しており新しい攪乱とみられる

1 7.5Y R2/1 黒色シルト腐植土、粘性がありしまっている
 2 10Y R3/3 暗褐色シルト、団子になる程度にしまっている
 3 7.5Y R2/2 黒褐色シルト、明褐色シルトを微量に含む
 4a 10Y R5/8 黄褐色シルト、しまっている
 4b 10Y R5/8 黄褐色シルト、中砂若干ありしまりが無い。
 4c 10Y R4/6 褐色砂質シルト、大砂あり、ポロポロしている
 青白砂若干含む

5 10Y R3/2 黒褐色シルト、明褐色パミス若干含む
 ザラザラして粘性あまりない
 6 10Y R3/3 暗褐色砂質シルト、明褐色パミス若干含む
 サラサラして粘性僅かあり
 7 10Y R2/4 黒褐色シルト、しまりあまりなし、炭化物・縄文土器を含む
 8 10Y R4/4 褐色混土、黄褐色暗褐色混土、しまりよい炭化物を含む
 9a 10Y R2/2 黒褐色混土、明褐色黒褐色混土、炭化物若干含む
 粘性にあり
 9b 10Y R4/3 にぶい黄褐色混土、明褐色暗褐色混土、火山礫パミス混入、粘性あり
 9c 10Y R3/2 黒褐色混土、明褐色黒褐色混土、炭化物若干パミス混入、粘性あり
 10 10Y R2/2 黒褐色混土、黄褐色黒褐色混土、炭化物パミス若干混入、粘性あり
 11 10Y R3/3 暗褐色混土、黄褐色黒褐色混土、炭化物砂状パミス若干混入、粘性あり
 12a 10Y R2/2 黒褐色混土、黄褐色黒褐色混土、粒子が粗くサラサラしている
 12b 10Y R4/4 褐色混土黄褐色暗褐色混土、粒子が粗くサラサラしている
 12c 10Y R4/6 褐色混土、黄褐色暗褐色混土、粒子がサラサラしているパミス若干含む

第23図 第2 フラスコ状土壌



- 1 7.5Y R2/3 黒褐色土
- 2 7.5Y R1.7/1 黒色土、赤褐色バミス若干混入
- 3 7.5Y R2/2 黒褐色土、赤褐色バミス混入
- 4 7.5Y R1.7/1 黒色土、炭化物を含む、柔かい
- 5 7.5Y R2/2 黒褐色土、柔らかくボンボンしている
- 6 2.5Y R3/6 暗赤褐色焼土、炭化物混入。
- 7a 7.5Y R3/4 暗褐色混土、褐色黒色(4)混土
- 7b 7.5Y R3/4 暗褐色混土、褐色黒褐色(5)混土。
- 8 7.5Y R2/1 黒色土
- 9 7.5Y R2/3 暗褐色土、7bに類似
- 10 7.5Y R4/6 褐色混土、明褐色暗褐色混土
- 11 7.5Y R2/2 黒褐色土
- 12 7.5Y R4/6 褐色土
- 13 7.5Y R2/1 黒色土
- 14 7.5Y R3/2 黒褐色混土、明褐色黒褐色混土

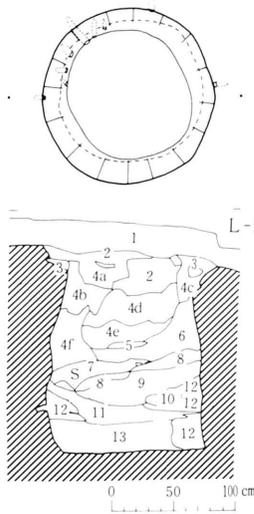
第24図 第3フラスコ状土壙

第3フラスコ状土壙（第24図、図版7の上）

第2 竪穴住居跡の北西に位置する。断面形は下半がフラスコ状を呈し、上半が逆に大きく開いている。開口部で188×194 cm、底部で180×184 cm、最狭部は中ごろにあり136×138 cmを計測する。深さは検出面から183 cmである。壁面には小さな穴が見られ、右回りのラセン状に都合14個穿たれている。小穴は直径2～3 cmで、深さはまちまちであるが34 cmに達するものがある。穿たれた角度も水平、上向き、下向き等と一定しない。埋土は最狭部付近の焼土を境に遺物を含むⅠ層と含まないⅡ層に大別される。Ⅰ層は黒色混土か黒褐色混土で単層と見られる。下位に大礫があり全体に遺物が見られる。Ⅱ層はⅡ a 暗褐色土層・Ⅱ b 黒色土の互層・Ⅱ c 黒褐色混土層の3層に細分できる。Ⅰ層は遺物包含層の流入堆積により形成されたと考え、Ⅱ層は壁の崩落と表土の落下による自然堆積によって形成されたと考えられる。間に挟まっている焼土は流入・投入の両者が考えられるが、内部で形成された現地性の焼土とは見られない。なお、土壙内の炭化物は日本アイソトープ協会の¹⁴C年代測定の結果3690±100年B・Pという年代が与えられている。出土遺物は次のとおりで、この中には第2 竪穴住居跡の埋土遺物と接合するものがある。また、復原可能となるものがある（第32図3・10、第47図2）。

第36表 第3フラスコ状土壙出土遺物一覧表

種類	11 緑部	胴部	底部	土製品	石	鉄	石 斧	スクレーパー	石 皿	磨	石 コア	フレーク	チップ	その他
数	7	59	6	0	0	0	0	1	0	0	2	1	4	0



- 1 7.5Y R2/3 極暗褐色土、黒色土がブロック状に混入
- 2 7.5Y R2/1 黒色土、炭化物パミス混入、サラサラしている
- 3 7.5Y R4/6 褐色シルト、Ⅲ層の崩壊土
- 4a 7.5Y R2/2 黒褐色土、パミス混入、粘性あり
- 4b 7.5Y R2/2 黒褐色混土、褐色黒色混土、パミス混入
- 4c 10Y R3/2 黒褐色混土、褐色土微量混入
- 4d 10Y R3/2 黒褐色混土、炭化物混入
- 4e 10Y R3/2 黒褐色混土、炭化物焼土パミス混入
- 4f 10Y R2/2 黒褐色混土、炭化物混入
- 5 7.5Y R3/3 暗褐色土、焼土炭化物を多量に含む
- 6 10Y R3/2 黒褐色土、炭化物を多量に含む
- 7 10Y R2/1 黒色土、炭化物を多量に含む
- 8 10Y R2/2 黒褐色土、炭化物若干 パミス混入
- 9 10Y R2/1 黒色土、炭化物微量混入、サラサラしている
- 10 10Y R2/2 黒褐色混土、褐色黒色混土、パミス混入
- 11 10Y R2/1 黒色土、炭化物微量 パミス混入
- 12 10Y R5/6 黄褐色土、スコリア混入、崩壊土、
- 13 10Y R2/2 黒褐色土、炭化物焼土混入

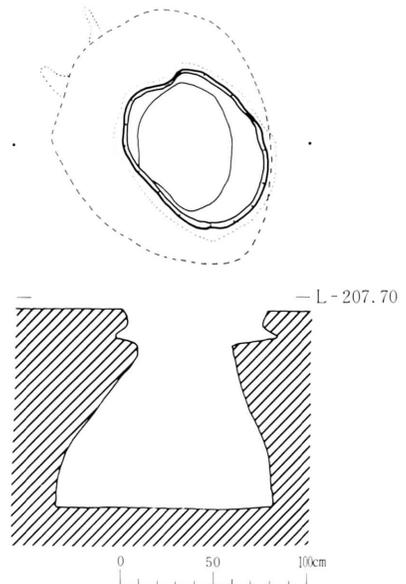
第25図 第4フラスコ状土壙

第4フラスコ状土壙（第25図、図版8左右）

第7 竪穴住居跡の南方に位置し、第9 竪穴住居跡の北東にあたる。開口部が直径 140 cm で、断面形は円筒形に近いフラスコ状を呈し、急激に開く開口部をもつ。底部が直径 114 cm の円形で平坦であり、最狭部が開口部から 30 cm 下がった所にあり 100 × 104 cm をはかる。深さは 161 cm である。第3 フラスコ状土壙と同様壁面に小さな穴が穿たれている。調査の関係上壁面全体の観察ができかねたが、北半で 9 例検証された。埋土は黒色土・黒褐色土・黄褐色土に細分される。黄褐色土は壁の崩壊土である。出土遺物は下表のとおりで 5 例は第7 竪穴住居跡の埋土遺物と接合して復原可能となる（第32図4）。

第37表 第4フラスコ状土壙出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石 鏃	石 斧	
数	5	36	1	4	0	0	
スクレパー	石	皿	磨	石	コ	ア	
0	0	0	0	0	0	0	
					フレーク	チップ	その他
					0	5	1



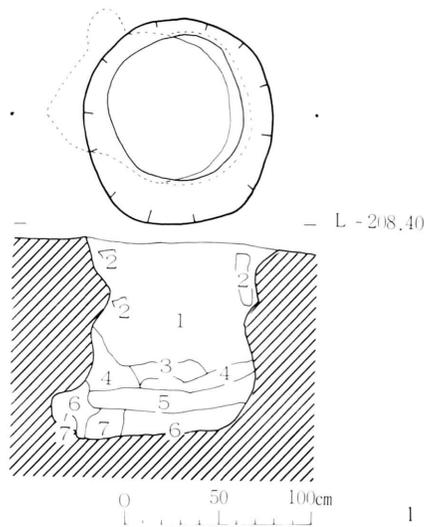
第26図 第5フラスコ状土壙

第5フラスコ状土壙（第26図）

第4 フラスコ状土壇の西方、第9 竪穴住居跡の北西部にあたり住居跡に切られている。平面形は86×65cmの楕円形で、底部が138×114cmで南東部が細くなる卵形である。断面形はフラスコ状を呈し、口縁部近くに挟り込みがある。それは94×72cm、その下の最狭部が63×55cmで深さが105cmである。北西側では底部が大きく入り込み、南東側は少ない。底部は平坦である。埋土は黒色土の単層で、挟り込みの段上でフレークが発見された。

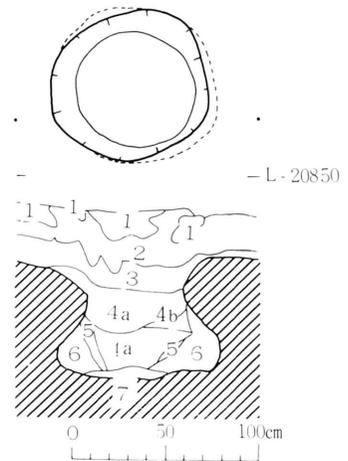
第6 フラスコ状土壇（第27図、図版9の上中）

第8 竪穴住居跡の西3mに位置する。第Ⅱ層から検出され深さは100cmである。断面形は北西に張り出す靴形を呈し、開口部がほぼ直に立ち上がる。開口部100×108cmで30cm下の最狭部が72×77cm、底部が98×73cmである。壁の崩落が著しく壁面は凹凸をなす。底部はほぼ平坦で端の部分が鍋底状に立ち上がる。埋土は黒色土・黒褐色土・褐色土の3層に細分できる。最下層と中項から遺物が出土しており遺物を含む単層と考えられる。その遺物は包含層遺物と接合する。褐色土は壁の崩落土であり、靴先状の挟り込みも崩壊によるものである。開口部の両端に見られる褐色ブロックは、崩壊過程を示す好資料である。



- 1 10Y R ⅔ 黒褐色土炭化物混入
- 2 10Y R ⅔ 褐色土固く粘性あり
- 3 10Y R ⅔ 黒色土炭化物焼土微量混入
- 4 10Y R ⅔ 黒褐色土炭化物パミス混入
- 5 10Y R ⅔ 褐色土炭化物微量混入粘性なし
- 6 10Y R ⅔ 黒褐色混土
- 7 10Y R ⅔ 褐色土崩壊土

第6 フラスコ状土壇



- 1 7.5Y R ⅔ 暗褐色土
- 2 7.5Y R ⅔ 黒褐色土
- 3 7.5Y R ⅔ 暗褐色土炭化物混入
- 4a 7.5Y R ⅔ 黒色土炭化物混入
- 4b 7.5Y R ⅔ 黒褐色土炭化物混入
- 5 7.5Y R ⅔ 褐色土崩壊土
- 6 7.5Y R ⅔ 極暗褐色土パミスを含む
- 7 7.5Y R ⅔ 黒褐色混土黒褐色パミスを含む

第7 フラスコ状土壇

第27図

第38表 第6 フラスコ状土壇出土遺物一覧表

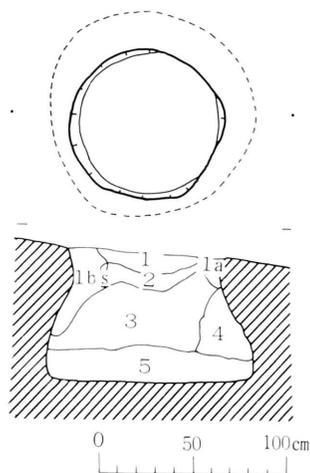
種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石 鉄	石 斧	スクレーパー	石 皿	磨 石	コ ア	フレイク	チップ	その他
数	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0

第7 フラスコ状土壇（第27図）

第14 堅穴住居跡の北西に接する。断面形はフラスコ状よりむしろ袋状を呈し、開口部が開く。当遺跡では最小となる。82×84cmの底部は凹凸があるがほぼ平で端部が鍋底状に立ち上がる。60×54cmの最狭部は「く」の字状に曲がり、78×80cmの開口部へと続く。深さは60cmである。埋土は黒色土、黒褐色混土、褐色土に分けられ、黒褐色混土は色調によりさらに細分できる。黒色土・黒褐色土は堆積土で、褐色土は崩壊土である。いずれも自然堆積によるもので、遺物は全く含まれていない。

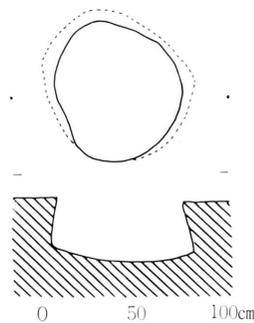
第8 フラスコ状土壇（第28図）

第7 フラスコ状土壇の南、第14 堅穴住居跡の西にあり、一部住居跡を切っている。開口部は82×80cmの円形で、10cm下がった所に最狭部がある。78×74cmで底部が直径108cmである。検出面からの深さは68cmで底部は平坦である。埋土は黒色土と暗褐色土であるが、遺物は両層か



- 1a 7.5Y R 3/4 暗褐色土
- 1b 7.5Y R 3/4 暗褐色混土
- 2 7.5Y R 3/4 黒褐色土炭化物混入
- 3 7.5Y R 1 1/4 黒色土焼土混入
- 4 7.5Y R 3/4 黒色土
- 5 7.5Y R 3/4 黒色土パミスを含む

第8 フラスコ状土壇



第9 フラスコ状土壇

第28図

ら出土しており単層と考えられる。

第39表 第8 フラスコ状土壙出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石 鉄	石 斧	スクレーパー	石 皿	磨 石	コ ア	フレーク	チップ	その他
数	1	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第9 フラスコ状土壙（第28図）

C a 12グリットで発見された平面円形の土壙である。近くから竪穴住居跡が検出されず、単独で存在する。開口部が88×90cm、底部が87×99cm、深さが28cmである。底部が平坦で水平であり、壁が内傾しながら立ち上がる。フラスコ状土壙の底部近くの残存部と考えられる。埋土は黒褐色土で6点の土器片が出土している。この中には包含層遺物と接合するものがある。

第40表 第9 フラスコ状土壙出土遺物一覧表

種類	口縁部	胴部	底部	土製品	石 鉄	石 斧	スクレーパー	石 皿	磨 石	コ ア	フレーク	チップ	その他
数	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

この他には工事中に発見されたものがある。中から鐔形土製品(図版24の1)が出土している。

第1 袋状土壙（第29図）

第7 竪穴住居跡の北方約3 mに位置する。北西部は底部が約10cm入り込む袋状で、南東部は開いている。現状では開口部が開いているが崩落の褐色土が認められ、本来は北西部と同様に入り込んでいたものと思われる。埋土は黒褐色土の単層で胴部破片10点が出土している。

第2 袋状土壙（第29図）

第6 竪穴住居跡の南東に位置する。開口部より底部が広い。小型のフラスコ状土壙を思わせる。開口部66×72cmを計測するが、掘り上げ段階で崩れたため広がっている。底部が76×79cmで鍋底状で、深さは33cmである。埋土は明褐色・暗褐色の混土で中央に角礫が入っていた。底部近くから口縁部破片と胴部破片の2点が出土している。

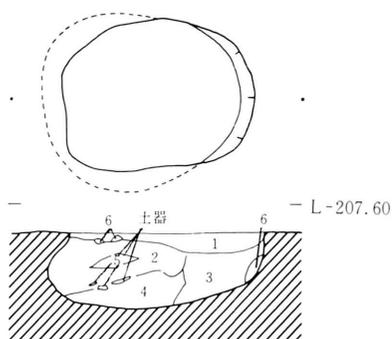
第3 袋状土壙（第29図）

第11竪穴住居跡の北方にあたり、東西に長い楕円形の土壙である。底部も東西に長い楕円形で壁は丸味をもってオーバーハングする。開口部が58×50cm、底部が62×52cmで、深さが33cmである。開口部は崩れたため検出時より広がっている。埋土は黒褐色土で遺物は含まない。

第4 袋状土壙（第29図）

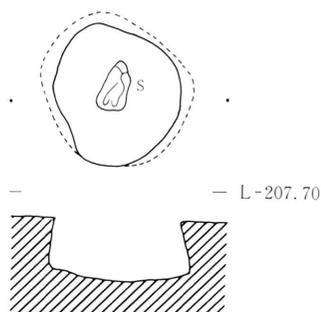
第12竪穴住居跡の北西部に位置し、開口部40×50cm、深さ42cmの土壙である。底部は48×53cmで開口部より若干広い。埋土は黒褐色混土で、土壙南端に口縁部、胴部破片がそれぞれ1点出土している。

第1袋状土壌

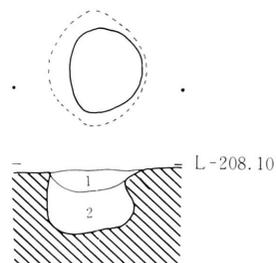


- 1 10Y R3/3 暗褐色土、炭化物若干含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色土、炭化物若干混入
- 3 10Y R2/2 黒褐色土、炭化物若干、パミス混入
- 4 10Y R3/3 暗褐色土、パミス混入
- 5 10Y R3/3 暗褐色土、小石、パミスを含む
- 6 10Y R6/8 明褐色土、粘性あり、崩壊土

第2袋状土壌

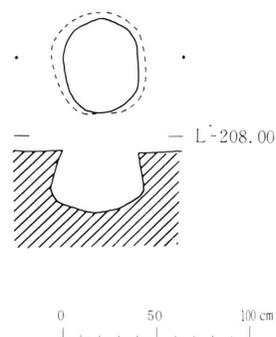


第3袋状土壌



- 1 7.5Y R3/4 暗褐色土、焼土微量に含む
- 2 7.5Y R2/2 黒褐色土、焼土粒混入

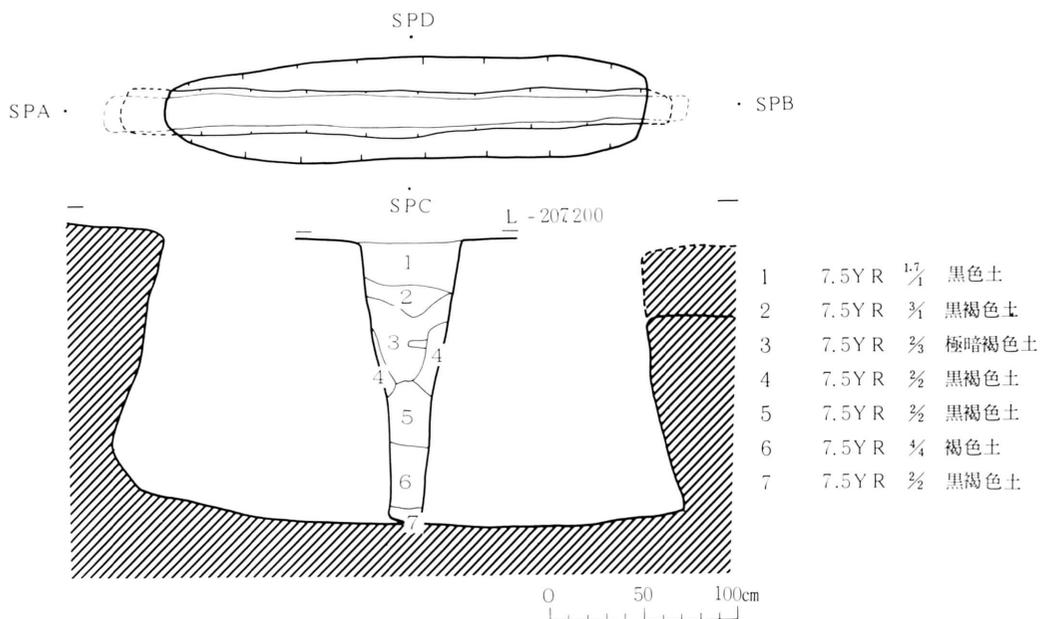
第4袋状土壌



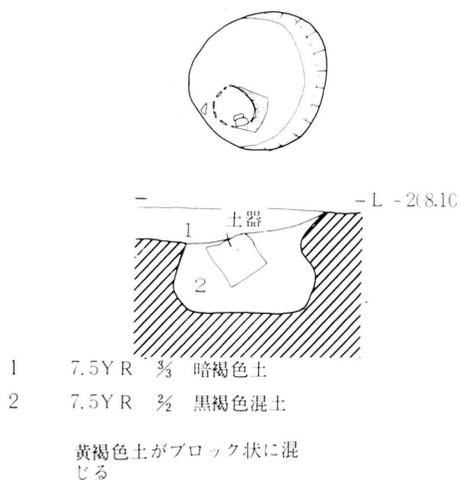
第29図 袋状土壌

溝状土壌（第30図、図版8の下）

今回の調査では1基単独で検出された。溝状土壌は調査範囲のほぼ南端に位置し、段丘崖からおよそ20m内側に入った南東緩斜面上にある。ちょうど平坦部から斜面に移行する部分にあたる。平面形は細長い溝状を呈し、長軸方向が南東を示し、等高線とほぼ直行する。断面形は長軸方向で底部が広がる台形を成し、短軸方向で細長い円筒形を示す。底部から中頃までが筒状でそれ以上が若干開き気味である。底部は平坦で両端が上がり気味で、それが最大値となる。南東部で24cm、北西部で30cm入り込んでいる。開口部が256×58cm、底部が310×16cm、深さが148cmである。埋土は黒色土・褐色土・暗褐色土・黒色土の順に堆積している。壁の崩落と表土の流入による自然堆積である。埋土の中には遺物は全く見られなく、遺物包含層の形成段階にはすでに埋没していたと見られる。



第30図 溝状土壌



第31図 埋設土器

(4) 埋設土器 (第31図、図版9の下)

第3 フラスコ状土壌の北東にあたり A h 15 グリットに位置する。土壌東端に寄り逆位に設置され、幾分南に傾斜する。土壌は直径75cmの円形をなし深さは北側で52cm、南側で35cmである。断面は袋状を呈し鍋底状に立ち上がる。埋土は黒褐色混土でⅡc層とⅢ層の混土で黄褐色土がブロック状に混在する。人為的に埋設されたことを示す。土器内から骨片等は検出されなかった。

埋設土器には平口縁の甕形土器を利用し、体部下半は欠失している。口縁部から頸部にかけては無文で、下半は網目状撚糸文を地文とする。口縁から体部上半にかけて沈線による装飾文を付す。口唇部は竹管による連続的な刺突を有す。

倒立状態にしかも人為的に埋設されており一般に言われる埋葬施設と考えられる。

2. 出土遺物

(1) 出土土器について

縄文時代の土器のうち、実測可能な資料51点、口縁部破片資料87点、地文以外の文様表現が認められる胴部片資料162点、地文のみの資料132点、底部資料216点である。出土破片総数は約1万点である。これらの内、実測可能な資料に重点をおき、1 胎土、2 成形技法、3 文様表現技法、4 文様単位、5 文様帯、6 器形について観察し、分類作業を行った。

a 土器観察

胎 土

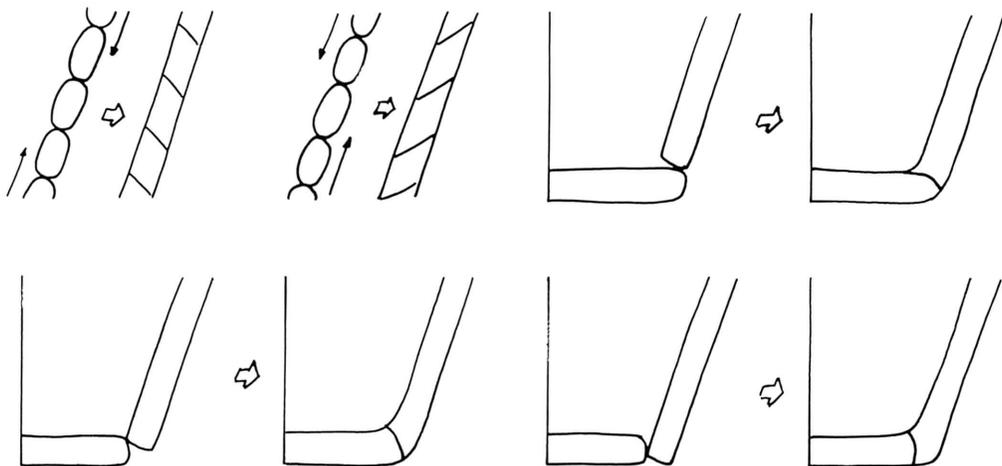
特性を理解するために、素地土、混入物、色調について観察を行なった。

素地土が少く砂質のものは、一般に赤みが強く、素地土が多く粘土質のものは灰色から浅黄褐色に近く、内外の色調も同じという傾向が見られる。混入物のうち石英や角閃石を含むものは案外多い、雲母を含むものも若干見られる。角閃石を含むものは成形、焼成とも良く、結晶質の石英を含むものも同様な傾向が見られる。全般的には火山砂を含む傾向が見られる。全体的特性の把握に際しては、同一破片でも外観が異なり、砂質が強調されたり、色調が異ったりしているのは、前述の事柄の他、焼成の見合や、破片となってから露天にさらされ、その後埋没したなどの履歴環境の違いによるものであろうから、それらの事も考慮し、又更にそれらの相関関係も把握するように努めた。分散破片同定作業の一過程として有効であった。

成形技法

土器の割れ口等より、素地土積上げによるものと推定される。器面に対する断口の傾きは、積上げにより生じた凹凸をなくするための、なでつけの方向等に応じたものと考えられ、当調査地では、外側に傾斜のものが大半である。底の場合は下の模式図表のどの例も見られる。

第 41 図 表



文様表現技法（器面調整技法）

成形に際してこの事項を想定して行うものであろうが、一応区分して観察して見る。又基本的な器面調整についてもこの項に区分する。これらの技法については、下記の表のようになる。

第 42 表

	名 称	特 徴（留意事項等）	
器面調整技法	ケズリ	器面の素地上をヘラ等の工具で削り取る。素地上の砂粒が移動や脱落をする。	
	ナデ	器面の凹凸を少なくするため皮等で押圧、なでつけを行う。平行なときれときれの細い「すじ」がつく。	
	ミガキ	砂粒を沈め器面を緻密にするため工具で研磨する。光沢を生じる場合多い。	
文様表現	沈文	縄文	縄の種類（撚り方、本数）、押圧の仕方（押圧、回転組合せ）
		刺突文	工具（竹管、棒等）、角度（正面、斜方向、交互、押圧的）
		沈線文	工具（竹、小枝の割り口等）
		凹文	工具（指爪等も含む）
現技法	隆文	隆文（貼付）	ボタン状・帯状・把手状
		隆起線文	貼付・引き出しにより線文様をなす。工具等による調整も有る。
	隆沈文	隆文 + 沈文	それぞれの効果を強調、調和させる。 “ ”
	磨消縄文	区画磨消、充填磨消	地文の施文の仕方と磨消（磨き調整）の程度で細分される。

文 様

文様表現においても成形の段階から、製作者における意匠を基に、考慮し行なわれている。又描出に際して、文様表現技法を駆使し、技法が効果的に生かされる文様を具現するような考慮をされている。意匠とは何か、その意図されたものは何か、用途との関係は、という根本的な問題はあがるが、ここでは具現されている文様そのものについて考えてみた。意匠創作において事物の抽象等の過程を経て生み出された文様は、器面上に割付られ、文様の展開が行われる。この様にして文様帯が構成されるわけであるが、ここでは割付られた部分の構成を考えてみよう。文様を構成するものの部分部分は、製作者の意図すると否にかかわらず、要素として考える事が出来、又その要素の組合せで構成の単位が考えられる。要素のみで単位となるものもある。これらの単位について製作者の意図とは無関係に名称を与え、表を作って見た。絶対的な名称については今後の課題となる。要素、単位の分解においても適切さを欠く面があると思われるので今後の課題としたい。

文様帯について

土器観察に際し、器面を一周する文様展開を見る事ができる。この様な文様帯の色々複雑な関係を整理した単純な事柄（要素）における相関関係は、その土器の特徴を示す事になる。この際、土器のどの部位にどのような文様帯が施されているか着目し把えたい。第44図表は以上の事柄に従って考えられた分類図である。図においては器種に対応した分類上の位置づけも示されているが、文中においては、文様帯の位置を主眼におきどの様な文様帯があるか器種に対応さ

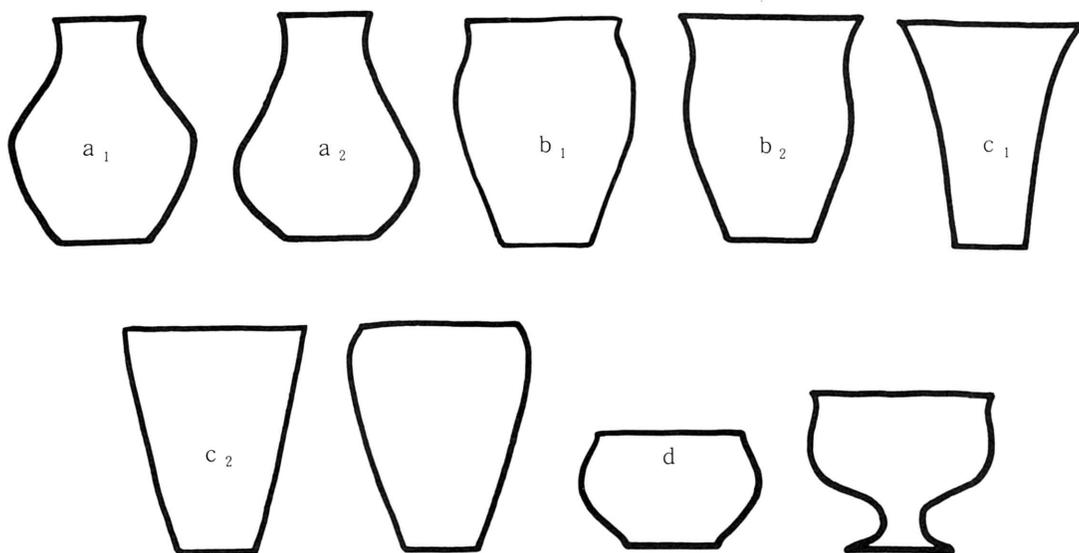
第 43 表 文 様 単 位 の 模 式

文 様 単 位	文 様 表 現 技 法	模 式 図	文 様 単 位	文 様 表 現 技 法	模 式 図
平 行 文	沈 線 文 隆 沈 文 (磨 消 縄 文)		幾 何 学 文	沈 線 文 磨 消 縄 文	
方 形 文	沈 線 文 磨 消 縄 文		鉤 状 文	沈 線 文 磨 消 縄 文	
渦 卷 文	沈 線 文 磨 消 縄 文		紡 錘 状 文	沈 線 文 磨 消 縄 文	
U (∩) 字 文	沈 線 文 磨 消 縄 文		核 果 状 文	沈 線 文 磨 消 縄 文	
孤 状 文 (連 孤 状 文)	沈 線 文 磨 消 縄 文		莢 豆 状 文	沈 線 文 磨 消 縄 文	
波 状 文	沈 線 文 磨 消 縄 文		入 組 状 文	沈 線 文 磨 消 縄 文	
蛇 行 (懸 垂) 文	沈 線 文 磨 消 縄 文		蛇 行 雲 形 文	沈 線 文 磨 消 縄 文	
円 文	沈 線 文 隆 沈 文 磨 消 縄 文		羽 状 文	沈 線 文 磨 消 縄 文	
楕 円 文	沈 線 文 磨 消 縄 文		(クサビ状文) 三 角 形 文	沈 線 文 磨 消 縄 文	
隆 帯 文	隆 文 隆 沈 文 (磨 消 隆 沈 文)		隆 帯 区 画 文	隆 文 隆 沈 文 (磨 消 隆 沈 文)	

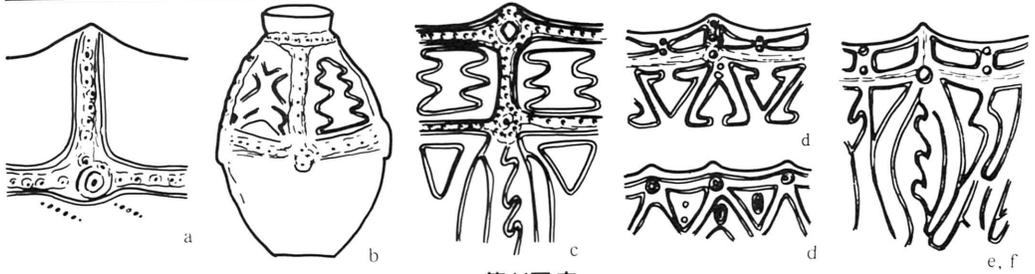
せず一つの類として扱って述べてある。文様帯の構成については縦の要素と、横の要素のかかわりで考える事が出来る。縦の要素はその下の又は上との関連をもっているか、又はそれらと一線を画した形であり、横については縦とのかねあいで展開が考えられている。展開に際しては、規則的なくり返しを意図しているが割付が不完全で、変則的なまとめ方も観察できる。区分に際しては、文様表現技法の段階のみのものも一つの文様帯として扱った。当遺跡の特徴的な文様は、a 刺突隆帯文、b 隆帯区画文、c 蛇行雲形文、d 交互三角形文、e 紡錘形文、f 蛇行懸垂文、等であるがこれらは組合されて構成されている。

器形について

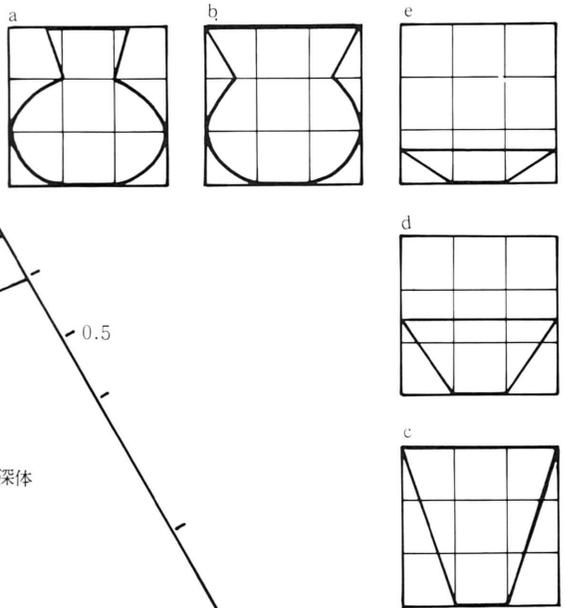
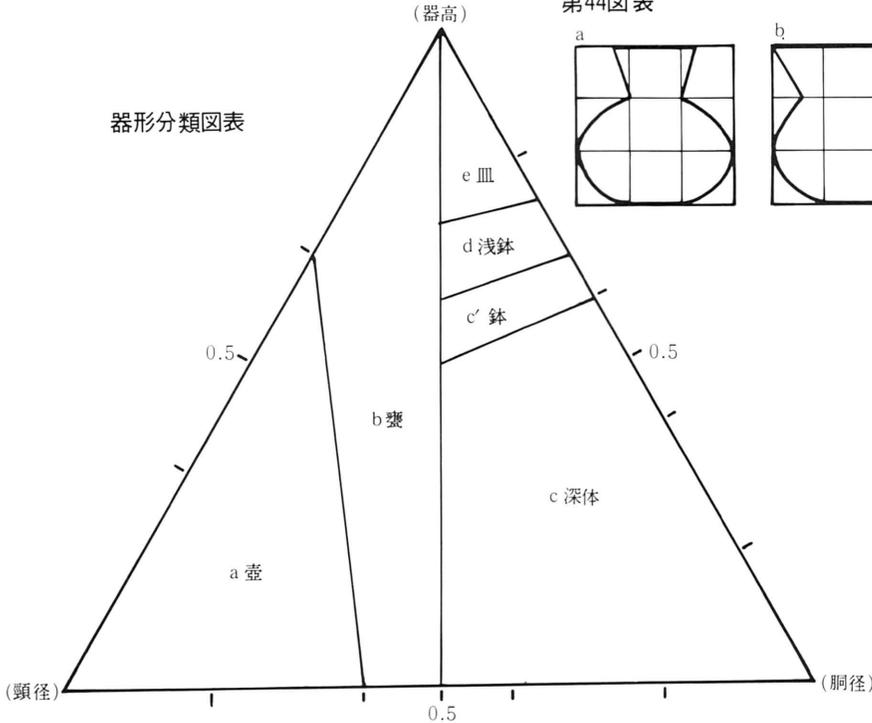
土器の用途と密接な関係にある器形を意匠する事は、製作過程において最も意を用いる所である。その意匠が実用上の制約を越え、意匠そのものが用途を規定していく、又、その意匠が時代とともに変化する事も知られている。この器形について、各部の特徴がまとめられ、各部位形態の定義がされている。又、器形の共通点から器種が考えられている。器種の規定は、形態上の相互関係、例えば、用器開放部の反り具合や、くびれ具合と、それによって区分される各部位の法量（空間量）である。古くは大山柏が「土器形態の基礎的研究」において、各部位の形態上の組合せで、648種の器形を設定し、それに応じた分類を考えた事もあった。ここでは長谷部言人の九等分基準をもとに甲野勇の規定した法量関係を図示した。当調査地における平均的器形は、壺形で、 a_1 ：胴張り、 a_2 ：胴下部（腹）張り。甕形で、 b_1 ：口縁があまり反らない、 b_2 ：口縁が大きく反る。鉢形で、 c_1 ：口縁が大きく反る、 c_2 ：口縁が反らない、 c_3 ：口縁が内彎する、d：浅い鉢形。台付の鉢形で、f 等である。



文様帯位置と構成 器形	A 口縁部に文様帯を持つ				B	C 口縁部、上半無文、下半に文様帯を持つ		D
	a 地文が続く	b 体部に文様帯	c 無文部が間に入る	d 口縁部のみ	胴下部まで連続する文様帯を持つ	胴下部まで連続	胴上半まで連続	胴部に文様帯を持つ



第44図表



第45図表

b 土器の分類

「土器の観察」で述べたそれぞれの事項に基づいて、総合的分類を試みた。但しそれぞれの事項については、後出のもの程、製作者の意図、製作環境が反映され、それらの事が表出されているので、文様に着眼して分類し、それに、それぞれの事項の説明を加える形をとった。

文様として、Ⅰ：地文のみのもの、Ⅱ：文様と地文をもつものに、大きく分けた。Ⅰの地文のみのものは、地文の占める範囲によって、Ⅱの文様と地文を持つものは、文様帯の位置と構成によって分け次に、文様単位、文様表現技法の種類によって、細分した。Ⅲとして文様帯をもたぬもの、Ⅳとしてその他の土器を設けた。それぞれの土器の呼称はⅠA 1-1の様になる。

Ⅰ：地文のみのもの

A：口縁部より胴下部まで地文の施されるもの。B：口縁部が無文で胴部に地文が施されるものにわかれる。

ⅠA類：口縁部より胴下部まで地文の施されるもの。

第1類（復原資料8点）

地文はL-Rが多く、4（32図4）は、間かくの短い撚糸で網目を作っているが、全体を擦消した感じで地文は不明確である。（但し口唇部が磨かれたものも、この類に入れてある。）

ⅠA—第46表

番号	図版 番号	口縁形態	表現技法単位（要素）	体部形態	表現技法単位（要素）	地文	器形	備考	
1	32-1	平口（外反）	磨き（不完全）	不整形	磨痕（6本）	L-R 鉢	c ₁		
2	2	二文突起（外反）	“ ”	底すぼみ	斜織文（横方向回転）	R-L 壺	b ₁	第1フラスコ状土壌	
3	3	五波状刻目2	“ ”	整形	“ ”	L-R 鉢（浅）	c ₁	第3フラスコ状土壌	
4	4	双突起（内彎）	口唇磨き	断口梯形	撚糸、網目、擦消（薄手）	“ ”	鉢（深）	c ₁	第4フラスコ状土壌
5	5	三山形	口唇平ら（粗雑）	コップ状	撚糸	“ ”	鉢（浅）	c ₂	第2住居址
6	6	平口（外反）	口唇磨き	鉢形	斜織文（細い）	R-L 台付鉢	f	第2フラスコ状土壌	
7	7	“ ”	“ ”	不整形	“ ”	L-R	“ ”	“ ”	
8	8	平口（直口）	口唇磨き	コップ状	“ ”	L-R 鉢	c ₂	（複合口縁的）	

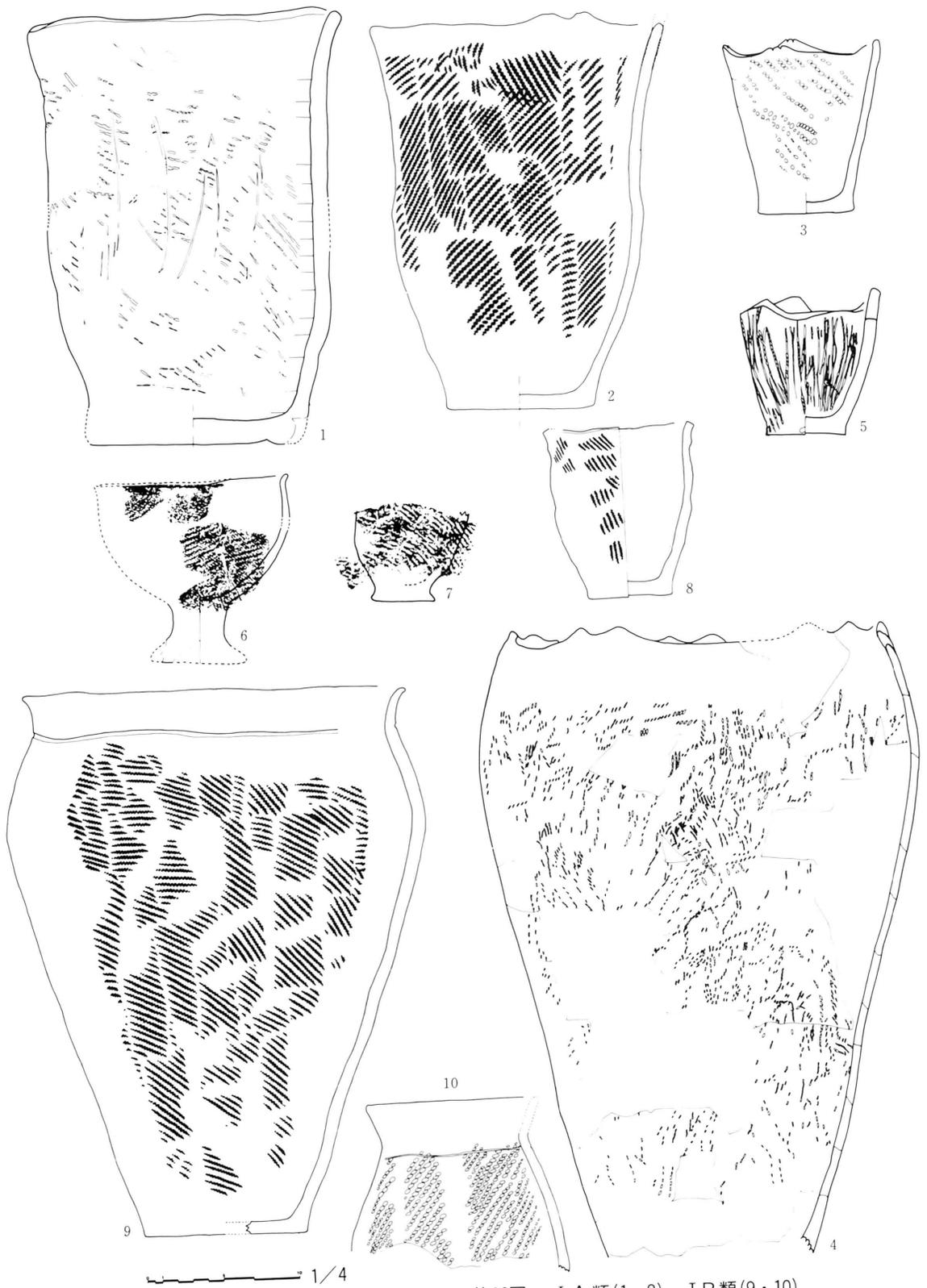
ⅠB類：口縁部が無文で胴部に地文が、施文されるもの。

第1類（復原資料9点、口縁部資料1点）

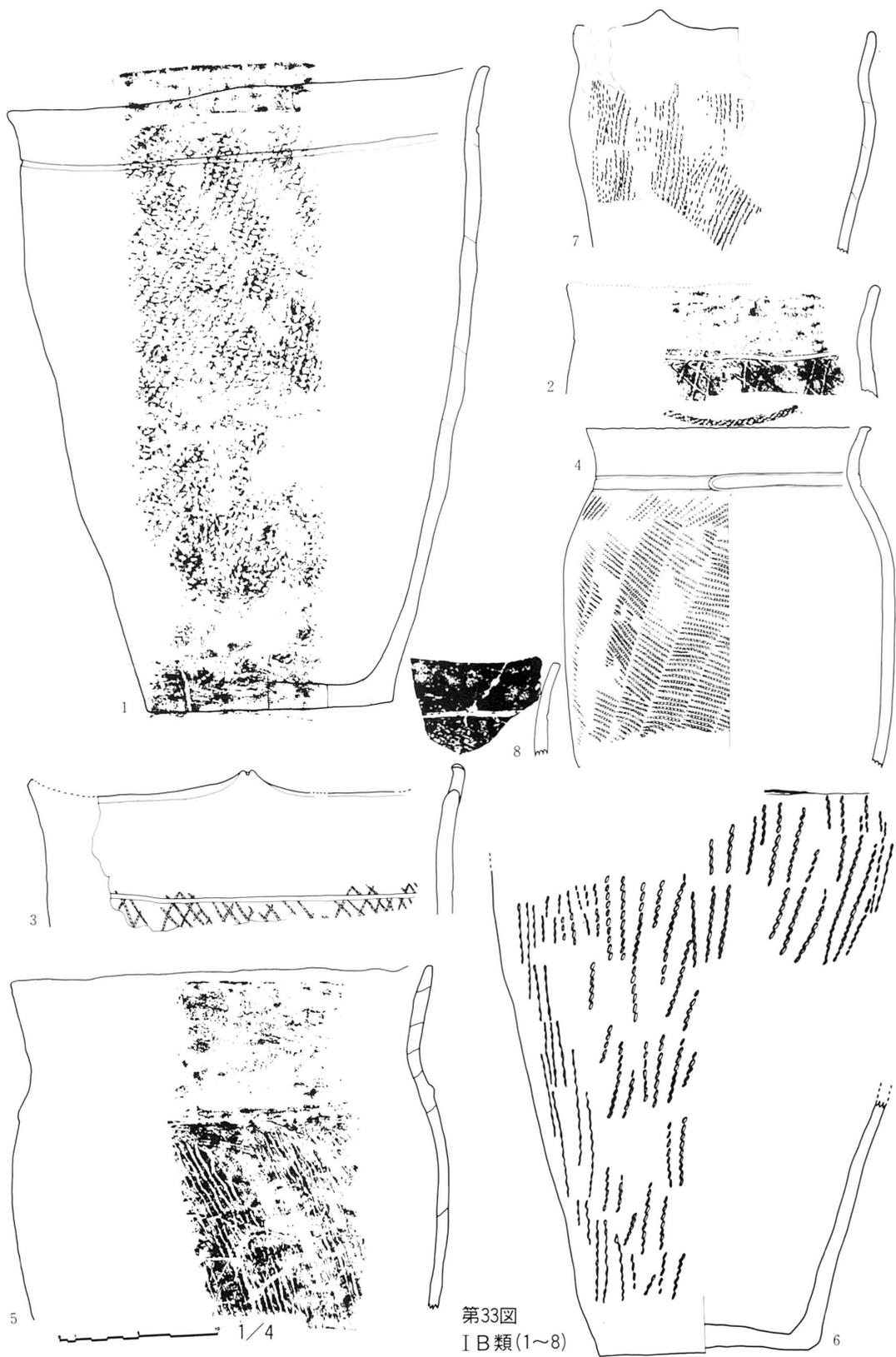
口縁と胴部の区画は大部分頸部にめぐる沈線文である。地文はL-Rが大半であるが、撚糸による網目が見られる。6（33図4）は頸部に平行沈線がめぐり、7（33図5）は、微隆線が、施されている。

ⅠB—第47表

番号	図版番号	口縁形態	表現技法単位（要素）	体部形態	表現技法単位（要素）	地文	器形	備考
1	32-9	平口（外反きみ）	口唇磨き（平ら）	底すぼみ	（黒変部有り）	L-R	壺	b ₁
2	10	“ ”	“ ”（丸味）	“ ”	斜織文（太目）	R-L	壺	a ₁
3	33-1	“ ”	“ ”（外側に微隆部）	直胴	“ ”（炭素付着）	“ ”	鉢（深）	c ₂
4	2	“ ”（外反きみ）	“ ”磨き（丸味）	普通	撚糸網目（細目）	L-R	“ ”	c ₂
5	3	波状（“ ”）	“ ”（刻目）市広口縁	“ ”	“ ”	“ ”	“ ”	c ₂
6	4	平口（“ ”）	“ ”（頂部にL-R織文付着）	“ ”	斜織文（頸部近く羽状）	“ ”	壺	b ₁
7	5	“ ”（“ ”）	“ ”（刷毛目）磨き、微隆帯	“ ”	“ ”（太目）	“ ”	“ ”	b ₂
8	6	“ ”	“ ”	“ ”	“ ”	R-L	“ ”	(b ₁)
9	7	山形（内彎）	磨き（横方向）	“ ”	撚糸（細目不明瞭）	L-R	“ ”	b ₁
10	8	波状	口唇磨き（平ら）	“ ”	斜織文（細目）	“ ”	鉢（深）	c ₂



第32図 I A類(1~8)、I B類(9・10)



第33図
I B類(1~8)

II：文様帯と地文をもつもの

A：口縁部に文様帯をもつもの、B：胴下部まで連続した文様帯をもつもの、C：口縁上半部が無文で、その下部に文様帯をもつもの、D：口縁部が無文で胴部に文様帯をもつものに分けられる。当調査地資料において、口縁部の規定の仕方によりDに該当するものはない。

II A類：口縁部に文様帯をもつもの

II A a類・II A b類・II A c類・II A d類に細分されるが、これは前述の文様帯の項で図示した通り a：地文が続く、b：体部に文様帯をもつ、c：無文部が間に入る。d：口縁部のみに文様帯を有す、と以上の配置関係より分けられ、それ等がさらに細分されている。

II A a類：口縁部文様帯の下部に縄文が施文されるもの

第1類（口縁部資料7点）沈線文や、磨消縄文で、幾可学的文様が施されている。

口縁部のみで、分類基準を満足し得ないものもあり、推定したものが多い。磨消手法のものは、後半に配置した。拓本1、2は平行沈線で胴部と画している。その点、5は胴部との区画が明瞭でない。7は、薄手であるが器形として、頸部がくびれた形を呈すると思われる。

II A a 1—第48表

番号	図版番号	口縁形態	表現技法単位（要素）	体部形態	表現技法単位（要素）	地文	器形	備考
1	34-1-1	波状（外反さみ）	蛇行・平行沈線文	肩張り （磨消）擦糸	斜縄文（太目） （磨消的）	L-R	壺	b,
2	-2	"（"）	" 带状文	"	"	R-L	"	"
3	-3	（平口？）	方形区画（磨消）文、刺突	頸くびれ大	"（細目） （磨消）	L-R	"	"
4	-4	平口（外反さみ）	" 沈線文、刺突	（管）	"（太目）	R-L	"	"
5	-5	（波状？）	带状・蛇行沈線文（磨消）	肩張り	"（巾広押圧）	L-R	"	"
6	-6	平口（内反）	方形区画（磨消）文	管	"（無節）	L-r	"	"
7	-7	波状（"）	三角形区画文	頸くびれ大	"（細目）	L-R	"	"



第34図
II A a 1類(1-1~6)

第2類（復原資料1点口縁資料6点）隆帯を持つもの

1（36図2-1）は、巾広の口縁で、磨消をとまなう波状文であるが、他は巾の狭い隆帯が加飾されて居る。2（35図2）は、底部より口縁まで復元できた土器であるが、器壁は、極めて薄く胎土も硬手で、器形と地文の櫛目がよく調和している。

II A a 2—第49表

番号	図表番号	口縁形態	表現技法単位（要素）	体部形態	表現技法単位（要素）	地文	器形	備考
1	36-2-1	平口（外反さみ）	隆帯（縄文）、波状文（磨消）	普通	斜縄文（細い）（擦消的）	L-R	甕	b ₁
2	35-2	波状内（外反さみ）	隆帯（櫛目）	普通	櫛目文（巾1.5cm）	（断口）	甕	第2住居址
3	36-2-3	（内彎）	（縄文）	普通	燃系	L-R	鉢（深）	(C ₂)
4	—4	（外反さみ）	（複合）	普通	斜縄文（細い）	（断口）	鉢	(C ₂)
5	—5	平口（外反）	（磨き）	普通	燃系（間隔大）	（断口）	甕	(b ₁)
6	—6	波状（内彎）	（磨）	普通	斜縄文（太目）	（断口）	鉢（深）	(C ₂)
7	—7	（内彎）	（縄文）	普通	（細目）	（断口）	鉢	C ₂

第3類（復原資料1点口縁資料5点）隆帯（複合口縁）部に、沈線が施こされたもの

1、2、3（36図3-1・2・3）は、口縁部の巾が狭く、鉢形で、4（36図3・4）5、6（35図3・4）はカメラ形の巾広い口縁となり構成も異ってくるが、一応この類に、一括した。4～6については、隆帯のもうけ方、蛇行文が施文されているなど強い共通性が見られる。復原土器の6は、刺突部があるなど他の類との共通性も見られてくる。

II A a 3—第50表

番号	図表番号	口縁形態	表現技法単位（要素）	体部形態	表現技法単位（要素）	地文	器形	備考
1	36-3-1	波状（外反さみ）	隆帯（口唇的・沈線文）	普通	斜縄文（無筋）	L-R	鉢（浅）	C ₁
2	—2	波状（外反）	（一）（二）の沈線文	普通	斜縄文（方向性無し）	R-L	鉢（深）	C ₁
3	—3	（外反さみ）	（長円区画磨消）	普通	（細い）	（断口）	鉢	C ₁
4	—4	平口（直口さみ）	（蛇行文・縄文）	普通	（太い）	L-R	甕	b ₁
5	35-3	平口（外反）	（長円・刺突文）蛇行文線	普通	（巾広押圧）	（断口）	鉢	b ₁
6	35-4	（内彎さみ）	（一）（二）	普通	（一）	（断口）	鉢	b ₁ 第7住居址

第4類（復原資料1点口縁資料1点）隆帯に更に貼付をとまなうもの

鉢形土器のみで、1（35図5）の復元土器は、口縁波状部に5つの把手がつけられ把手は、指頭様の工具にてくぼませたボタン状の加飾が施されている。

II A a 4—第51表

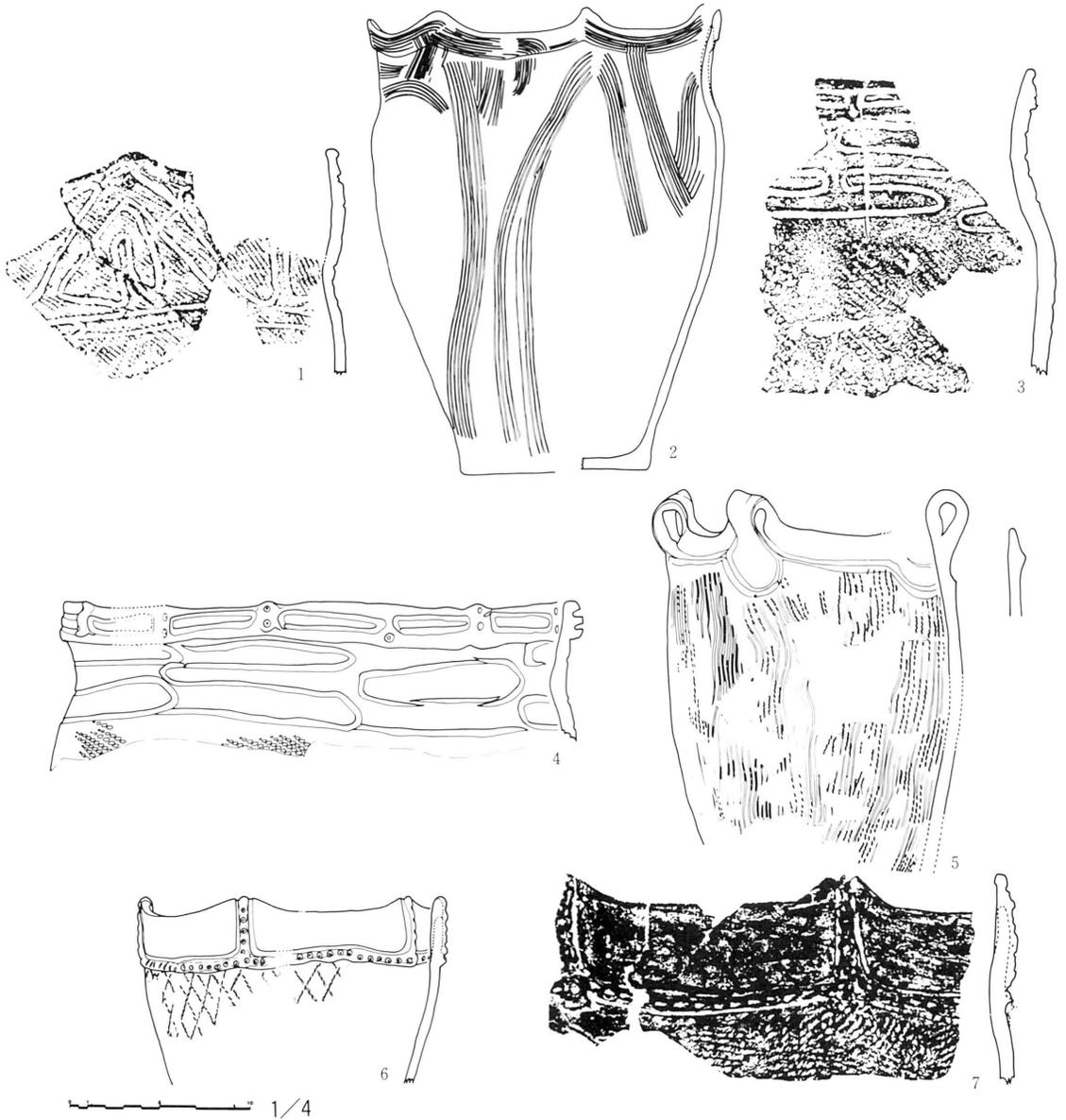
番号	図表番号	口縁形態	表現技法単位（要素）	体部形態	表現技法単位（要素）	地文	器形	備考
1	35-5	波状（5内彎）	把手（底部下）指頭による沈文	普通	燃系	L-R	鉢	C ₁ 第2住居址
2	36-4-2	（内彎）	隆帯（刺突）貼付文（底部下）	（開いた）	斜縄文（方向性無し）	L-R	（深）	C ₁

第5類（復原資料1点口縁部資料7点）ボタン状貼付、刺突文、縦位隆帯が加飾される。

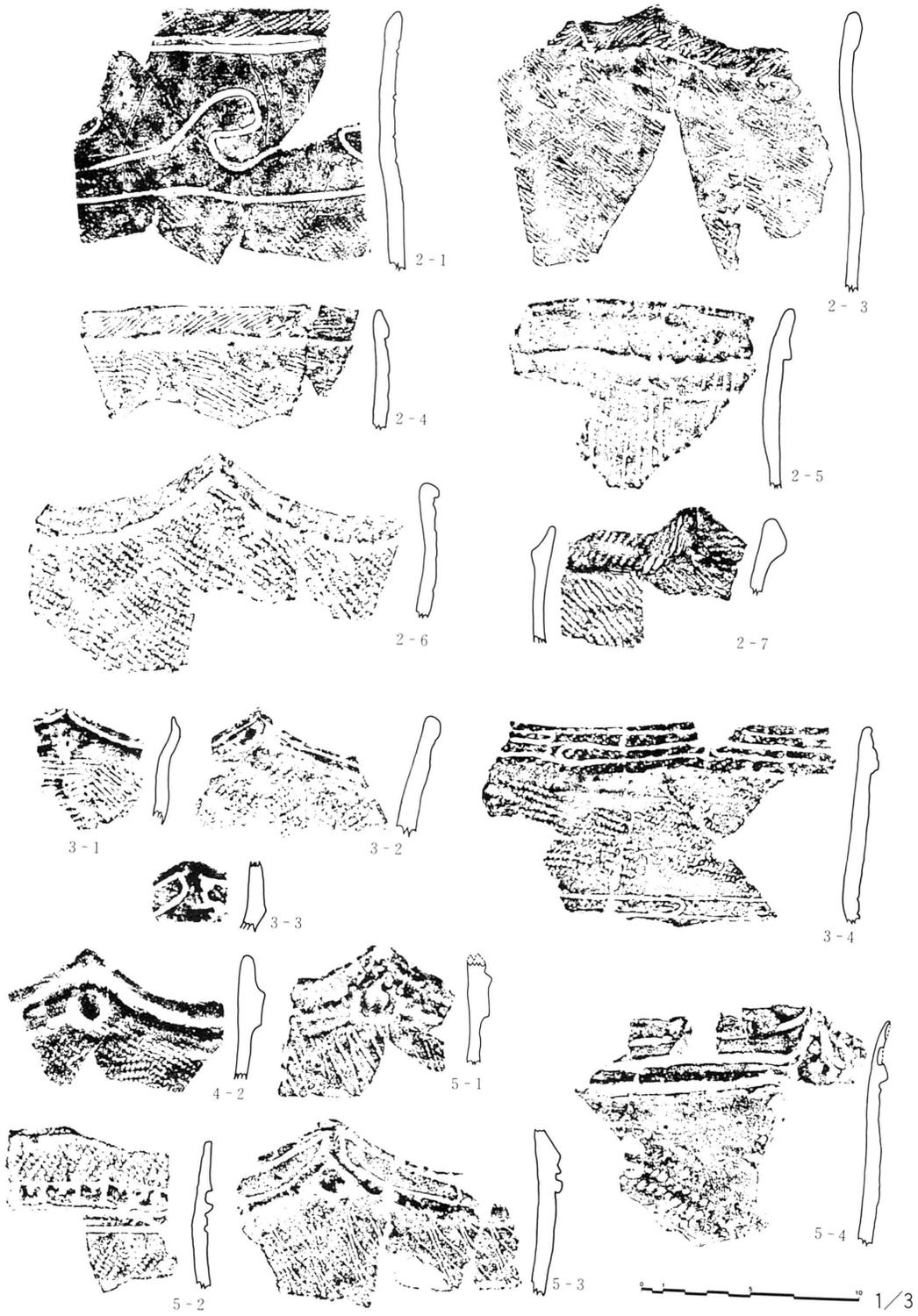
隆帯により磨いた口縁部を画する形式が見られる。2（36図5-2）は口縁部の外側の斜上方より、切り込みと刺突を加えた後に刺突の間を竹管様のもので横押し、切込みと、刺突により浮いた部分を押えてある。そのような隆帯の上部は、地文が幾分残るが磨いてあり、下部は沈線で画している。3（36図5-3）は変形網目を地文にもち、隆帯部には長円文と刺突が見られる。6（37図5-6）はフラスコ状土壌内の破片と遺物包含層中の破片が、接合したものである。8（37図5-8）は耳状に隆帯をめぐらしており、浮線文的施法が見られる。

II A a 5 — 第52表

器号	区画号	口縁形態	表現技法単位(要素)	体部形態	表現技法単位(要素)	地文	器形	備考
1	36 5	波状(内臂)	隣帯・貼付文(刺突)	管	縞糸(機分荒民あり)	L-R	鉢	c ₁
2	2	平口(=)	刺突文(フラスナー状)平行波文	=	斜織文(風目)	=	壺	b ₁
3	3	波状(=)	隣帯(長円区画, 刺突)貼付文	=	網目状縞糸(彩色網目)	=	鉢	c ₁
4	4	= (外反)	=, 穴縁区画, 縦位刺突	=	斜織文(丸味)	=	=	c ₁
5	35 7	山形(内臂)	隣帯・貼付文(刺突)穴縁文	=	= (巾広)	=	壺	b ₁
6	37 5-6	波状(外反)	= (刺突) 縞糸	(開いた)	網目縞糸(左下り・縞戻り)	=	鉢	c ₁
7	35 6	山形(内臂)	= (=) 縞糸	管	=	=	=	c ₁
8	37 5-8	波状(=)	=・貼付文(刺突)(縞状効果)	=	斜織文(縞糸)	=	=	c ₁



第35図 II A a類
1類(1)、2類(2)、3類(3・4)、4類(5)、5類(6・7)



第36図 II A a類
 2類(2-1~7)、3類(3-1~4)、4類(4-2)、5類(5-1~4)

第6類（復原資料1点口縁部資料4点）刺突隆帯区画文をもつ

2（39図1）は区画内に長楕円沈文と刺突が縦位に施されている。3（37図6-3）と4は蛇行雲形文が、又4は5に類似地柄として三角形文が、又5はIV1-1・2（54図1・2）の逆S字体部文様と類似性が見られる。蛇行雲形文は他の類にも多く見られる。

II A a 6—第53表

番号	図番 数字	口縁形態	表現技法単位（要素）	体部形態	表現技法単位（要素）	地文	器形	備考
1	37 6-1	波状（外反）	隆帯（刺突）沈文区画文（磨消）	普	斜織文（巾広）	L-R	鉢	c ₁
2	39 1	“ “	“ “ “ “ 長円文	“	（羽状織文）	“	甕	b ₁ 第1号如跡
3	37 6-3	（波状外反）	“ “ “ “ 蛇行沈文	“	擦糸（細い）	“	“	“
4	4	波状（外反）	“ “ “ “ 蛇行三角形沈文	“	“（ “ ）	“	“	“
5	-5	“（ “ ）	“ “ “ “ U字 “ “	“	斜織文	“	“	“



第37図 II A a類
5類(5-6・8)、6類(6-1~5)

II A b類：口縁部文様帯の下部に文様帯をもつもの

第1類（復原資料4点口縁部資料8点）隆帯（複合口縁）に、沈文を施し、口縁下にも沈文

による文様帯をもつもの

1～3 (38図1-1～3) は、口縁部破片で、下部文様は不明である。9 (39図2) の第2住居址の埋設土器は、蛇行懸垂文で、核果状文を構成している。10 (39図3) は垂下直線による方形文を弧線でつないでいる。11 (39図4) は口縁部がU字文で体部に蛇行懸垂文が続く。

II A b 1—第54表

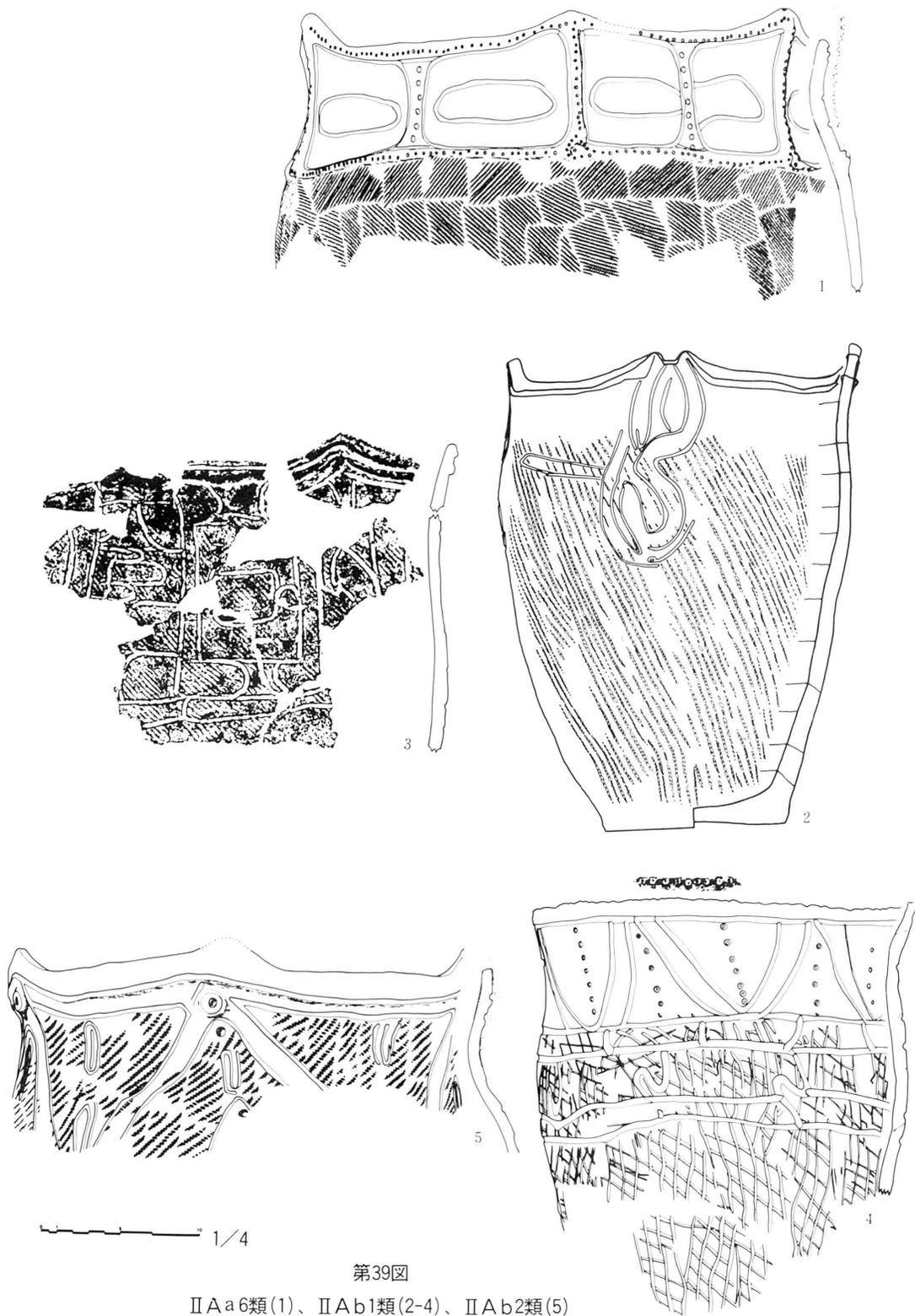
番号	図番	図号	口縁形態	表現技法単位(要素)	体部形態	表現技法単位(要素)	地文	器形	備考
1	38	1	破状(内傾)	✦ 降帯(縄文L、R)	普通	磨き、沈線	L—R	鉢	c ₁ 降帯(複合口縁)
2		2	“ (“)	“ (刺突、沈線)	“	“ 蛇行沈線	—	“	“
3		3	“ (“)	“ (縄文R、L、沈線)	“	“ (頂部下)沈線	R—L	“	“
4		4	“ (“)	✦ 降帯(刺突長方形文)	“	“、紡錘状・三角形沈線文	—	“	“
5		5	平口(外反きみ)	“ (縄文、沈線)	“	三角形区画・紡錘状磨消文	L—R	甕	b ₁
6		6	破状(“)	“ (縄文)	張りきみ	かなえ形磨消文	“	“	“
7		7	平口(“)	“ (縄文、沈線)	“	蛇行懸垂・平行沈線文	“	“	“
8		8	破状(“)	“ (沈線)	普通	紡錘形文	“	“	“
9	39	2	破状(外反きみ)双突起	微降帯	“	核果状(蛇行入組状)文、撚糸	“	“	第2住居址埋設
10		3	破状(外反きみ)	✦ 降帯(沈線)	“	方形区画、弧線文連結	“	“	“
11		4	平口(“)	“、U字文、刺突	“	蛇行懸垂・平行沈線磨き	L—R撚糸	“	A h 12埋設土器
12	48	1	“ (内傾)	“ (磨き)	強い張り	磨き方形区画・沈線文	—	志	a ₁ (52図9)



第38図 II A b 1類(1-1～8)

第2類(復原資料1点口縁部資料6点)複合口縁に貼付文及び沈文等の文様帯をもつもの

2 (40図2-2) は降帯による円形文で加飾されている。1から4までは下部文様帯が、不明の鉢形土器である。5 (39図5) は口縁下部文様帯として交互三角形をもつ埋設土器炉である。



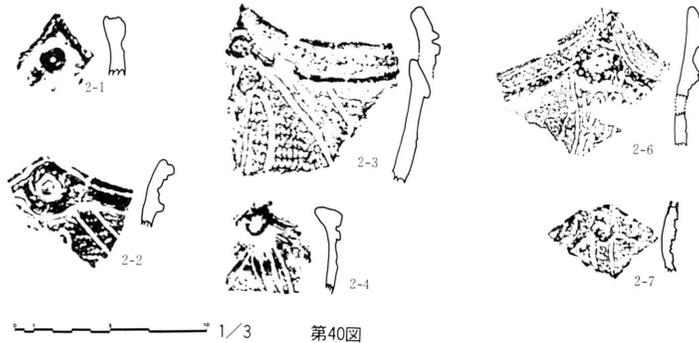
第39圖

ⅡAa6類(1)、ⅡAb1類(2-4)、ⅡAb2類(5)

6 (40図2-6) の関連破片は、示し得なかったが、無文に近い頸部下は斜行沈線で文様帯を構成している。

II A b 2—第55表

番号	図番	版号	口縁形態	表現技法単位(要素)	体部形態	表現技法単位(要素)	地文	器形	備考
1	40	2-1	波状(内彎)	(微)隆帯(縄文、刺突)貼付文	管	貼付文(刺突)鈎状文	R-L	鉢	c ₁
2	-	2	"(外反)	円形隆帯(沈線刺突)	"	紡錘状・三角形沈線文(縄文)	L-R	"	c ₂
3	-	3	"(内彎)	隆帯(磨き)貼付(刺突)文	"	"(磨消)	"	"	c ₃
4	-	4	"(")	"(磨き) " "	"	交互三角形・平行沈線区画、縄文	L-r	"(残) "	"
5	39	-	"(")	"(磨き)沈線 " "	"	"・逆S字蛇行懸垂文(磨消)	R-L	壺	b ₁ 第2号鈎跡
6	40	2-6	"(外反)	"(縄文)沈線)円形貼付(刺突)	"	蛇行懸垂・斜線文	"	"	b ₁
7	-	7	"(")	"(")貼付(刺突)文	-	(上記6番と類似構成を推定)	L-R	"	b ₁

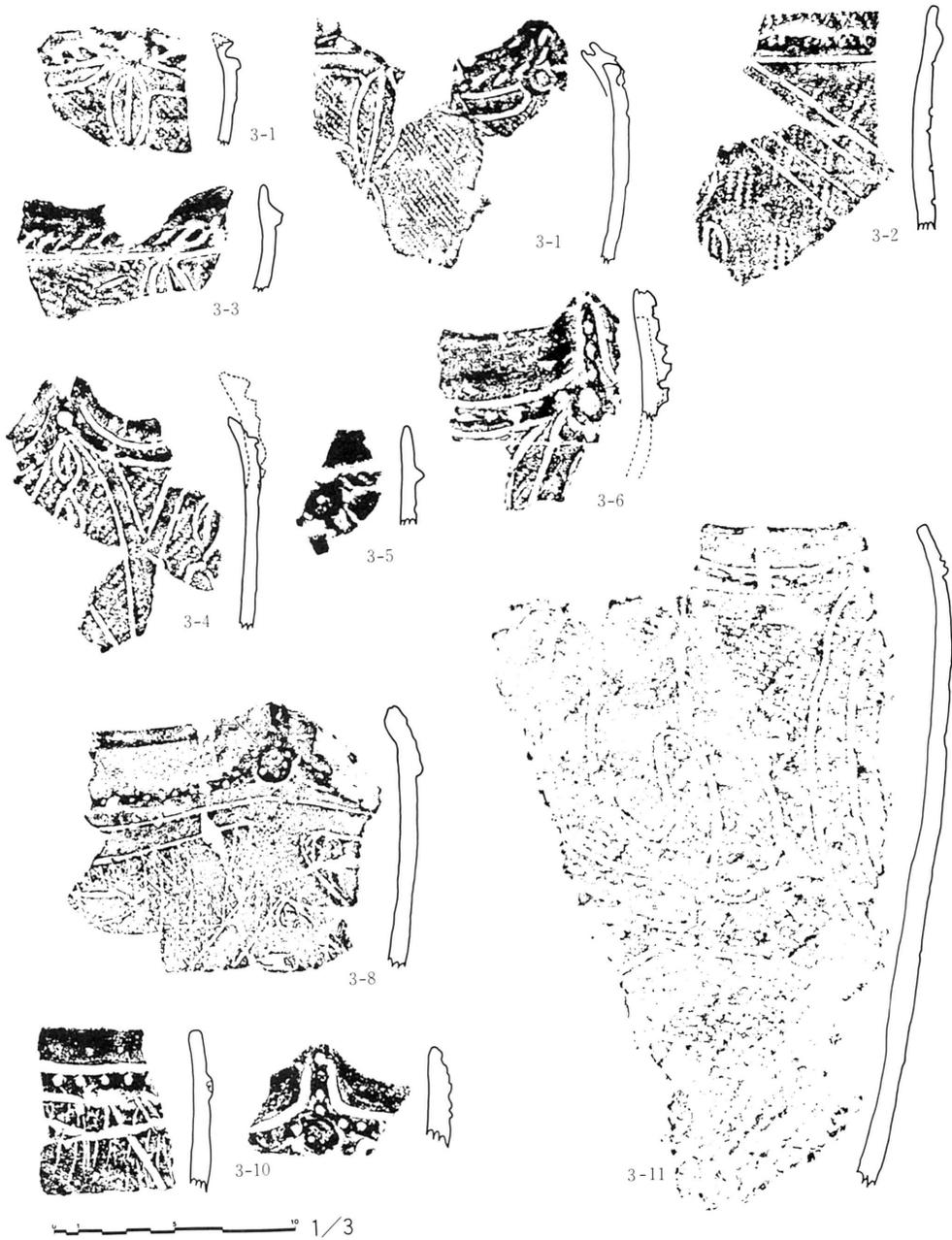


第40図
II A b 2類(2-1~7)

第3類(復原資料1点口縁部資料10点)縦位の隆帯と沈文、磨消文による体部文様帯をもつ体部文様帯は沈線による蛇行懸垂文をとりかこむように紡錘形、三角形文を共通してもつ。7(43図1)の復元土器は沈線が体下部まで垂下し、開いた形をとっている。これ以後に多く見られる鈎状文は、地と図柄の関係により入組文の効果を出している。縦位隆帯は2本が開いた形の物もある。9(43図2)のC a 12ピット出土土器は胎土、地文、文様等より、後述のII A b 5類に示す耳状把手が縦位刺突隆帯部に加飾されたものと考えられるが、一応この類に含めた。

II A b 3—第56表

番号	図番	版号	口縁形態	表現技法単位(要素)	体部形態	表現技法単位(要素)	地文	器形	備考
1	41	3-1	波状(角形)	(竹管様工具横圧)刺突)	管	連葉状蛇行懸垂文	L-R	鉢	c ₁
2	-	2	波状(外反)	隆帯(縄文)	"	蛇行懸垂文	R-L	"	c ₂
3	-	3	波状(内彎)	"(横圧)	"	紡錘状(S字連続)文	L-R	"	c ₃ 炭素附着
4	-	4	"(")	浮隆線(調隆文)	"	"・連葉状蛇行沈線文	R-L	"	c ₃ "
5	-	5	"(外反)	隆帯(刺突)貼付(刺突)文	張りきみ	"蛇行懸垂文	L-R	壺	b ₁ 雲母含む
6	-	6	山形(内彎)	"(")	管	"文	R-L	鉢	c ₁
7	43	1	波状(")	"(")	"	"入組文、三角形文	"	"	" 炭素附着
8	41	3-8	"(")	"(")貼付(刺突)文	"	交互三角形区画内蛇行懸垂文	L-R	"	" 平行沈線、摺(磨)
9	43	2	"(")	"(")「耳状把手」	"	蛇行入組状文、三角形文連続乙字文	"	"	" II A b 5関連
10	41	3-10	山形(")	"(")貼付(刺突)文	"	紡錘状文・蛇行文、擦糸	L-r	"	" 土板材料
11	-	11	"(")	"(")"(")	縦長	" "	R-L	"	" 磨滅



第41図
ⅡAb3類(3-1~11)

第4類(復原資料3点口縁部資料2点)隆帯で画された口縁部に沈文をもつ
2(42図4-2)3(43図4)は体部の三角形文、紡錘文、蛇行懸垂文、における共通性が
考えられる。4(43図5)は石鏃を連想させる交互三角文を配している。

Ⅱ A b 4 — 第57表

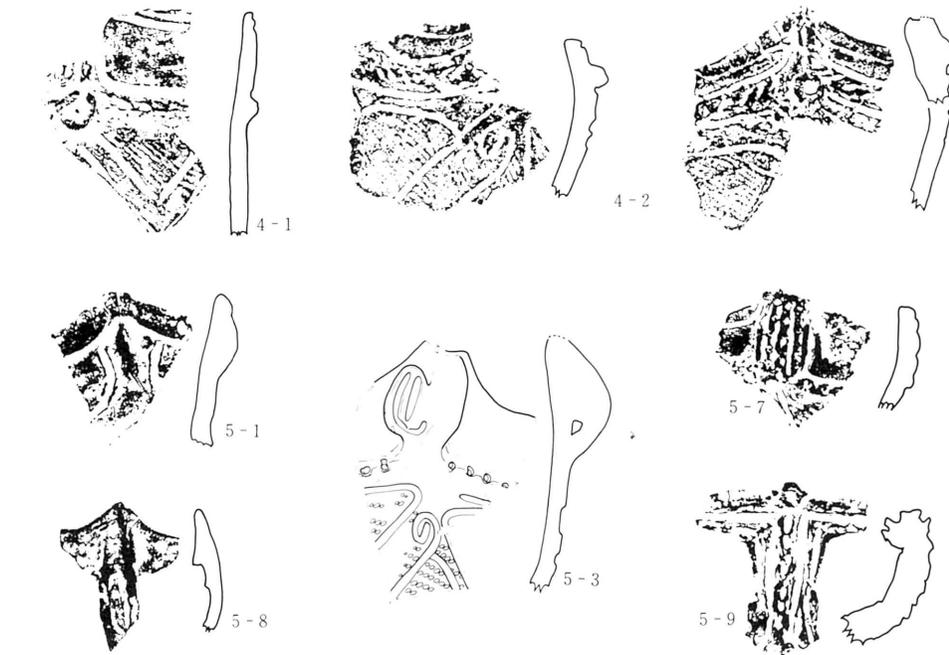
番号	図版番号	口縁形態	表現技法単位(要素)	体部形態	表現技法単位(要素)	地文	器形	備考
1	42-4-1	波状(内彎)	隆帯(刺突)沈線区画	普通	交互三角形文、磨消	L-R	鉢(深) c ₃	
2	— 2	" (")	" (刺突、長円文) 貼付(刺突)	"	紡錘状、蛇行、三角形文	"	" (") "	
3	43-4	" (")	" (") 貼付(")	"	"	"	" (") "	
4	— 5	" (")	" (") 貼付(")	"	交互三角形文	R-L	" (") "	第2住居址 pit 14
5	52-8	平口(外反)	口唇部(沈線) 4把手(沈線)	体下部張り	方形区画・蛇行雲形類似文	L-R	壺 a ₃	第11住居址

第5類(復原資料2点口縁部資料5点)波状・山形口縁頂部下に独特な貼付文をもつ

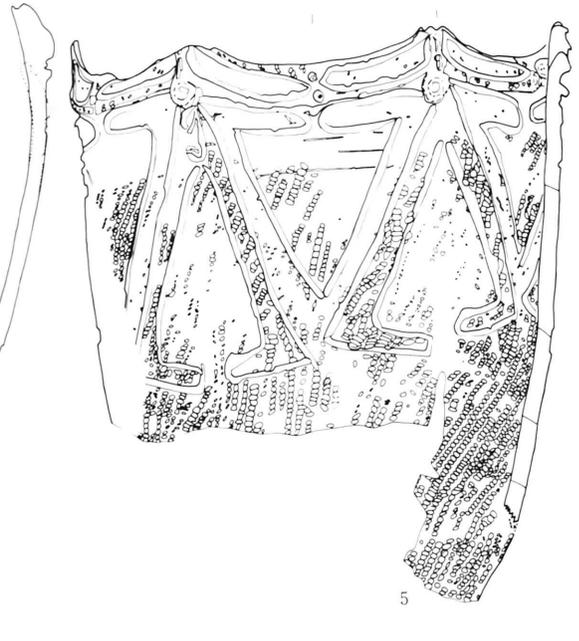
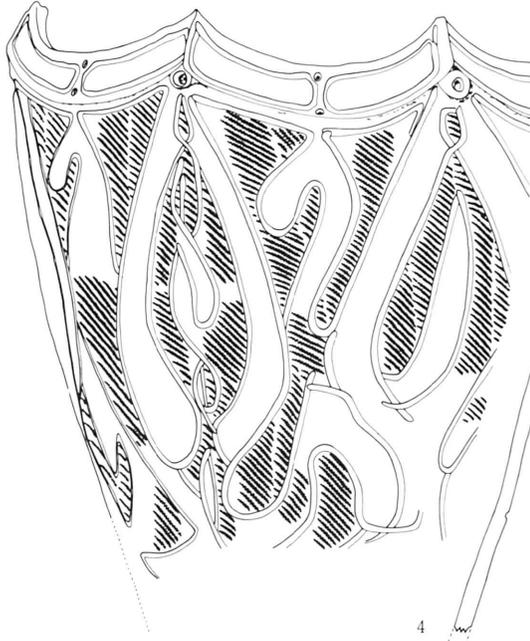
1(42図5-1)はⅡA b 2類に近いが、ⅡA b 3類1と同じ意味でこの類に入れた。4(45図1)は縦位隆帯の欠けている部分に、3,類似の立体的耳状把手が加飾されると考えた。これは口唇頂部が平らで、幾分外側に張り出す、2の様に3,類似の把手と隆帯をもつ岩手県紫波町栗田I遺跡の遺物がある、4に胎土のよく似た3,類似の把手がある、等から前述の結論を出した。

Ⅱ A b 5 — 第58表

番号	図版番号	口縁形態	表現技法単位(要素)	体部形態	表現技法単位(要素)	地文	器形	備考
1	42-5-1	波状(外反)	隆帯(折り返し、縦位、磨き)	普通	磨き・X字状沈線文	—	鉢(深) c ₂	
2	— 6	" (内彎)	" (磨き) 把手(頂部下) 貼付文	"	紡錘状三角形文	L-R	" c ₃	
3	42-5-3	山形(")	" (刺突) 把手(耳状立体、沈線)	"	入組状蛇行文	"	"	ⅡA b3-9 関連
4	45-1	" (")	" (") (") 交互貼付	"	核果状(割梨状)文・乙字連続文	"	"	(把手推定)
5	43-7	波状(")	" (") 輪状貼付文	"	紡錘状・三角形文	"	"	伊焼土下遺物
6	45-2	" (")	" (") ペンタント状貼付文	"	" ・乙字連続文、罫目(燃系)	"	"	"
7	42-5-7	山形(")	" (") (沈線区画)	"	交互三角形様入組状蛇行文	R-L	"	"



第42図 ⅡA b類
4類(4-1・2)、5類(5-1~9)



1/4

第43图 IIAb類
3類(1~3)、4類(4·5)、5類(6·7)

第6類（復原資料3点口縁部資料4点）口縁部を隆帯でもって区画し下部に文様帯をもつ

1（45図4）は完形に近く、隆帯刺突は顕著でないが一応この類にふくめた。2・3（44図6-2・3）は口縁下の文様が明確でないが同様にした。この2と3は5（45図6）の区画内の蛇行雲形文と同一のものである。体部文様帯は、三角形文、紡錘状文、蛇行沈線文が磨消手法と組合されて展開されている。

Ⅱ A b 6—第59表

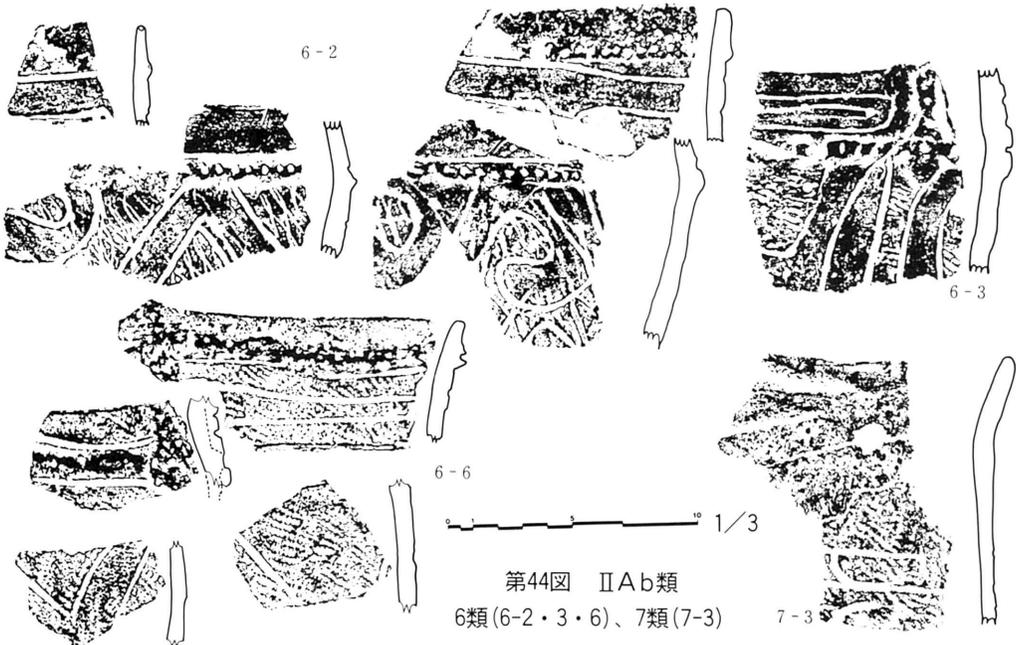
番号	図番号	口縁形態	表現技法単位（要素）	体部形態	表現技法単位（要素）	地文	器形	備考
1	45 4	平口（外反）	隆帯（長円区画磨消、刺突）	普通	交互三角形文・菱網文磨消	L R 鉢（深）C	第10住居址	
2	44 6 2	波状（内彎）	隆帯（刺突）区画内蛇行文	（同部張り強い）	交互三角形・入組状文（磨消）	- -	b ₁	（変形格子目）
3	3	平口（外反）	（- -）	普通	紡錘形文	- -	- -	
4	45 5	平口（外反）	（- -）区画内蛇行雲形文	-	斜線・菱状文	- 罫	-	Ⅱ A a 6 関連
5	6	平口（外反）	隆帯（刺突）円形文・区画内蛇行雲形文	-	紡錘状文・蛇行磨消文・三角形文	- -	-	黒色部あり
6	44 6 6	平口（外反）	（- -）	-	交互三角形文（推定）	- -	-	磨消・光沢あり
7	47 2	平口（外反）	隆帯（刺突）区画内幾何学文	-	波状文・三角形区画内蛇行文	- -	-	発色（緑） 第17アスコ土壇

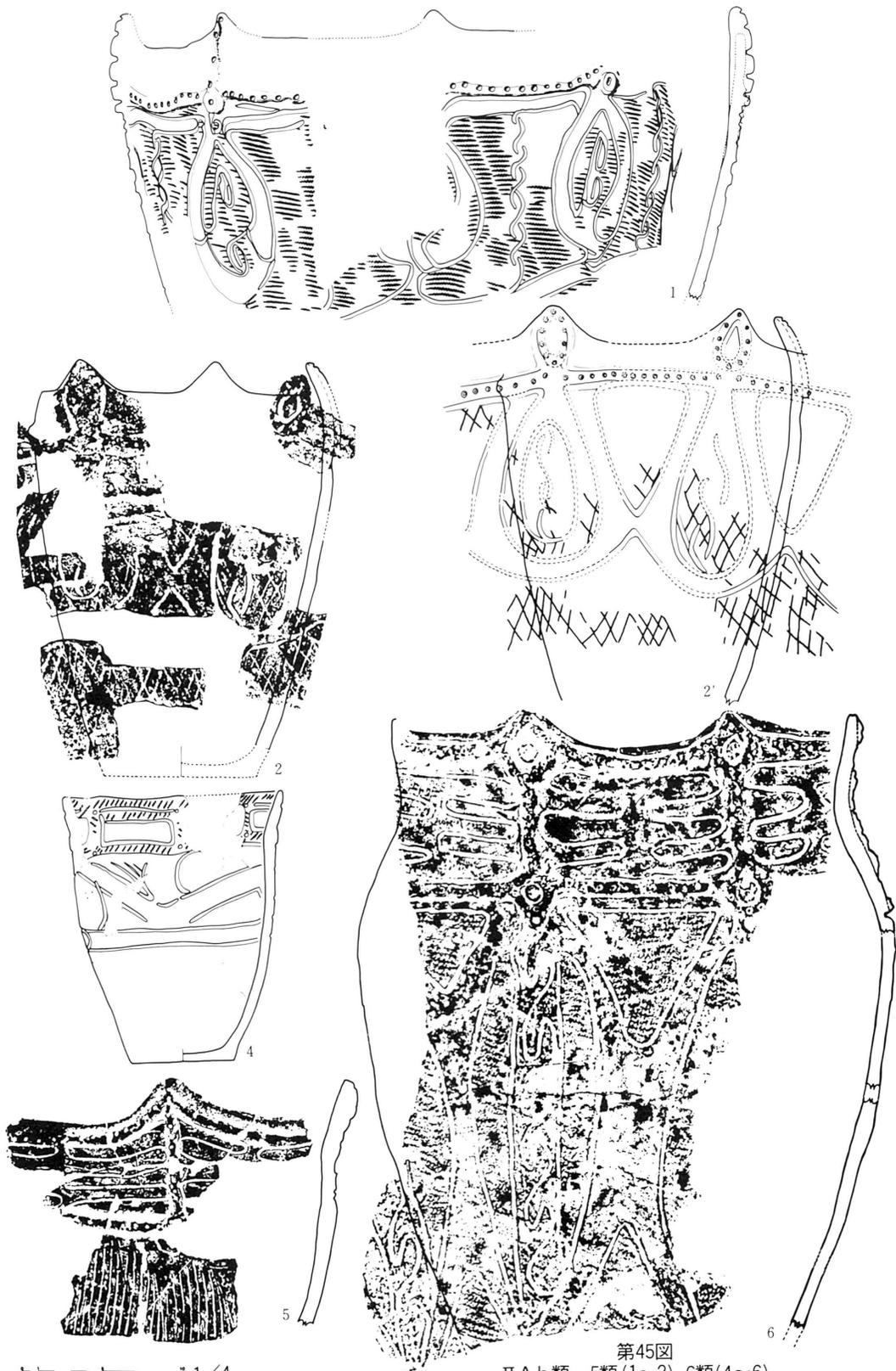
第7類（復原資料1点口縁部資料2点）隆帯をもたないもの

1（47図3）は波状頂部下口縁部と、肩部近くに刺突されたボタン状貼付文が文様帯の基点となり、平行沈線文、紡錘状文が展開されている。2は口縁部と体部が平行沈線で画されている。3は焼成後、穴を明けられた事が確認出来る。

Ⅱ A b 7—第60表

番号	図番号	口縁形態	表現技法単位（要素）	体部形態	表現技法単位（要素）	地文	器形	備考
1	47 3	波状（内彎）	刺突貼付入組状磨消文	張りきり	入組状紡錘状磨消文	L - R 罫	b ₁	
2	47 4	平口（外反）	刺突、山形、沈線	普通	交互V字状文鉤状文（磨消）	-	-	b ₁
3	44 7-3	平口（外反）	沈線	「穿孔」	横位楕円文	-	-	b ₁





第45圖

II A b類 5類(1~2)、6類(4~6)

Ⅱ A c 類：口縁部と体部の文様帯の間に無文部が入るもの

第1類（復原資料1点口縁部資料3点）

1（47図5）は口縁より底部まで接合出来た土器で、体部は磨消手法のU字文、蛇行懸垂文と確認できる。他の2・3・4の口縁部資料では、体部文様帯は確認できず、Ⅱ A d 類に区分しなければならないのであるが、一応この類に入れた。

Ⅱ A c—第61表

番号	図版番号	口縁形態	表現技法単位(要素)	体部形態	表現技法単位(要素)	地文	器形	備考
1	47-5	平口(内彎)	隆帯(縄文)「複合口縁」	甬	平行・U字・蛇行沈線文	L—R	甕	b ₁ 第7住居址
2	46-c-1	波状(外反)	“(剣目状刺突)「複合口縁」	“	磨き肩部周沈線	(磨き)	鉢(浅)	c ₂
3	—2	平口(外反きみ)	“(縄文・刺突)「 ”	“	(存在推定)	R—L	“	“
4	—3	波状(外反)	“(縄文)「複合口縁」	“	(”)	“	“	“

Ⅱ A d 類：口縁部文様帯のみで体部は無文であるもの

第1類（口縁部資料2点）

他のA類にならえば、細分しなければならないのであるが、数が少ないので一括この類にした。

1は2の様な隆帯（複合口縁）下部の刺突文がない。

Ⅱ A d—第62表

番号	図版番号	口縁形態	表現技法単位(要素)	体部形態	表現技法単位(要素)	地文	器形	備考
1	46-d-1	平口(直口)	複合口縁(磨き)	甬	—	—	甕	b ₁
2	—2	山形(小)	複合口縁(下部刺突)	“	—	—	鉢	c ₂

Ⅱ B 類：口縁部より胴下部まで文様が連続するもの

第1類（復原資料1点口縁部資料3点）

4の復原土器は蛇行懸垂文が体部まで連続する。他の鉢形の資料は沈文によるものである。

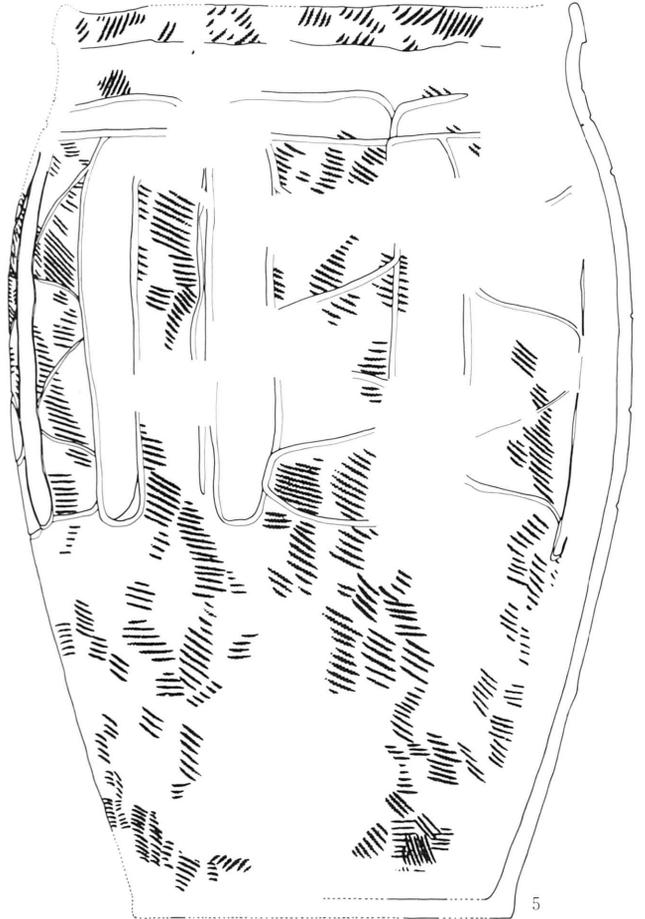
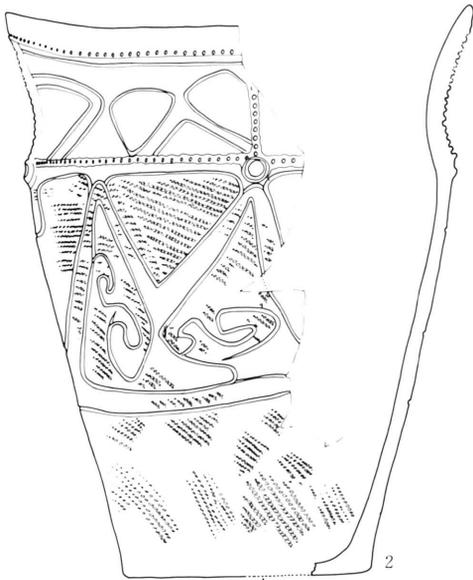
Ⅱ B—第63表

番号	図版番号	口縁形態	表現技法単位(要素)	体部形態	表現技法単位(要素)	地文	器形	備考
1	46-1	波状(外反)	入組状蛇行磨消文	甬	蛇行磨消文	L—R	鉢	c ₂ 炭素付着
2	2	山形(内彎)	(頂部くぼみ)沈線(一周)	“	紡錘状文(擦消的)	“	“	c ₃
3	3	波状(外反)	微隆帯、平行・渦状沈線	“	V字・蛇行・連続乙字文(磨き)	—	“	c ₂ 土板材料
4	49-1	“ (内彎)	渦状・平行沈線磨き	“	蛇行沈線(擦消)	L—R	甕	b ₁ 第6住居址炉跡



第46図

Ⅱ A c 類(c-2~4)、Ⅱ A d 類(d-1・2)、Ⅱ B 類(1~3')



1 / 4

第47図

II Ab6類(2) II Ab7類(3・4)、II Ac類(5)

II C 類：口縁上半部無文で下半からの文様帯が体部まで続くもの

第1類（復原資料3点）

頸部に沈線や円文を施しそれより下に体部文様帯を展開している。三角形文と蛇行文、連続S字、逆S字文が見られる。1の体下部の画し方は不明である。

II C 1 — 第64表

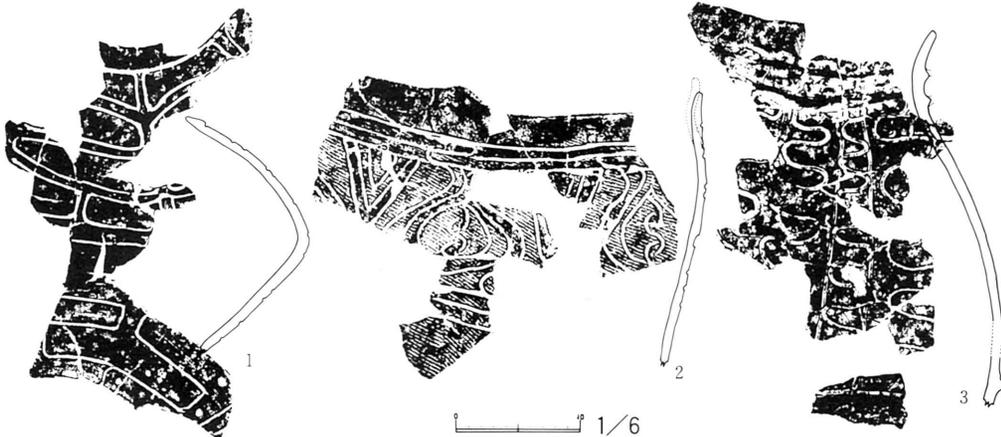
番号	図番	口縁形態	表現技法単位(要素)	体部形態	表現技法単位(要素)	地文	器形	備考
1	49-2	波状(直口)	沈線斜突	晋	粉繪状交互三角形文(磨消)	R - L	鉢(深) c ₂	
2	3	山形(外反)	平行沈線	-	獅状(S字文)三角形文(磨消)	L - R	甕 b ₁	
3	4	"(外反)	円文	-	山形・蛇行人組状文(磨消)	"	" b ₁	

第2類（復原資料6点口縁部資料3点体部資料7点）壺形土器で口縁部上半無文のもの

文様帯の構成は蛇行沈線、蛇行雲形文によるものが多い。隆帯区画によるものもある。器形は体下部が張ったものが目につくが、数量的には胴部が張っているものが多い。文様帯構成上この類に入れなかった壺形土器は3点あり、中でもII A b 4-5は文様上、蛇行雲形文に似たものを持っている。

II C 2 — 第65表

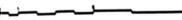
番号	図番	口縁形態	表現技法単位(要素)	体部形態	表現技法単位(要素)	地文	器形	備考
1	50-2-1	平口(直口)	磨き頸部周沈線	胴張る	垂下沈線(磨き)	-	壺 a ₁	
2	52-1	"(外反)	隆帯(頸部)磨き	下胴張る	隆帯(磨き)	-	" a ₂	分類再考
3	2	-	隆帯把手	胴張る	"区画(磨き)	-	" a ₁	50-2-3
4	3	-	隆帯(頸部)	上部張る	長円形文	(-)	" a ₁	50-2-4
5	4	平口(外反)	"(外反)磨き	下胴張る	方形沈線区画蛇行壘重文	(-)	" a ₂	48-3
6	50-2-6	-	後隆帯(頸部)把手(推定)	胴張る	蛇行壘重文	(-)	" a ₁	
7	52-5	平口(外反)	隆帯(頸部)内面段付	下胴張る	粉繪状文、把手	(-)	" a ₁	50-2-7
8	50-2-8	-	"(外反)	下胴張る	U字状文・S字連続文	L - R	" a ₂	
9	52-6	平口(外反)	"(外反)把手	胴張る	隆帯(磨文)・粉繪形文	L - R	" a ₁	51-2-9
10	7	"(外反)	"磨き斜突	丸胴	"(斜突)区画、蛇行壘重文	-	" a ₁	
11	51-2-11	-	"(頸部)把手	下胴張る	"沈線区画人組状文	-	" a ₂	Aa 12 - Cb 15
12	12	-	"(外反)把手(推定)	胴張る	隆帯(平行)沈線文(丹塗)	-	" a ₁	(推定)
13	13	-	-	"	X字状・貼付、隆帯文	-	"(a ₁)	(推定)
14	14	平口(内嚢)	隆帯沈線	-	-	-	"	
15	15	-	頸部(斜突)隆帯把手	-	(隆帯区画)	-	"	
16	16	-	-	胴張る	U字文 丹塗	-	"(a ₁)	(推定)

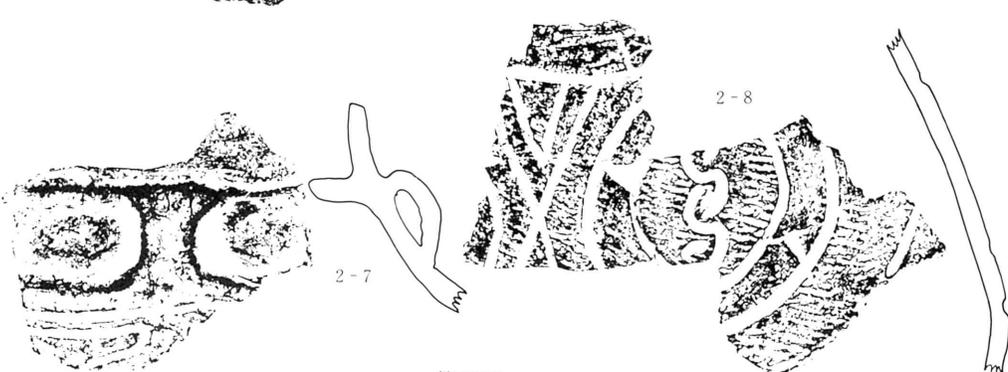
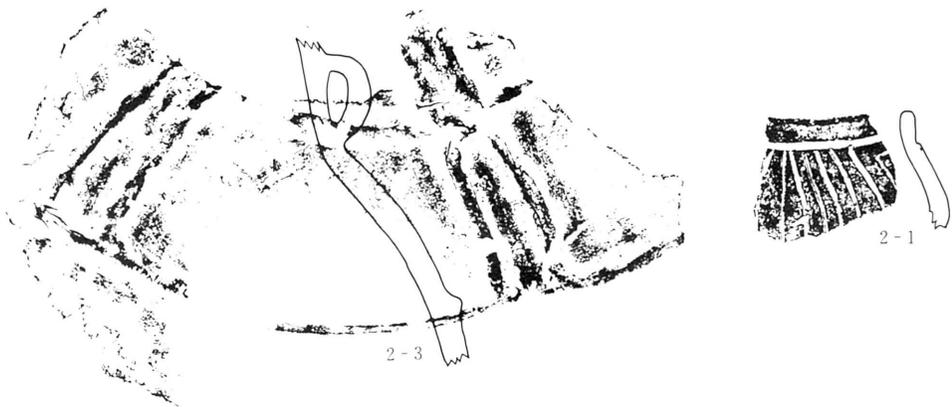


第48図

II A b 1類(1)、II C 1類(2)、II C 2類(3)

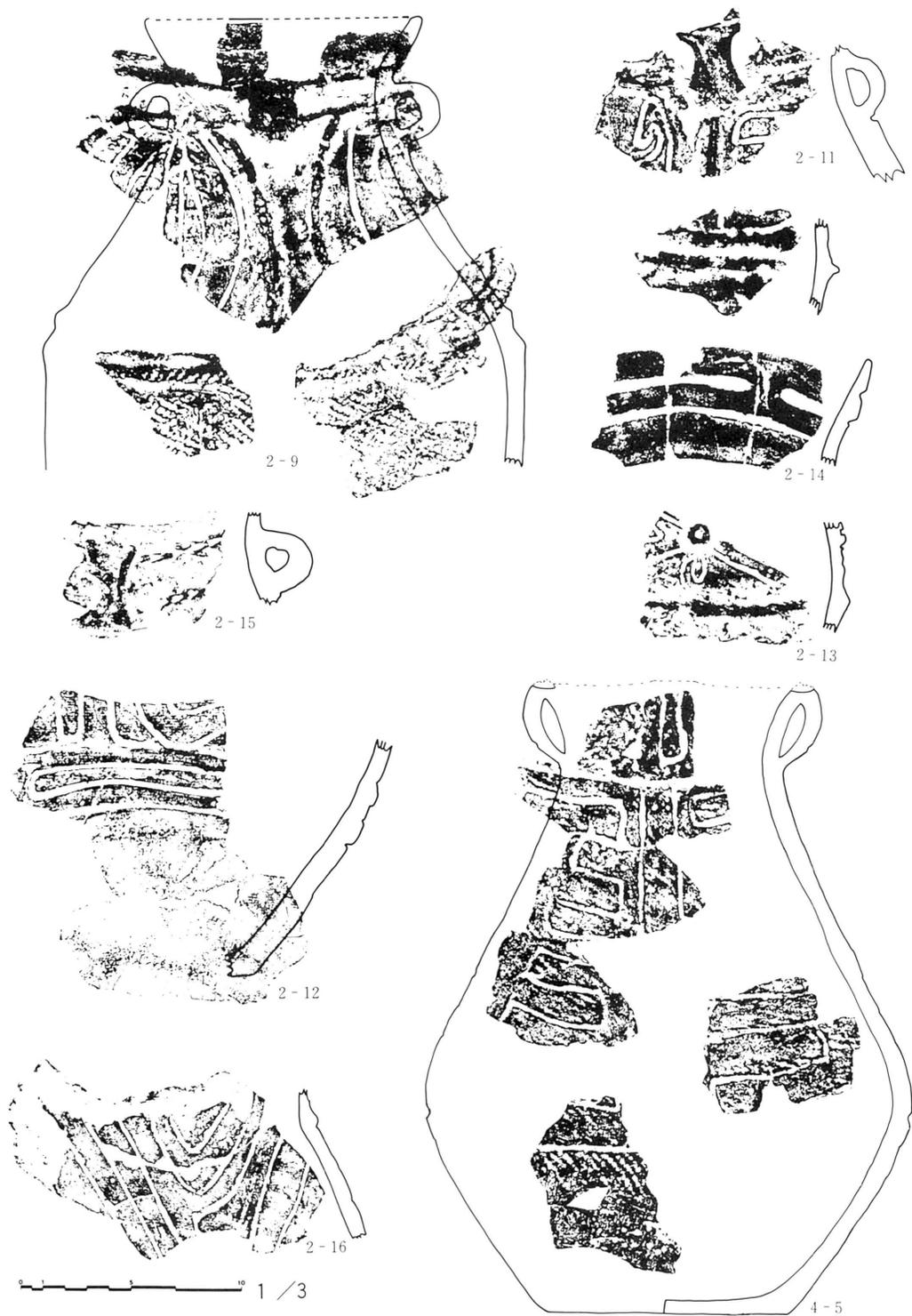


第49図  1/4
 II B類(1)、II C1類(2~4)



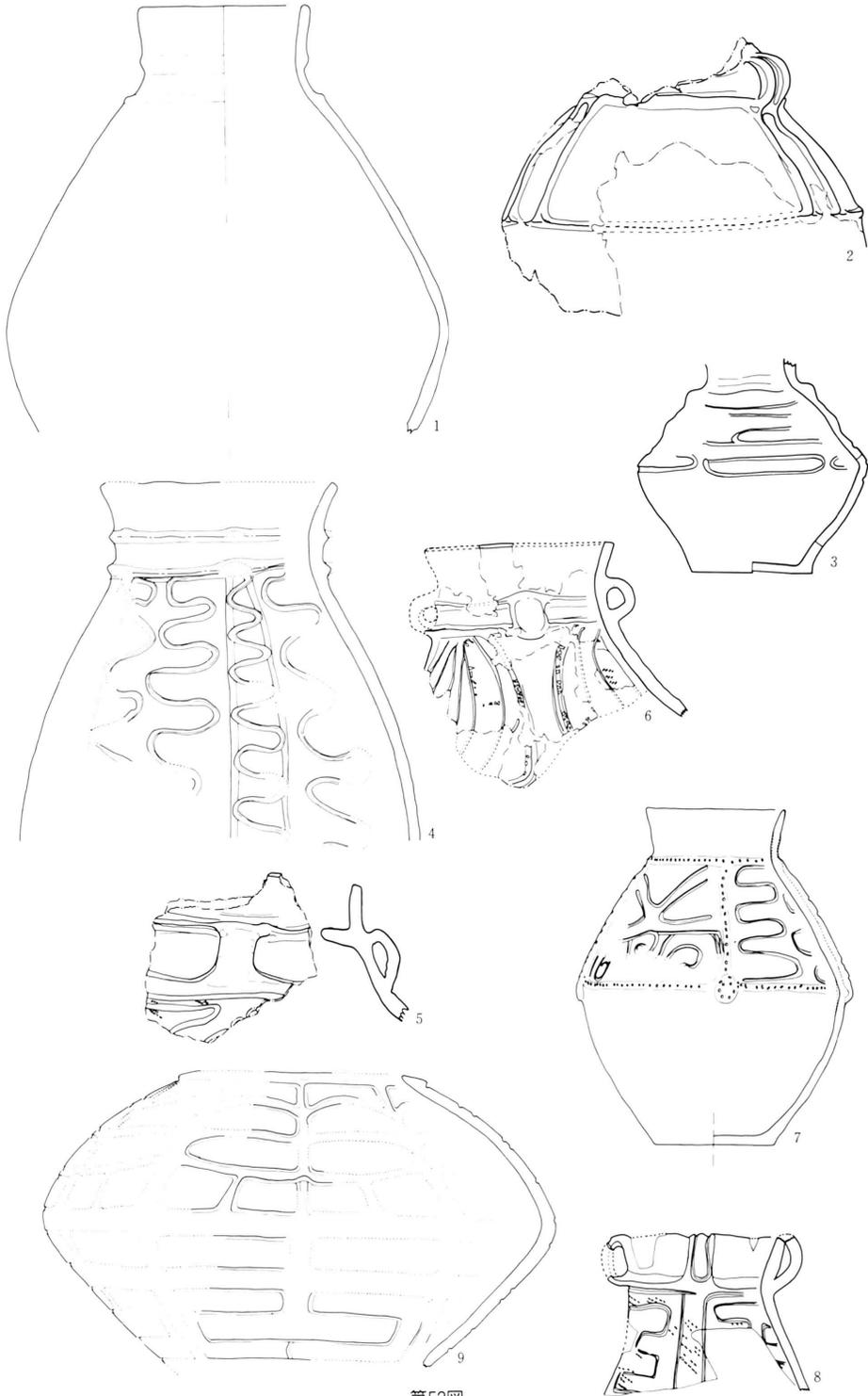
第50図
II C2類 (2-1~8)

1/3 0 1 5 10



第51図

IIAb4類(4-5)、IIC2類(2-9~16)



第52図
 II Ab1類(9)、II Ab4類(8)、II C2類(7~1)

Ⅲ 文様帯をもたぬ磨かれたもの

第1類（復原資料3点）

浅鉢状であるが、それぞれ形状は異なる。1は口縁部が少ししか見られず、全周の形状は不明であるが、幾分の波打は片口等を想像させる。

Ⅲ—第66表

番号	図版番号	版号	口縁形態	表現技法単位（要素）	体部形態	表現技法単位（要素）	地文	器形	備考
1	53	1	山形（外反）	磨き	胴張りぎり	磨き 掘底	—	鉢（浅）d	
2	2		平口	“	“	“	“	d	
3	3		波状（直口）	“	“	“（厚手）（掘底）	—	d	

Ⅳ その他の土器

第1類：体部その他で特徴があるもの（口縁部資料7点、体部資料5点）

破片で部位も明確につかむ事が出来ない中で、特に目につくものを掲げて見た。既述の文様を持ったものが多いが、3は磨消手法が明確で縄文も細い。5は撚糸による平行文を構成し、ⅡBの分類基準に近い様であるが、一応この類に入れてある。

Ⅳ1—第67表

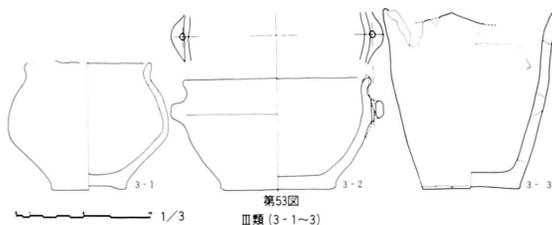
番号	図版番号	部位	特徴（表現技法、単位、要素等）	器形	備考
1	54-1-1	胴底	間隔の短い櫛歯（L-R）逆S字連続、人組文		磨り？
2	54-1-2	胴	斜縄文（R-L）平行沈線、人組状斜行文		ⅡA a 5 磨削
3	54-1-3	“	“（細L-R）人組状文磨消		
4	54-1-4	胴、胴	“（細R-L）、隆帯、沈線（磨消）		
5	54-1-5	口縁（平口）	“（細R-L）、櫛歯状区画		
6	54-1-6	“（波状）	磨き、刺突、隆帯（3文）		
7	54-1-7	胴	斜縄文（R-L）蛇行状区画刺突		
8	54-1-8	口縁（直口）	磨き、爪形（口唇部押圧、腹面入り）		
9	54-1-9	“	櫛歯（L-R）、孤状沈線文（口唇部から）		
10	54-1-10	“（波状）	斜縄文（L-R）、帯状区画沈線文、口唇部3層状刺突		
11	54-1-11	“	磨き、沈線区画、逆S字連続		Ⅳ1-1と胎土類似
12	54-1-12	“（片口？）	磨き2重曲線文（対称形？）		

第2類：既出の土器と様相の異なるもの（口縁部資料1点、体部資料2点、底部資料1点）

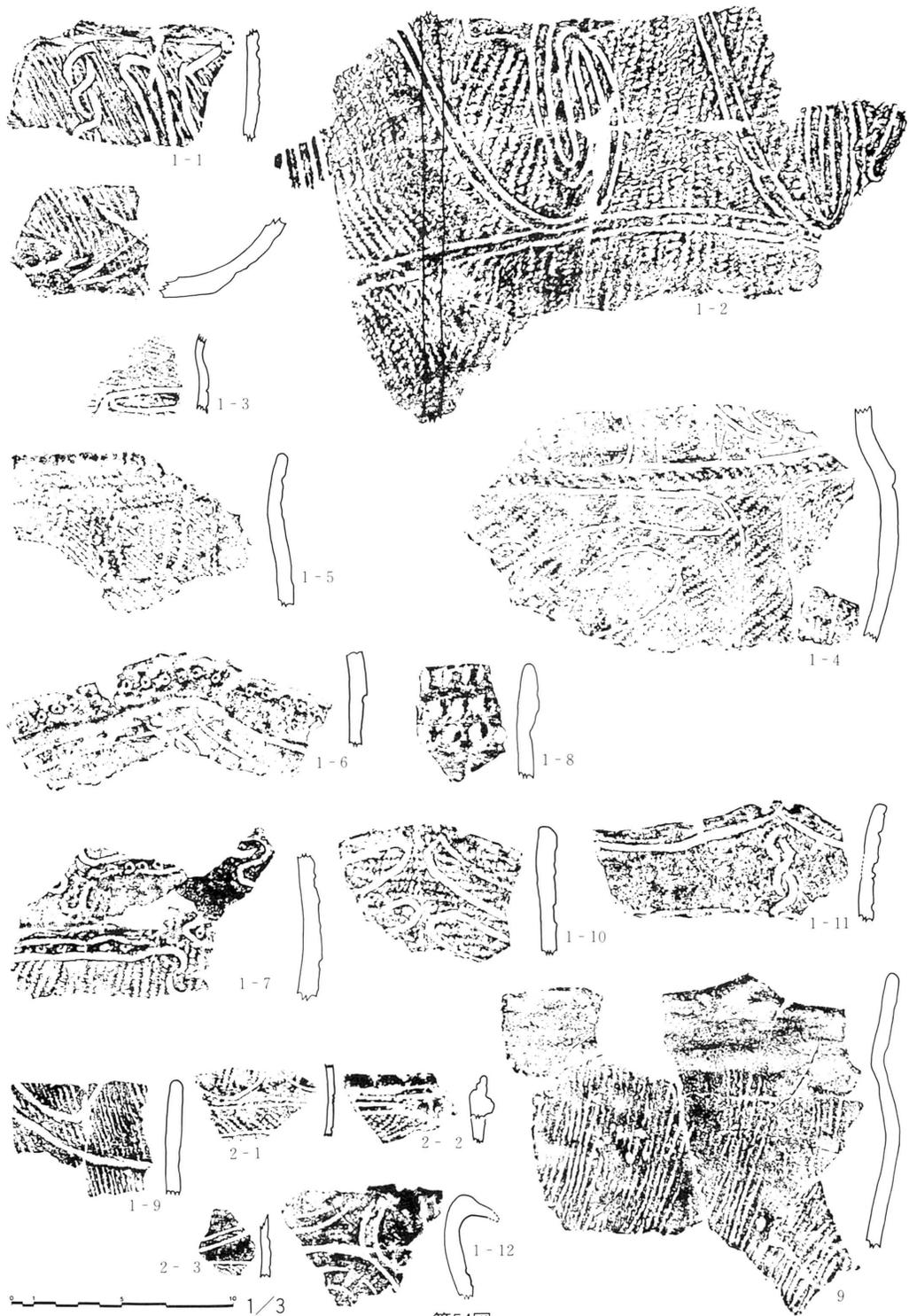
いずれも小破片であるが、沈文の施し方、縄文の細さ、磨消手法の正確さが既出の他のものと容易に識別出来る。2は台付と思われるが、接合出来ないので併置しておく。

Ⅳ2—第68表

番号	図版番号	部位	特徴（表現技法、単位、要素等）	器形	備考
1	54-2-1	体部	2重平行沈線文（半截竹管）孤状文斜行縄文（R-L細）		磨消、外面炭素付着
2	54-2-2	口縁、脚	口唇部突起、三沈線上突起、口唇内部沈線と段、斜縄文（L-R）	台付鉢	台（55-10）
3	54-2-3	体部	平行沈線（半截竹管？）（R-L）の細い斜縄文磨消完全		



第53図
皿類（3-1~3）



第54図

IB類(9)、IV1類(1-1~12)、IV2類(2-1~3)

第 69 表 法 量 一 覽 表

器 高	IA 1 (11 1)	IA 2 (11 2)	IA 3 (11 3)	IA 4 (11 4)	IA 5 (11 5)	IA 6 (11 6)	IA 2 (11 8)	IB 1 (11 9)	IB 2 (11 10)	IB 3 (12 1)
器 高	28.2	25.8	11.3	40.8	9.5	11.6 (推定)	11.0	35.4	11.5	41.0
口 径	20.6	19.4 (推定)	10.3	24.8	9.2	13.9	10.0 (推定)	25.3 (推定)	11.3	30.5
底 径	12.6	9.8	6.4	不明	5.1	6.0	5.6	10.7 (推定)	不明	15.5
最大脚部	18.3	16.6	9.1	28.8	8.4		9.3 (推定)	28.0 (推定)	14.0	29.0
器 高	IB 4 (12 2)	IB 5 (12 3)	IB 6 (12 4)	IB 7 (12 5)	IB 8 (33脚)	IB 9 (13 2)	IIAa3 6 (13 4)	IIAa4 1 (13 5)	IIAa5 7 (13 7)	IIAa6 2 (14 1)
器 高	7.0 (现存高)	9.3 (现存高)	21.4	22.0 (现存高)	13.9	25.6	8.6 (现存高)	22.6	10.4 (现存高)	17.8
口 径	19.8	26.5	18.0	27.0 (推定)	19.0	19.8	29.3	17.2	17.4	34.4 (推定)
底 径	不明	不明	不明	不明	不明	10.6	不明	不明	不明	不明
最大脚部	19.7	25.5	20.7	28.0 (推定)	19.8	19.8	29.4	16.5	15.8	36.8
器 高	IIAb1 9 (14 2)	IIAb1 11 (14 4)	IIAb1 12 (20 1)	IIAb2 5 (14 5)	IIAb3 7 (15 1)	IIAb4 3 (15 4)	IIAb4 4 (15 5)	IIAb4 5 (20 2)	IIAb5 4 (16 1)	IIAb5 6 (16 2)
器 高	29.8	25.4 (现存高)	18.8	14.0 (现存高)	28.0 (推定)	32.1	26.2 (现存高)	10.0	17.8 (现存高)	24.3 (现存高)
口 径	20.2	24.2	13.0 (推定)	31.0	20.4 (推定)	31.9	26.5	12.3	40.5 (推定)	17.3
底 径	11.3	不明	13.0 > (推定)	不明	不明	不明	不明	11.7 (推定)		
最大脚部	22.0	23.3	33.8 (推定)	31.5	22.3 (推定)	30.7	25.0	25.5	38.3	19.0
器 高	IIAb6 1 (16 4)	IIAb6 7 (17 2)	IIAc1 1 (17 5)	II B 4 (18 1)	II C2 2 (19 1)	II C2 4 (19 3)	II C2 5 (19 4)	II C2 10 (19 7)	III 1 (20 4)	III 2 (20 5)
器 高	16.4	29.7	48.5	15.9 (现存高)	27.4	9.2 (现存高)	23.2	21.9	10.3	8.45
口 径	13.1	24.7	27.3	27.9	11.3 (推定)	不明	15.6 (推定)	9.2	9.5 (推定)	13.9
底 径	16.4	13.0	20.0 (推定)	不明	不明	8.0	不明	7.9	5.6	8.65
最大脚部	12.5	21.7	33.3	28.6	29.0	14.5	26.1	18.2	12.0 (推定)	16.0 (突起部)
器 高	III 3 (20 6)	小 1 (22 4)	小 1 (22 1)	小 2 (22 5)	小 2 (22 7)	小 3 (22 2)	小 3 (22 3)		呼称 (写真番号)	
器 高	13.3	3.6	4.95	4.6	3.1	5.35	5.3			
口 径	13.0	3.7	5.2	2.6	4.0 (推定)	4.6	5.1 (推定)			
底 径	7.1	1.8	3.95	2.0	3.8	2.6	3.4			
最大脚部	11.7	4.3	7.6 (突起部推定)	4.0	5.1 (推定)	5.05	5.4			

C. 分類に関する考察

文様帯と器形について

細分されたものの類比について、実測又はそれに準ずる扱いをしたものに限って見れば、I A : 11%、I B : 14%、II A a : 16%、II A b : 32%、II C 2 : 17% で、他の類は数%である。I 類は資料処理上、低い値を示している。次に類比を上記のような限定した条件で、しかも器形との関連を持たせ細分して見れば、II A a は、4 類が他の A a 類より少ない。II A b は、3 類（鉢型 c₃）、5 類（鉢型 c₃）、6 類（甕型 b₁）に数量のまとまりが見られる。次に口縁部資料を加えた値で見ると、

II A a : 1 類（甕型 b₁）2 類（鉢型 c₃）5 類（鉢型 c₃）6 類（甕型 b₁）

II A b : 1 類（甕型 b₁ 鉢型 c₃）3 類（鉢型 c₃）5 類（鉢型 c₃）6 類（甕型 b₁）

II C 2 :（壺型 a₁）等の類比の偏在が見られる。口縁の大きく開いた甕型土器に裝飾文様帯はほとんどない。外反の強い口縁をもつ鉢型土器にも同様な事がいえる。

細分に際しては隆帯手法が大きな位置を占めた。複合口縁の形で、又刺突隆帯区画の形においてである。この隆帯の色々な形態が、器形に制約された結果であるか、構成の仕方の時代的变化によるかは、出土状況が層位的関係を示さない事より、器形に制約をうけたその時代の流行形態とする事が妥当なのかもしれない。

この観点からすれば、縦位隆帯部に把手や、その他の貼付文がつくものも、施法のちがいという事で、この調査地におけるものは、変化の証左となっていないと考えられる。ちなみに隆帯区画は、土器形式区分の円筒下層においても見られている。

文様帯をもとにした分類をして見て、土器の各部の定義、器種の定義に統一性を欠いていた事が感じられた。甕として胴部より上が内側にくびれこんで上部で開いているものを規定した。この甕型の口縁部に関しては、口唇部より一つの文様施法で肩部近くまで、加飾されている場合にも、これを口縁部文様帯として扱った。この様にこの部分を口縁部と見なすなら、この器形は鉢型の一形態であるとも規定し得る。又頸部の規定の仕方によっては、体部に続く文様帯であるという規定の仕方もある。各部の定義、器種の定義が、文様帯の区分において影響をもたらしてくる例である。他の例としては、隆帯（複合口縁）が、胴部より上で内側にくびれ、さらに上部で外に開いた物に加飾された場合である。この時の口縁部文様帯は隆帯とその下に加飾された頸部までのものとした。これについては、口縁部文様帯は、隆帯部に限るべきであると規定も出来そうである。

以上のように統一性に欠ける点があるが、ここでは細分に従って考察し、以上の事柄の規定について適性なものを得る事を今後の課題としたい。

特徴的な文様について

土器観察、文様帯の項や、前項の器形と文様帯で述べたように、複合口縁、刺突隆帯文、隆帯区画文、蛇行雲形文、交互三角形文、紡錘形文、蛇行懸垂文、等が施法上多いものである。これらの文様は単独に、あるいは組合されて構成されている。口縁部文様帯に多い隆文に関するものは42%で、体部文様帯に多い沈線文によるものは58%である。隆文の割合は、複合口縁を構成するもの32.6%、貼付に関するもの27.3%、刺突隆帯が22%、隆帯区画が9.8%となっている。沈文では蛇行懸垂文が26.8%、平行沈線文が22.9%、交互三角形文が15.3%、紡錘形文が14.2%となっている。複合口縁は分類の項で述べてあるように、磨きのみでなく、縄文回転、押圧施文、沈線、刺突等が施されている。刺突隆帯については、竹管様工具で施文しているのが大部分である。刺突の方向は一様でなく、えぐり取る様にしている物、横方向からの竹管刺突で、中空部に入りこんで残った粘土が長いままで焼成を受けているもの、横に押圧して施文しているもの等である。II A a 5-2 は中でもこった施し方である。II A a 5-8 は隆帯の両側から沈線でおさえつけ、押しつけえぐるような手法を加え隆帯をはみださせ、鎖状の効果を出している。尚隆帯ではないが、II A b 7-1 の円形貼付文は角棒様のもので刺突されている。隆帯区画については、体部文様帯としてII C 2-3・11、II C 2-5の腹部、のように刺突のないものと、II C 2-9・10のように刺突や、縄文圧痕のある場合がある。部位の区画まで含めれば、前者にはII C 2-2・4・12・13等が該当する。

口縁部文様帯には部位の区画的なものは多いが、文様帯中の区画（閉じた隆帯）という事で隆帯区画を考えた。磨きの口縁部隆帯区画は破片としてそれらしきものはあるが、大部分は刺突隆帯である。隆帯の形状としては交点に貼付をとまなうものや、円形隆帯文をとまなうもの、II A a 6-5・7のように複合口縁と組合っているものなど様々である。II A b 6-4・5は横位隆帯の刺突が完全に施されておらず、II A b 6-4は体部文様帯も極少部分にしか施されておらず、製作過程のなにかを示すようで興味深い。II A a 6-4は閉じた隆帯という規定にあてはまらないが、沈線区画と区画内の文様の施し方が類似しているのでこの類に入れてある。隆帯区画内の文様で蛇行雲形文はII A a 3-5、II A a 6-3・4、II A b 6-2・4・5・6に共通し、特徴的なものとして特記したい。II C 2-10、II A b 4-5の場合は、体部文様帯としても施文されている事を付記しておく。体部文様帯に多い沈文で交互三角形文は、正逆二つの三角形もしくは三角形を連想させるものを交互に施文しているものとした。三角形文は他の文様の空間をうずめるものとしても多用されている。II A b 6-5の紡錘状文の間の上下にあるものはその典型である。交互三角形の典型としては、II A b 2-5、II A b 3-8、II A b 4-1・4、II A b 6-1・2・6・7、II A b 7-2が挙げられるが、この場合は、前出の蛇行雲形文の様な相似形的共通性ではなく、文様構成の際の割付における共通性である。

次に一番多用されている蛇行文について述べる。蛇行懸垂文としてS字連続乙字連続文と同じ効果をもっている。初期の入組状文としてこの蛇行文は、地と図柄を逆転させる効果をもっている。その性質ゆえか、又その効果を増す為か磨消の手法が暫移的に施され、沈線による区画をもたない。ⅡA b 1-9はその一つの例であろう。蛇行文の他の用いられ方は、器面を区画する手法として又紡錘形文等と組合せとしてである。ⅡA b 3-1・2・4・7・8・9・11、ⅡA b 4-3、ⅡA b 5-4・6、ⅡC 2-8はそれらの例である。ⅡA a 3-6、ⅡA b 1-4・5・11、ⅡA c 1-1、ⅡB-4、ⅡC 2-5・6は、入組状の効果をあまりもたない蛇行雲形文と同じ性格のものであろう。紡錘形文は、器面に軟らか味を与えるが、前述のごとくこれのみで構成されるものは少い。(ⅡA b 5-2の隆帯把手下の文様はその数少ないものの一例である。)紡錘形文で丸味を帯び蛇行文と組合されたものは、核果状文となったりしている。ⅡA b 1-9、ⅡA b 5-4はその例である。平行沈線は、文様帯を区画する形で用いられているが、線の間は弧線でつなげられている例が多い。沈文の内、方形、楕円、長円文は口縁部文様帯、体部文様帯に用いられている。楕円、長円文は、口縁部文様帯にあって、標式的な役割をはたしている。ⅡA b 1-10はこれらが体部に施された例であろう。又ⅡA b 1-12はそれらの文様と丹の塗られた形状がよく調和し、見事なものだったと思われる。

年代について

当調査地の出土土器については、層位的区分がされる資料はなく単一年代を示す資料と見なせる。各々に分類された土器群が装飾の段階の違いはあるにしても、それぞれ共通性をもって構成されている。その共通性の一つ一つについて他遺跡のどの型式と比定されるか検討してみたい。折返し複合口縁については、青森県中の平遺跡において、中期終末にも出土しているが、当遺跡のⅡA a 2-4土器の類似物が縄文後期初頭、十腰内I式として出土している。県内の例では、岩手町どじの沢遺跡、大槌町崎山弁天遺跡がある。刺突隆帯による例は、岩手町どじの沢、盛岡市川目遺跡、玉山村日ノ戸遺跡や、陸前高田市門前遺跡の第I群2・3類Aとして後期初頭の位置づけがなされ、門前遺跡の第II群3類Aは、堀之内I式併行ともされている。隆帯区画については岩手町どじの沢遺跡・高無遺跡、盛岡市川目遺跡、玉山村日ノ戸遺跡の後期初頭遺物において類似の施法が見られる。以上の類似遺物はⅡA a 6-3・4・5、で更にこれらに加えて蛇行文(懸垂文)、蛇行雲行文としたものも同一個体に施文されている。この蛇行懸垂文は、県内他遺跡でもまた中の平遺跡でも堀之内I式対比要素としている。紡錘形文と交互三角形文については、貝島貝塚、第II群第2類、崎山弁天遺跡第IV群2類に類似の文様が見られ、これらの遺跡では堀之内I以前の時期との比定を考えているようだが、これらの文様は蛇行懸垂文等と構成されているので、堀之内I式併行と考えたい。又平行沈線や弧線でつないだそれ又は長円、楕円文等は、盛岡市川目遺跡、玉山村日ノ戸遺跡、岩手町どじの沢遺跡・

高無遺跡・横沢遺跡の後期初頭遺物に見られる。青森県十腰内遺跡においては、これを十腰内 I 式の型式表徴としている。当調査地遺物 II A a 1-6・7、II A a 3-4・5・6(口縁部)、II A a 5-3、II A a 6-2、II A b 1-4・8(口縁部) II A b 6-1(口縁部)、II A b 4-2・3(口縁部)、II C 1-2、は十腰内 I 式の型式表徴に類似の要素をもつので後期初頭、十腰内 I 式併行と考えられる。以上のように当調査地の土器は、堀之内 I、十腰内 I 併行と考えられ、同一の個体に堀之内式と十腰内式の型式表徴をもつものもある。

出土状況について

当調査地には調査経過で述べたように、遺物を含む攪乱層があり、その遺物と本来的な包含層中の遺物が出土地区を違えて接合する例も見られる。遺構にともなう埋設土器等は、まとまりを持って出土した。その他の大部分は同一標高での広がりや、地形の傾斜にそった広がりや、同一地点での垂直方向の広がりが見られる。ここでは、接合遺物の出土地区をもって、それら的一端を示す。以下土器名、出土地区、東西・南北の広がりを示す。

II A a 2-1 (36図 2-1)	-[A g 06 ~ B f 18]	12m 27m	東西の広がり
II A a 3-6 (35図 4)	-[A i 18 ~ B g 09]	9m 24m	北の平均は 37.4m である。この広
II A a 4-1 (35図 5)	-[A f 03 ~ C d 15]	3m 27m	がりの差を単に地形に求めれば、
II A a 6-3 (37図 6-3)	-[A d 12 ~ B j 18]	6m 21m	南、北の傾斜は東西の傾斜より大
II A b 1-2 (38図 1-2)	-[A h 53 ~ B h 18]	21m 30m	であるからとする事が出来る。出
II A b 1-6 (38図 1-6)	-[A d 03 ~ B f 15]	12m 21m	土地地区の最大離距離で考えられる
II A b 1-10 (39図 3)	-[A e 12 ~ B g 59]	21m 33m	ことには限界があり、出土数との
II A b 2-3 (40図 2-3)	-[A b 12 ~ B c 03]	9m 30m	関係については別項で述べてある
II A b 4-3 (43図 4)	-[B a 59 ~ B g 03]	12m 18m	ので、そちらの結論を適用し考え
II A b 5-2 (43図 6)	-[A e 03 ~ B a 50]	3m 18m	たい。出土状況を示した写真は第
II A b 6-4 (45図 5)	-[A f 15 ~ B d 06]	9m 24m	10図版にある。その図版の 4 は 2
II A b 7-2 (47図 4)	-[A c 18 ~ B f 12]	6m 39m	の出土状況で、脚部付根に一段の
II C 1-2 (49図 2)	-[A a 15 ~ B d 56]	21m 39m	隆帯を持ち下部は 4 個の長円文が
II C 2-3 (52図 2)	-[A e 03 ~ B j 21]	18m 45m	施されている。角閃石を含む硬堅
II C 2-5 (48図 3)	-[A e 03 ~ B f 06]	3m 33m	な土器で脚より上部の破片は、確
II C 2-6 (50図 2-6)	-[A c 15 ~ B j 15]	12m 51m	認出来ない。3 は 55図 1 の小型壺
II C 2-9 (52図 6)	-[A e 09 ~ B h 21]	12m 39m	で、C b 15 地区のものである。A e
II C 2-10 (52図 7)	-[A d 12 ~ B c 06]	6m 27m	15 地区には、口縁の一部が出土し
II C 2-11 (51図 2-11)	-[A a 09 ~ C b 15]	6m 63m	た。5 は標式にて示した出土地点
小型壺 (55図 13)	-[A g 53 ~ C e 18]	21m 54m	と包含層中の岩石の出土状況を示

小 型 壺(55図1)—〔A e 15～C b 15〕 0m 51m したものである。

平均 10.6m 34.0m

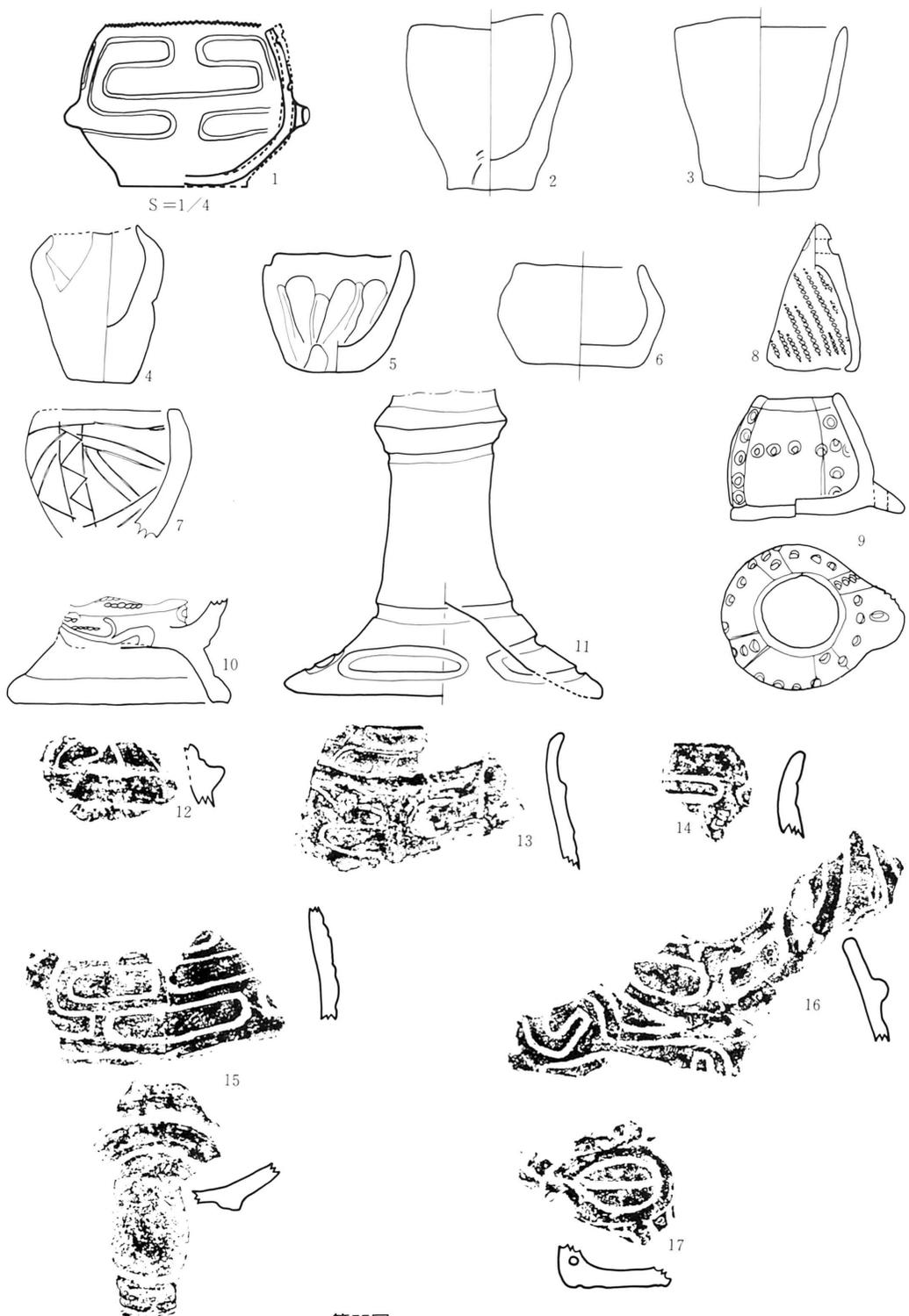
(2) 土製品について

調査地域の遺物中、土器(小型土器を除く)、石器を除いた人工遺物をこの項にまとめた。量的に多い円盤状土製品、小型土器、特殊土製品の順で述べてある。小型土器については、手の掌に納まる位の大きさを範囲として考えた。これらの土製品については用途不明な物が多く、この事が遺構の性格づけ、遺跡の性格づけを、難しいものになっている。出土状況と遺構とのかかわりを明確にした上で、セット関係等考えていかなければならないが、ここでは概括的な内容について述べ、前述の事は今後の課題としたい。

a 円盤状土製品について

土器片において割口が人為的に意図をもって、形成されたもの、用途を考えた上で粘土を成形して焼き上げたものをここでは扱う。その数は、およそ180点で出土区域は、住居址付近と見られる。これらのものは前者において、整形し角を取り丸味をもたしてあるもの、打欠いたままであるが形のととのっているもの、打欠いたままのものと同区分出来る。それぞれのものは、ほぼ同一の又は類似の用途をもつものの、製作過程の段階におけるものではないとも考えられる。整形されたものには、半分になっているものもあり使用過程における破損も考えられる。現在の形状からその用途を推定する事は非常に難しい事であるが、打ち欠き具合や、削り具合から紐をかけて使用した事も考えられる。青森県是川村、中居遺跡では、漆かアスファルト様の接着剤を塗り、土器の孔の上に張りつけ補修用に使った例もある。岩手県内の例では、中心に孔をあけてあるものもある。紐をかけて使用する場合は錘としての機能も考えられるが重さ等より単独でなく複数での使用が考えられる。大きさは、後述のもの大きさを越えるものはなく、むしろ小さいものも見られる。製作の過程に関する事として数個体の土器片(写真図版第21図6番、7番、8番)の一部と思われるものを示しておいた。これらの関係は6番の土器が、(A i 09、A f 06、A i 50・53、A h 56・59、B b 53、第1 フラスコ状土壙)土板が、B f 50。7の土器が(A e 15～18、A f 18、A g 15)土板が、B f 12。8の土器が、(A e 12、B f 15)土板A e 18と、それぞれ分布している。次に粘土焼成により作られたもののその性状について述べて見たい。写真版第21図2、は第1号住居址内の炉跡と同じ標高で出土したもので、径4.4cm厚さ1.2cm、円形に近く重さ29.7gである。円形の平面には木葉痕指痕があり、他の面には指でなでつけた跡がある。一部欠損しているが、その反対の角が6×4mm、深さ2mm程半月形に削られている。側面の形状は整っていない。焼成の具合は良好で、橙色を呈し、胎土の色調も同様である。土性は6mm程の礫を含むが、粗な感じはない。角閃石や輝石が、器面や割口において目につく。他に%程の破片で同様のものがある。

既述の事であるがこの土製品の法量を越える土器片利用の土製円盤はなく、いずれもこの値に近い。



第55図

小型土器(1~7)、小型壺形土器(12~16)、特殊土製品(8・9・17)

b. 小型土器について（復原資料8点、口縁資料2点、底部資料21点）

大型土器の模型的なものも見られるが、この類独自の形態をもち、独自の用途もあると思われる。底部の資料数が多かったのでこれをもとに分類して見た。（写真版第23図参照）

1. 底が幾分丸味をおび、体部において段を持っている。写真版第22図4はこの類に属する。
- 1' 上げ底で尖底的である。器全体が赤褐色を呈している。（縄文後期注口土器底に類似）
2. 平底で底体の境のくびれがない。写真版第22図5・7はこの類に属する。
3. 平底で底体の境がくびれている。写真版第22図2・3はこの類に属する。縄文を施されているものが多い。
4. 平底で器形はコップ形のもので推定される。沈線が施されているものもある。

以上の他にも、写真版第22図1の釣手付小型の鉢がある。調整された沈線で工字文に近い蛇行文が施され、口唇部には刻目状施文、底部には紐掛りの溝がつけられている。

写真版第20図3はツボ型の破片を示した。イは釣手と隆帯をもち、楕円文や入組状文が沈線で施されている。ロは釣手付、ハは頸部に隆帯を持ち蛇行沈線文を施し擦消的磨き方である。ニは楕円文が頸部に施され体部には、磨消縄文の手法が施されている。

写真版第22図8は器種不明のものであるがこの類に含めた。外面には沈線と刺突にて文様が描かれており、内面には炭質物が付着し、くすんだ色をしている。

c. 特殊土製品（用器以外のもの）

土錘—完形の半分と思われる部分で長さ4.2cm、短巾1.6cm、長巾（推定値2.0m）で紡錘形に近いものと思われる。長軸方向に径2.2mmの竹ひご状のもので穴をあけられている。この穴の方向をもつ一条づつの溝が表面に見られる。これは巾2.6mm深さ1mm断面が方形のものである。胎土に角内石、植物質（痕跡）を含む。滑車状耳飾（完形2点破片1点）—写真版第24図4は第1住居址炉跡近くに出土した、ねじった感じになでつけ磨いてある。穴径6.2mm、くびれ部径18.7mm最大径23.4mm長軸長22mmの鼓形に近い。同図3は4とほぼ同じ大きさで、作りは幾分粗雑である。鏝状土製品（完形品2点頂部破片3点）写真版第24図1は縦55.8mm、最大横径35.5mmの大きさで、扁平な頂部に径3.4mmの穴があけてある。表面は不整形に磨かれ、丹が塗ってある。胎土の石英等も目につく。これは円形土壙の底に近い黒色埋土より出土した。同図2は縦33.4mm横径28.5mm厚さ3mmの錐形、頂部に径3.5mmの穴があり、表面にはL—Rの斜縄文が施されている。胎土に浮石質のものが目につく。第2住居址関連出土品である。土偶—写真版第24図6は胸部破片と思われ、図の位置関係において腹上部に二つの貫通孔がある。胸部左上部から長さ6mm程の沈線が見られる。乳房の付方からすれば貫通孔側が胸部という見方も出来る。その他—写真版第24図5は内部に炭素が付着している。3.5×2.9×1.5cmの大きさのもので、釣手状の突起をもち、表面に対称形に沈線が施

されている。

(3) 石器

本調査地において、石器は調査区域のほぼ全面から出土している。遺物の出土層位は地区により若干異なるが、基本層序第Ⅱ層からの出土が主である。以下その概要を記す。

なお、石器の分類にあたっては、製作者、あるいは使用者の目的を想定し、大きさを含む形態、技法等を前提とし、機能をも考慮しながら行った。

器種名、技法名は、通常用いられている名称を努めて採用した。

説明は、形態、技法、使用痕の有無等の順で行ない、特に剥片石器の技法については力学的に異ったと思われる剥離作業を、一次的剥離を加撃剥離、二次的剥離を押圧剥離、と区別した。また、加工面積の広い方を腹面とし、反対側を背面と呼ぶことにした。

各種計測値は、石材、産地などとともに一覧表にまとめた(第70表～第73表)。また、主な測点は、「第70表」中段に載せた。「表」、「実測図」、「写真」は一連の通し番号を用い、実測図の縮尺は $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{3}$ とし、写真の縮尺は特に統一しなかった。

a 石 鏃 (1～27)

第1類(1～5) 扁桃形に近く一端が尖るものである。比較的大型で、鏃というより槍に槍に近いものも含まれている。一応、鏃としておく。

1 a (1・2)： 基部に丸味をもち、腹面は基部から側縁、先端にかけて入念な押圧剥離を施す。背面は押圧剥離によるトリミングが施こされている。断面は扁平なカマボコ形をしている。(4・5) 先端欠損のため全形は不明である。

1 b (3)： 基部は若干尖り、腹面中央に加撃剥離によってつくられた稜が走る。基部から側縁、先端にかけて簡単な押圧剥離を施こしている。背面は自然面を残しトリミング程度の加工が施こされている。

第2類(6～11) 第1類より小型のものである。

2 a (6)： 基部が丸いもので、両面とも基部の一部、側縁の一部に簡単な押圧剥離が施こされている。断面は扁平なカマボコ形である。

2 b (7・8)： 基部は直線的で自然面を残すものである。腹面の側縁から先端にかけて不規則な押圧剥離を施こしている。背面は基部に近い側縁から先端にかけて不規則な押圧剥離が施こされている。断面は円に近い平行四辺形である。

2 c (9)： 基部が若干内彎する。腹面には一周する不規則な押圧剥離加工がある。背面は加撃剥離後、二側縁に押圧剥離が施こされている。

2 d (11)： 基部が若干尖るもので、基部から一周する規則正しい押圧剥離が施こされ、背面も同様である。断面は円にちかい平行四辺形を示す。

第3類(12~19) 形態の整った無茎鏃の各種を含む。

3 a (12) : 基部が直線的な縦長二等辺三角形である。腹面、背面とも規則的な押圧剥離を多用する。

3 b (13) : 以下は「抉り入り」である。二側縁に若干彎曲があり、下半が裾開きである。両面ともに規則的な押圧剥離が施こされている。

3 c (16・18) : 先端欠損である。身が矢羽根状にちかいものである。両面とも押圧剥離加工である。

3 d (14・15) : 側縁が直線的な縦長二等辺三角形である。両面とも押圧剥離加工である。

3 e (17) : 先端欠損の鏃形にちかい鏃で、両面とも規則的かつ入念な押圧剥離が施こされている。

3 f (19) : 身の部分と茎部の一部が欠損している。いわゆる「片脚鏃」に近い。

第4類(20~27) 有茎鏃である。

4 a (20~22) : 身の部分は縦長二等辺三角形で、両面とも押圧剥離を多用する。

4 b (23, 24, 26) : 身の部分が正三角形にちかいもので、身に対し茎部の大きいもの(24)、なごごにタール付着の鏃もみられる(26)。いずれも押圧剥離加工である。

4 c (25) : 身の先端が欠損している。腹面は不規則な押圧剥離が施こされ、背面はトリミング程度の加工である。

4 d (27) : 身の先端が欠損している。身の部分と茎部の区分が明瞭でなく、平面形は菱形にちかい棒状の鏃である。両面ともに不規則な押圧剥離が施こされている。

b 石 錐 (28~30)

(28) は縦長剥片(一次剥離面を両面のどちらかに残されているもので、打撃点ないしはバルブがある方を上とし、対面を下とした)利用の有柄の石錐で、柄の背面は上方からの加撃剥離である。一側縁に刃潰し加工が施こされている。錐部は両面の一側縁に入念な押圧剥離が施こされているが、加工縁辺は表、裏で、逆をなす。錐部は使用痕と思われる円滑がある。

(29) は縦長剥片利用の有柄の石錐である。錐部は一側縁に対し両側からの押圧剥離加工で、いわゆる両刃をなす。使用痕有り。

(30) 錐部は簡略な押圧剥離加工である。使用痕不明。

c 石 匙 (31~35)

形態は、縦長らしい未完成品、端部欠損のため詳細は不明である。

d 石斧 (36～49)

すべて磨製石斧で、基部あるいは刃部が欠損し全形は不明である。刃部のみのものは、平面形は方形、横断面形は楕円形ないし長方形に近く、縦断面形は楔形にちかい両刃である。刃部は擦痕と剝落があり使用痕と考えられる。基部のみのものは、平面形は縦長台形、三角形、横断面形は方形、または円形に近い。基部頂部に打撃痕、剝落が認められ、これらは a 直接使用、b 二次的使用、c 装着痕、とも想定されうる。

e 搔器 (50～84)

定形、不定形の二種類がある。主に縦長剝片を利用している。刃部形成は、背面方向からの押圧剝離を原則とする。背面には加工の施こされないものが多い。

腹面、背面の一侧縁に加工を施こしたもの、腹面全面に加撃剝離による粗い加工のもの、また、両面加工のものなどは、石篋、削器として取扱うべきと思う。一応こゝに置いておく。これらのものを五つのタイプに大別し、その中で、特徴的に細分できるものは細分を試みた。

I 類 (50～53) 形態は方形で、二側縁ないし、三側縁に押圧剝離加工が施こされたものである。加工の部位により、四種に細分される。

I a (50)：長方形の縦長剝片利用で、二側縁に対し部厚い押圧剝離加工のあるもので、腹面に自然面を残す。

I b (51)：楕円に近い長方形の縦長剝片利用である。腹面加撃剝離後、上部、二側縁に押圧剝離加工が施こされている。

I c (52、54)：横長長方形に近く、腹面加撃剝離後、左側縁と下部に規則的な押圧剝離が施こされている (52)。また、上部に自然面を残すものがあり (54)、上部欠損石器というより、初めからこのような形態を目的とした定形搔器と考えられる。どちらも右側縁近くに上部から下部方向に稜が走る。

I d (53)：形態は I c と同じである。横長剝片利用で腹面加撃剝離後、右側縁と下部に押圧剝離が施こされている。上部縁に刃潰し加工があり、右側縁近くに稜が走る。

II 類 (55、56) 形態は縦長方形に近く加工の違いで二種に分けられる。

II a (55)：縦長剝片利用で、腹面下部と二側縁に部厚い押圧剝離加工が施こされ、左側縁は内彎した棒状搔器である。

II b (56)：縦長剝片利用で、腹面全面に加撃剝離による粗い加工が施こされ、上・下部、右側縁に簡単な押圧剝離が施こされている。背面も右側縁に押圧剝離が認められる。

III 類 (57～59) 形態は、円形あるいは三角形で、下部にのみ部厚い押圧剝離が施こされているものである。

IV類（60～83） 不定形で、不規則任意方向からの押圧剥離加工が施こされたものである。これらのものには、一辺加工、二辺加工があり、細分すれば四つのタイプに分けられる。

IV a（67～71）： 腹面、左側縁と下部に押圧剥離加工が施こされているもの。

IV b（66）： 腹面、右側縁と下部に押圧剥離加工が施こされているもの。

IV c（60～67・72・73・75～81）： 腹面、下部にのみ押圧剥離加工が施こされているもの。

IV d（74、82、83）： 両面の一侧縁に、押圧剥離加工が施こされているもの。

V類（84） 不定形で腹面下部、右側縁から上部にかけて、押圧剥離加工が施こされている。背面は下部に押圧剥離が施こされた両刃のものである。刃部の角度は40度を示す。

f 石核（85～91、92～100）

形態的には、円筒形（85）、亀甲形（86）、双三角錘形（88）、楔形（90）、多面体形（91）、とバラエティに富む。技法的には調整打面の有するもの（85・90）、と住意方向からのものに分けられ、また、現状で自然面を残しているものもある（89）。

比較的小形のものが多く、稜線部に使用痕と思われる細かな破碎痕をもつものは石核石器としてもよいと思われる（92～100）。なお、これらの石核石器としたものはグレイバー、ないしスクレイパー的な用途も考えられ、今後の検討課題としたい。

g 使用痕のある剥片（101～110）

剥片の縁辺に意識的な調整、加工は施こさず、縁辺をそのまま、刃部として使用したものとと思われる。形態には、当然規格性は認められない。

h 剥片（111～117）

腹面には多くの加撃剥離時の稜が走る。背面は主要剥離面である。バルブ、打撃面を残すものが多い。自然面を残すものと（111～114・117）、斜角の剥片とに分けられる（115・116）。

i 石皿（118～123）

定形性は特に認められない。部厚い板状のもので両面とも磨擦痕のあるもの（118・119）、自然石の一面だけを主として利用しているもの（120・121）、また、裏面を砥石として利用しているもの（120）、破片であり全形は不明であるが、周辺に上手状の成形された陵が走るもの（122）、と三つのタイプに分けられる。

j 凹み石（124・125）

124は、片面に凹部がみられ、ほぼ全面に擦痕が認めらる。擦石としても使用している。

125は、両面に凹部がみられる。

k 石 錘（126～133）

形態には、楕円形、円形、不整形のものがあり、長軸の両端を打ちかいてヒモ懸けとしている（126）。円形で、両端を軽く打ち欠いたゞけのもの（127・132・133）、不整形で、鞍部を利用し対面を簡単に打ち欠いたもの（128・129）、円形で打欠痕を有するもの（130・131）がある。円盤状石製品と見られるものもあるので、今後の検討課題としたい。

l 擦 石（134～140）

形態は円形、楕円形で、表面は滑らかに磨かれている。断面は、楕円形と扁平なものに分けられる。両面の滑らかに比べ、打撃痕と考えられる凸凹が表面の一部にみられるもの（135）、他は周縁部にみられるものが大部分である。

周縁部の剥落の目立つもの（135～139）、火熱によつての剥落とみられるものが三例（135・136・138）あり、興味深い。

まとめ

以上、卯遠坂遺跡出土の石器を各器種ごとに記した。縄文時代石器には、通常一次生産用具を利器とし、「磨、打製石斧、石槍、石鏃、搔器」、二次生産用具を工具とし、「石錐、彫器、石皿、磨石、砥石」、その他として、「抉状耳飾、玉類、岩偶、石剣、石刀、石棒、石冠、青竜刀形石器、独鈷石」等に分類されている。それらに該当するものも多く出土している。しかしながら実用面においては一つの用途に固定されないでみるべきであろう。たとえば本遺跡出土の石器では、狩猟用具として、「石鏃、石斧」、採集用具として、「石斧、搔器、使用痕の有る剥片、石核石器」、調理用具として、「搔器、擦石、石皿、凹石」、漁撈用具として、「石錘、石鏃」、工具として、「石斧、石錐、搔器、擦石、凹石、使用痕の有る剥片、石核石器」素材として、「石核、剥片」、など多角的な使用が想定されうる。

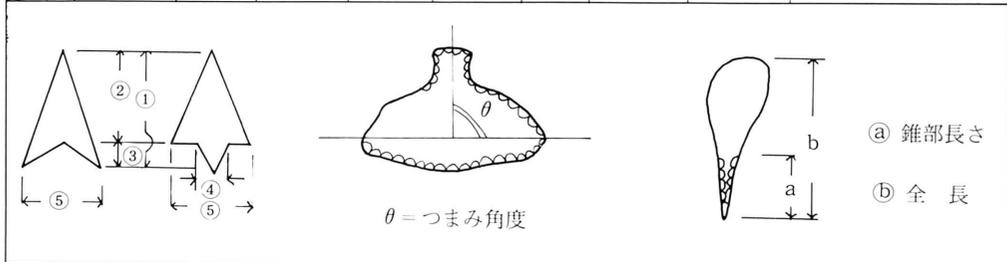
発掘区域は遺跡全体のごく一部分であるが、傾向として、刃物である搔器に比べ、石鏃の量が少ないこと、円盤状土製品が多量に出土していることから、狩猟生活というより、採集、漁撈生活にウエイトが置かれていたことを示す。

さて、擦石であるが、その形態からみて調理用具としての対象物の擦り潰し、割砕等を主用途として想定することには同意する。たゞ、大熱を受けての剥落や、亀裂が入ることは何を意味するものであろうか。今後これら擦石の出土例による比較検討を必要とする。

第 70 表

石 鏃

図版	地 区	長 さ (mm)			幅 (mm)		重さ(g)	石 材	産 地
		①	②	③	④	⑤			
1	A i 18	34	—	—	—	25	7.4		
2	A g 18	40	—	—	—	26	10.2	チャート	北上山地古生層
3	A i 18	37	—	—	—	26	7.4		
4	A i 18	—	—	—	—	24	3.5		
5	B g 6	—	—	—	—	—	1.5		
6	C g 15	27	—	—	—	19	3.5		
7	B i 18	20	—	—	—	17	2.6	メノール	
8	B a 21	18	17	1	—	13	1.1		
9	A f 18	23	—	—	—	16	2.0		
10	B f 6	—	—	—	—	—	0.9		
11	B f 9	29	—	—	—	16	2.1	硬質真岩	
12	B e 62	37	36.5	—	—	14	2.4	硬質真岩	
13	A j 15	27	21	6	—	15	0.6		
14	B b 9	23	17	6	—	14	0.6	フリント	
15	B f 15	22	16	6	—	10.5	0.4		
16	A f 15	—	—	5	—	13	0.5		
17	B b 6	—	—	6	—	13	0.4		
18	A i 6	—	—	2.7	—	12.5	0.3		
19	A b 12	—	—	3.5	—	13	0.6		
20	B a 12	28	23	5	5	15	0.9		
21	B b 18	26	23	3	4	10	0.7		
22	B a 6	22	17	5	4	9	0.6		
23	A e 18	19.7	16.2	3.5	4.5	11	0.4		
24	A i 53	17	11	6.0	5	—	0.3		
25	A i 18	—	—	6	6.5	11	0.4		
26	B h 50	—	—	—	3.5	11	0.5		
27	B d 18	—	—	10	8.0	11	1.1		



石 錐

図版	地 区	錐部断面形	錐部長さ①	長 さ②	幅	重 さ	石 材	産 地
28	B D 15	台 形	10	47	25.5	7.7		
29	A j 18	三 角 形	16	35.3	15.7	3.6		
30	A j 15	五 角 形	4.5	29.5	17.2	4.2		

石 匙

図版	地 区	長 さ	幅	重 さ	つまみ角度	石 材	産 地
31	B d 56	32.2	13.6	1.9	18°		
32	A g 18	—	22.3	3.9	—	頁 岩	

第 71 表

図版	地 区	長 さ	幅	重 さ	つまみ角度	石 材	産 地
33	B f 18	—	23.5	4.8	—		
34	B a 9	64.9	33.4	22.8	180° ?	(未成品)	
35	B e 6	52.8	37.5	26.6	—	(未成品)	

石 斧

図版	地 区	頭部幅	刃部幅	長 さ	厚 さ	重 さ	刃部角度	石 材	産 地
36	B j 18	—	42.7	—	24	109.2	80°		
37	A f 9	—	約36.5	—	23.5	121.1	100°		
38	B b 9	約15	約34.7	—	21	95.8	—		
39	A j 15	—	—	—	28	131.3	110°		
40	A i 18	—	—	—	39	152.2	85°	粗粒石質凝灰岩	
41	A i 18	—	33	—	25.5	108.2	90°		
42	A i 21	—	31	—	26	137.3	90°	プロピライト	
43	B c 9	—	30	—	24	104.4	80°	プロピライト	
44	B h 12	15	—	—	24.5	147.3	—		
45	B a 3	—	—	—	25.7	94.0	—		
46	B Z	—	—	—	約19	38.5	—	凝 灰 石	
47	B Z	10	—	—	約22	34.0	—	砂 岩	
48	B b 9	19	—	—	約13	26.0	—	濃緑色凝灰岩	
49	A Z	11	—	—	約 9	19.6	—	輝緑凝灰岩	

挿 器

図版	地 区	背面調整	片面調整	長 さ	幅	重 さ	石 材	産 地
50	B b 59	二辺加工	—	64.3	40.3	42.9	硬質頁岩	
51	A i 56	三辺加工	—	64.5	48.7	42.8	硬質頁岩	
52	A b 6	三辺加工	—	—	48.5	27.0	硬質頁岩	
53	A i 15	三辺加工	—	24	37.3	8.7	硬質頁岩	
54	B i 15	四辺加工	—	22.8	38.8	8.8	硬質頁岩	
55	不 明	三辺加工	—	83.4	29.8	29.5	硬質頁岩	
56	A c 12	四辺加工	—	75.5	32.5	32.3		
57	B c 21	二辺加工	二辺加工	51	40	26.3		
58	A e 18	二辺加工	—	34.5	46.7	20.0		
59	A e 12	一辺加工	—	28.5	42.5	13.1		
60	B f 15	一辺加工	—	51	74	44.2	石質凝灰岩	
61	B f 12	一辺加工	—	39	30	13.1		
62	A i 15	一辺加工	—	31	50	8.6		
63	B f 3	一辺加工	—	35.5	49	18.7		
64	B b 6	一辺加工	—	47.2	68.8	42.8		
65	C b 15	一辺加工	—	49	39	18.2		
66	B d 9	二辺加工	—	38.8	34.5	14.2		
67	A h 15	二辺加工	—	21.4	25	5.2		
68	B h 12	二辺加工	—	33	16	5.2		
69	B a 12	二辺加工	—	45	17	6.9		
70	B a 12	二辺加工	一辺加工	42	47	19.6		
71	B j 18	二辺加工	一辺加工	44	27	8.8		

第 72 表

挿 器

図版	地 区	背面調整	片面調整	長 さ	幅	重 さ	石 材	産 地
72	B g 9	二辺加工		36.5	29.5	10.3		
73	B a 6	一辺加工		35	28.2	8.7		
74	B g 15	二辺加工	一辺加工	35.3	24.8	5.5		
75	B b 15	一辺加工	—	—	—	8.9		
76	B f 9	三辺加工	—	55	61.5	57.1		
77	B c 9	二辺加工	—	62	39	32.0		
78	B i 21	一辺加工	—	29	19.5	5.8		
79	B g 21	一辺加工	—	17	23	2.1		
80	A j 9	一辺加工	—	—	—	2.9		
81	A g 18	一辺加工	—	29	21	4.6		
82	A g 18	一辺加工	一辺加工	64	30	21.6		
83	B a 15	一辺加工	一辺加工	33	74	35.5	珪質頁岩	零石（第三紀層）
84	A 区	三辺加工	二辺加工	24.7	26.7	5.5		

石 核

図版	地 区	高 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 材	産 地
85	B c 18	60	52	—	152.8	硬質頁岩	
86	B g 9	51	32	—	37.9		
87	C g 21	47.8	36.5	—	48.6	玉 髓	
88	B d 9	49	39.5	—	58.0	玉 髓	
89	B e 9	32	55	—	45.5		
90	A i 18	40	58	—	51.8	石 英	
91	B d 9	45	54	—	50.7	玉 髓	

図版	地 区	長 さ	幅	重 さ	使用痕の有無	石 材	産 地
92	B a 12	12.4	28.6	12.2	二 辺 使用		
93	B a 3	44.0	33.5	18.5	—		
94	A i 24	29.5	27.5	8.3	—	黒 曜 石	（第三紀）
95	B f 9	20	34	20	—		
96	B b 3	30	27	8.1	一 辺 使用		
97	B i 18	22	27	5.7	二 辺 使用		
98	B h 3	18	16	3.1	一 辺 使用		
99	A i 24	51	39	31.8	一 辺 使用		
100	A j 15	45	40	20.9	二 辺 使用		

使用痕の有る剥片

図版	地 区	使用痕の部位等	長 さ	幅	重 さ	石 材	産 地
101	B a 6	一 辺 使用痕有り	49	28	7.8	玉 髓	
102	A j 15	一 辺 使用痕有り	31.5	41.5	11.4		
103	B f 18	二 辺 使用痕有り	34	57.5	30.2	硬質頁岩	
104	B h 9	二 辺 使用痕有り	35	41.0	15.3		
105	B a 12	一 辺 使用痕有り	31.1	30	9.7		
106	B b 18	二 辺 使用痕有り	29	36	9.0		
107	A j 18	三 辺 使用痕有り	40.8	26	10.7		
108	B g 18	一 辺 使用痕有り	21	19.8	3.5		

第 73 表

使用痕の有る剥片

図版	地 区	使用痕の部位等	長 さ	幅	重 さ	石 材	産 地
109	B a 3	二辺使用痕有り	38.3	21.4	4.0		
110	A j 18	一辺使用痕有り	24.5	17.2	4.6		

剥片

図版	地 区	使用痕等の有無	長 さ	幅	重 さ	石 材	産 地
111	A j 18	—	58.4	57.2	61.3	玉 髓	
112	C a 24	—	60	40	30.4		
113	A g 18	—	45.5	48.7	30.1	硬質頁岩	
114	A h 15	—	47	36	27.4	玉 髓	
115	B a 6	—	68	57	77.5		
116	C a 21	—	58.5	59.5	34.8	玉 髓	
117	B a 6	—	53.8	53.8	32.3	玉 髓	

石 皿

図版	地 区	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 材	産 地
118	B Z	—	—	—	885		
119	A i 18	—	—	—	925		
120	B a 6	—	—	—	845		
121	A h 18	—	—	—	1,380	輝石安山岩	
122	B Z	—	—	—	216		
123	A h 12	—	—	—	168	粗粒凝灰質砂岩	

凹石

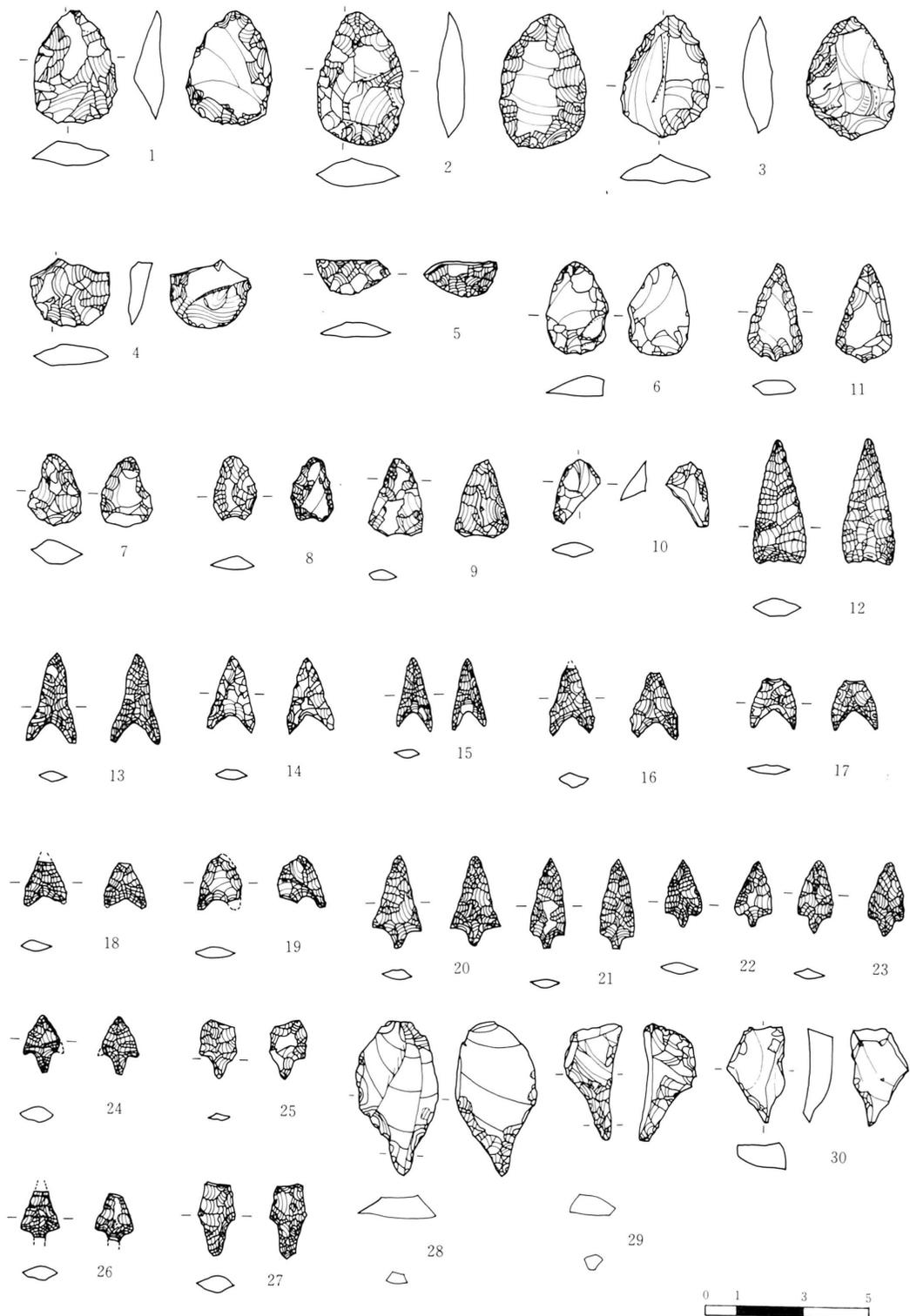
図版	地 区	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 材	産 地
124	B d 15	170	56	36.5	451.3		
125	B c 09	81	58.5	27	119.2	両輝石安山岩熔岩	岩手火山？

石 錘

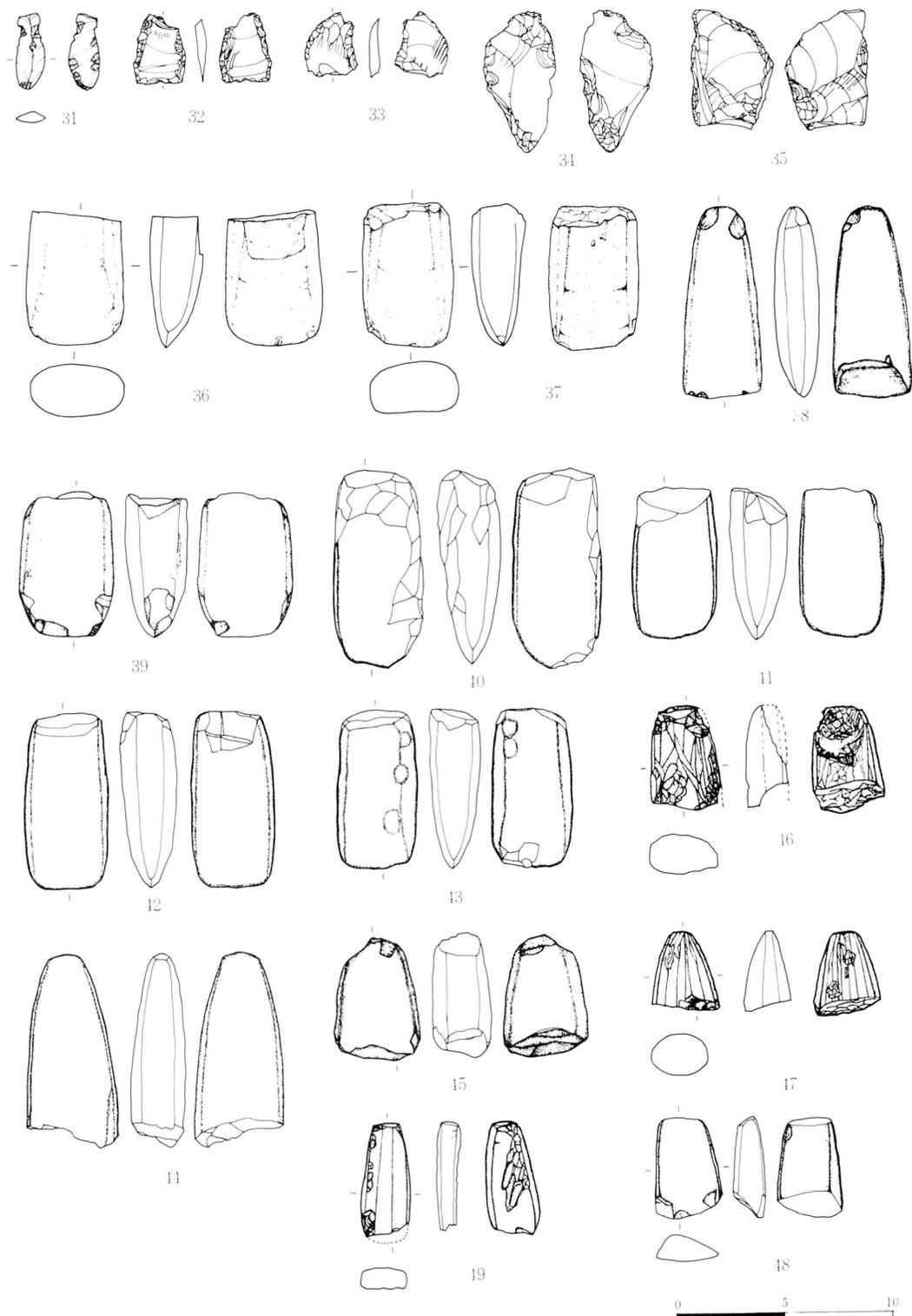
図版	地 区	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 材	産 地
126	A g 18	74.3	41.3	20.6	81.4	輝石安山岩	
127	A f 18	44.0	44.1	20.6	54.9		
128	B b 15	53.0	39.0	11.0	29.7		
129	A g 18	56.5	39.5	19.3	51.8		
130	C a 18	51.4	51.2	7.9	32.0	石質凝灰岩	
131	A b 18	44.2	47.2	14.6	30.7		
132	A i 18	47.8	40.5	10.5	25.0		
133	B h 6	37.2	41.4	12.5	23.3		

磨石

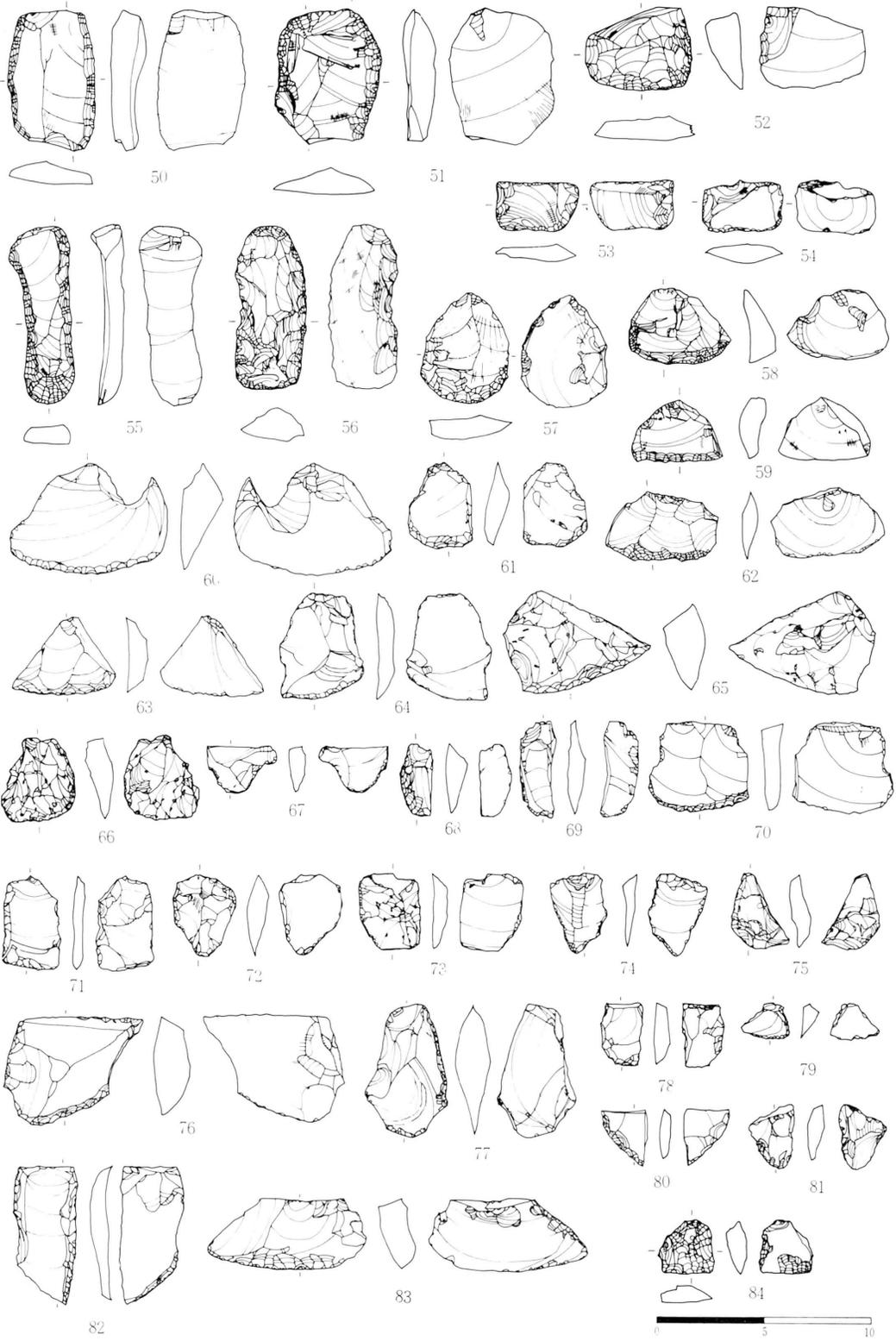
図版	地 区	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 材	産 地
134	A h 15	—	—	—	304	石英閃緑岩	北上山地
135	B f 18	—	—	—	1,070		
136	B a 6	121	90	59	1,280	安山岩	(第三紀)
137	B d 56	—	—	52.5	845		
138	B d 12	—	—	66.1	482.3		
139	B i 18	105	93.8	—	990		
140	B h 21	—	—	47.5	305.7	安山岩	(第三紀)



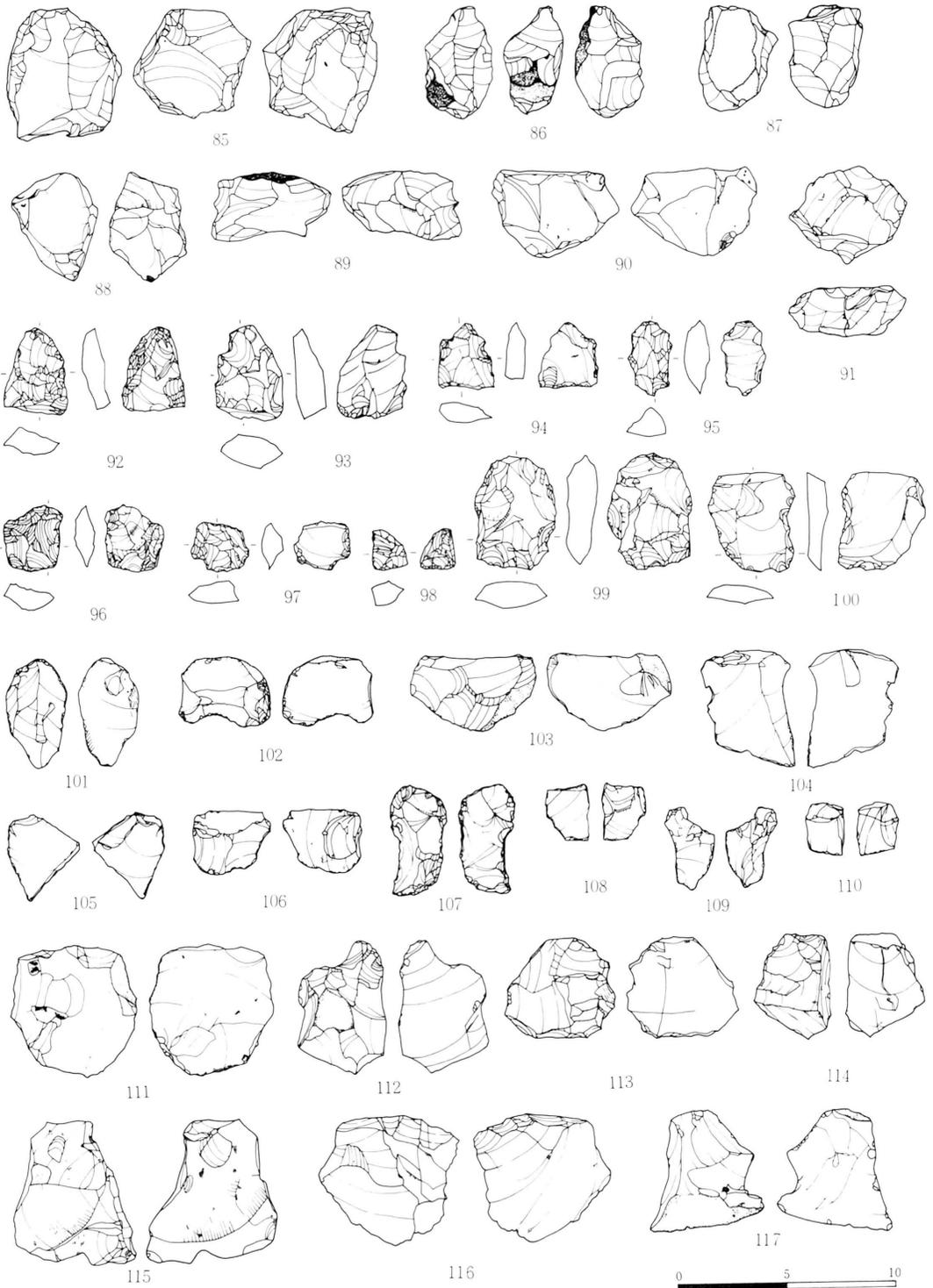
第56図 石鏃Ⅰ類1~5 Ⅱ類6~11 Ⅲ類12~19 Ⅳ類20~27 石錐28~30



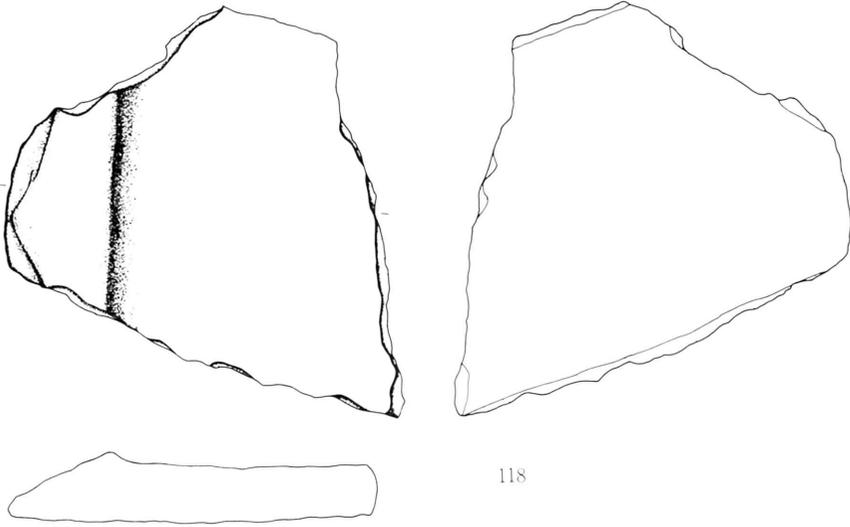
第57图 石匙 31~35 石斧 36~39



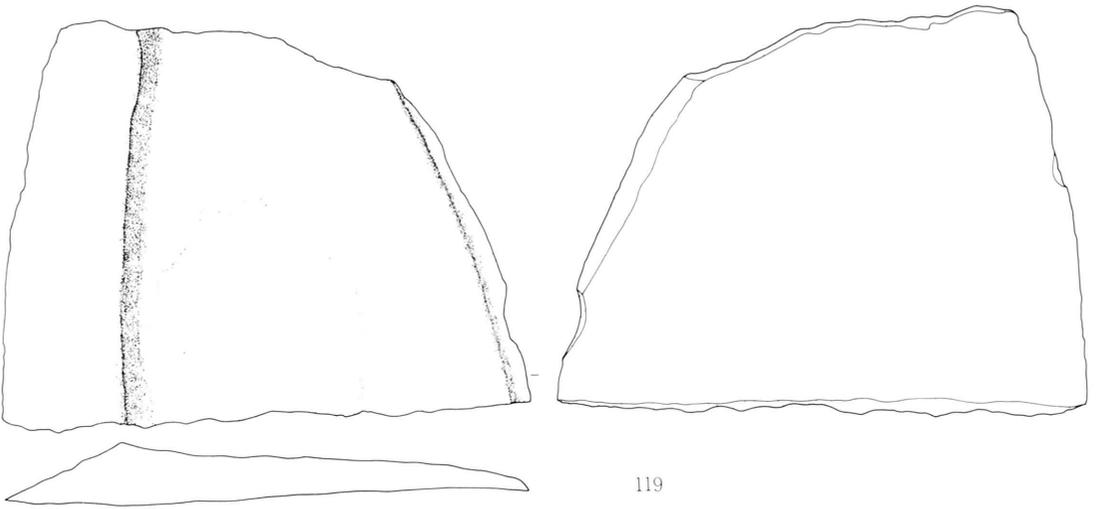
第58图 搔器 I類 50~54 II類 55·56 III類 57~59 IV類 60~83
V類 84



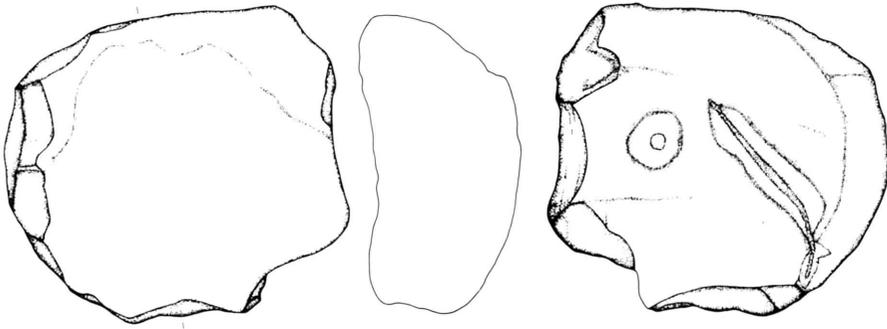
第59図 石核 85~91 石核石器 92~100 使用痕のある剥片 101~110
 剥片 111~117



118



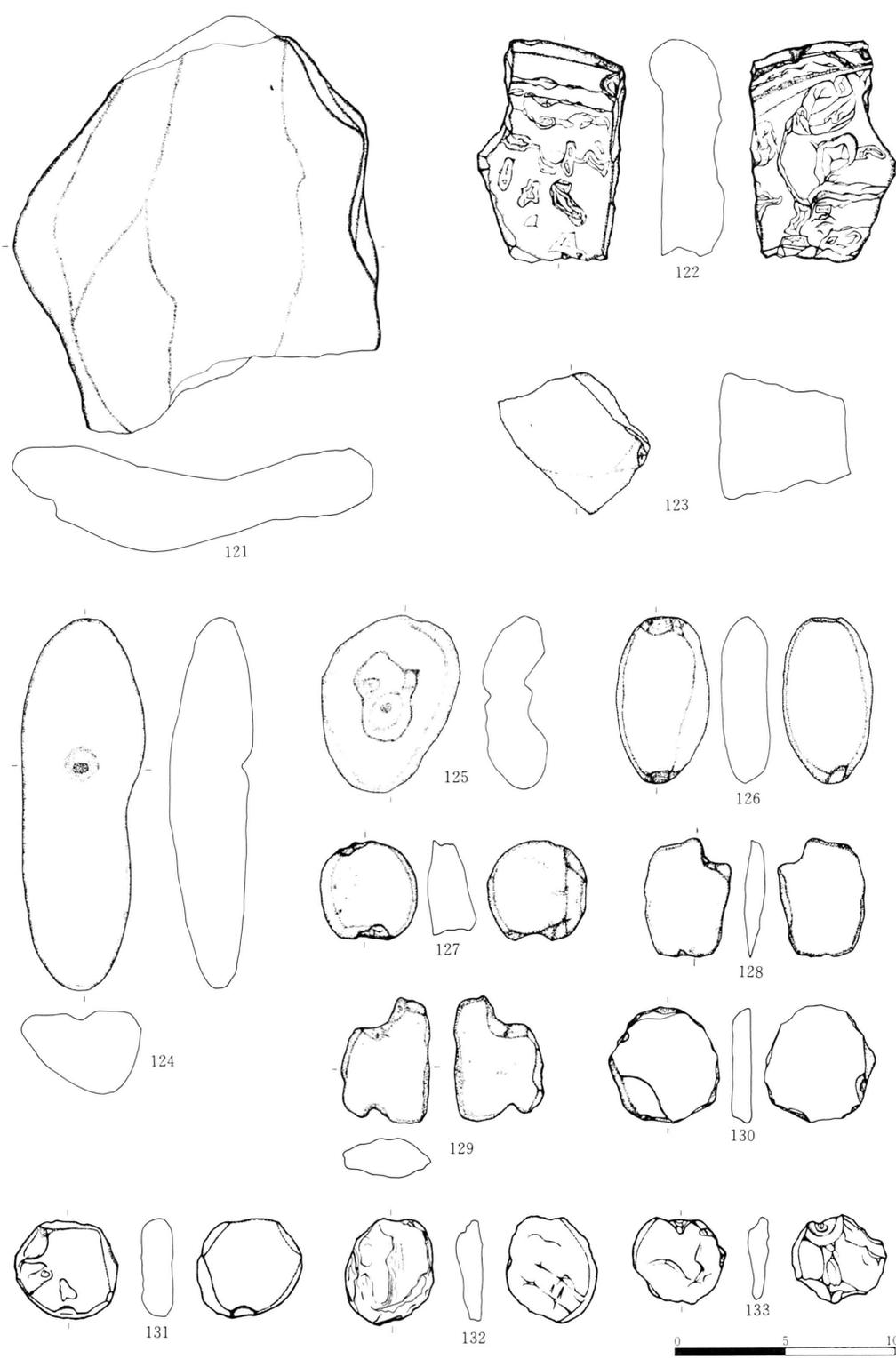
119



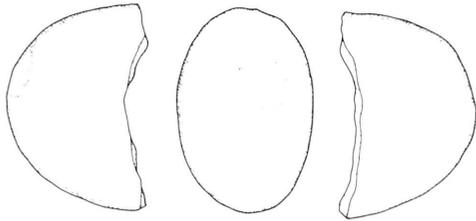
120



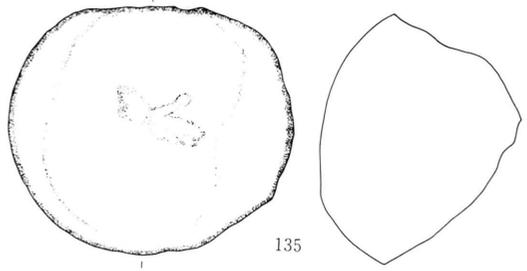
第60图 石皿



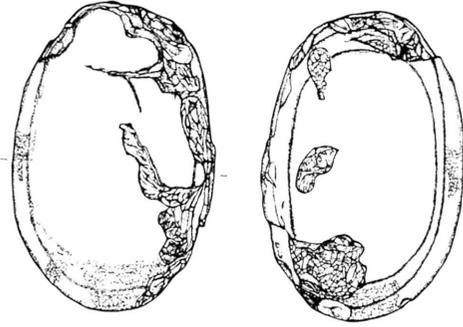
第61図 石皿121~123 凹石124・125 石錘126~133



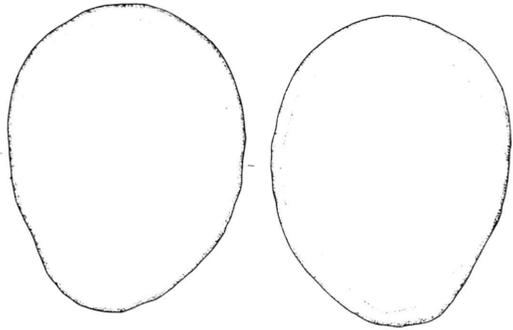
134



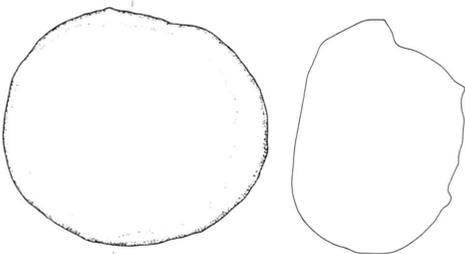
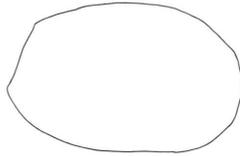
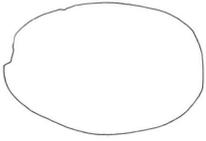
135



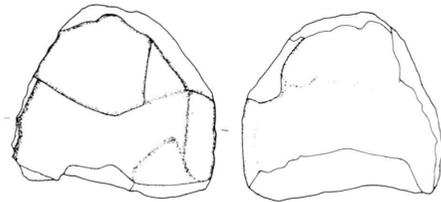
136



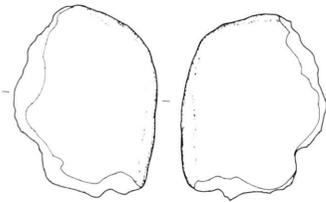
137



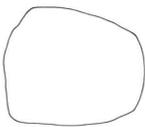
138



139



140



第62図 擦 石

IV 考察

1. 遺物包含層

「遺物包含層」には人工遺物を含む自然堆積層の意味と、斜面、凹地など集落の周辺に形成された堆積層で特定の地域をさす狭義の意味とがある。近年、廃棄を中心とした考え方が注目されてきており、「廃棄の場」として特定の地域に限定して用いられている。ここでは遺構に伴わない遺物が層を成しており、「遺物を含む層」という前者の意味で用いることにした。

(1) 遺構と遺物

遺構と遺物の関係は竪穴住居跡とその出土遺物のように伴出・共伴関係にある場合が一般的であり、住居跡の範囲内に入っている遺物は伴うものとして扱っている。しかし、遺構内にあるからと言って必ずしも共伴関係にあるとは限らない。たとえば、フラスコ状土壌に完形土器が入っていたとしても、それが埋土の中に含まれている場合は埋土の形成時に入ったことになり土壌に伴う遺物とはならない。また、竪穴住居跡の床面直上の遺物と埋土上層のものが接合した場合には、住居跡の伴出遺物が埋土にまぎれ込んだと考えるより、埋土遺物が床面に達したと見るのが自然であり、その遺物は住居跡に伴うとは言えなくなる。本来的伴出・共伴遺物は、その遺構内にあることはもちろん同時に存在し、また同時に使用されたものでなければならないと考える。二次作用を受けたものは遺構から分離されたことになり伴出遺物とは見られない。当遺跡では第63図に示した如く住居跡床面直上の遺物が遺構外のものと同様に接合しており、埋土遺物が床面に達したものと見られる。住居跡内遺物が即伴出遺物とはならない。

(2) 遺構と遺物包含層 1

竪穴住居跡に遺物が集中する場合でも住居跡に伴わないものがある。それは人為的行為による場合と自然作用による場合である。前者は吹上パターンに代表される廃棄行為による遺構と遺物の結びつきであり、後者は遺物包含層の遺構内流入堆積によるものである。まず廃棄について考えて見ることにする。

廃棄パターンを考える場合には出土遺物を層位ごとに把握されねばならないが、全点ポイント（出土地点）とレベル（標高）の記録を作成することによって補うことにした。当遺跡では削平された所もあり同じ条件ではないが、1グリット100点以上の11グリットが7棟の竪穴住居跡に関連しており、遺物数の多い地域が竪穴住居跡となる例が多い（第66図参照）。竪穴住居跡の確定は図上検討によるが、その確定をまって遺物との関係を調べると、床面直上に堆積しているものと、第一次堆積層の上に堆積しているものの両者の存在が明らかになった。このことは住居跡内廃棄を意味し、前者は井戸尻パターンに、後者は吹上パターンに該当すると見られる。

ところが、接合個体の出土地点を検討すると①遺物包含層の土器（住居跡範囲外の土器）接合するもの。②フラスコ状土壌の埋土土器と接合するもの。あるいは③他の堅穴住居跡の埋土土器と接合するもの。等々が確認され、廃棄以外の要素を設定しなけりばならなくなった。

出土遺物は末木建氏によると「①廃棄、②置き去り、③設置、④自然作用による散乱、の4形態」が考えられている。当遺跡では接合個体が広範囲にわたり、特定の地域に限定されないため、④の「自然作用による散乱」にあたるものと思われる。廃棄は人為的行為のあらわれであって、自然作用の及ばないもの、及んでも排除されたもので検討されなければならないものと考え、今回のものは自然作用そのもので人為的行為は確認されず、廃棄によるものではないと考える。卯遠坂遺跡の例はむしろ堅穴住居跡の埋没パターンとして把らえられ、自然作用によるものと理解される。

ここで当遺跡の遺構と遺物の関係をまとめておく。それは次のようになる。

- ・遺物の大多数が遺物包含層の遺物である。
- ・遺物の大多数は遺構に伴う共伴遺物ではない。
- ・遺物は堅穴住居跡などの遺構に人為的に廃棄されたものではない。
- ・遺物包含層の流入堆積という遺構内埋土関係と把握することができる。

(3) 遺構と遺物包含層 2

今回の調査で検出された遺構は堅穴住居跡と各種土壌であるが、遺物包含層を破壊して構築されたものはない。全て包含層に覆われており、包含層より古いものである。

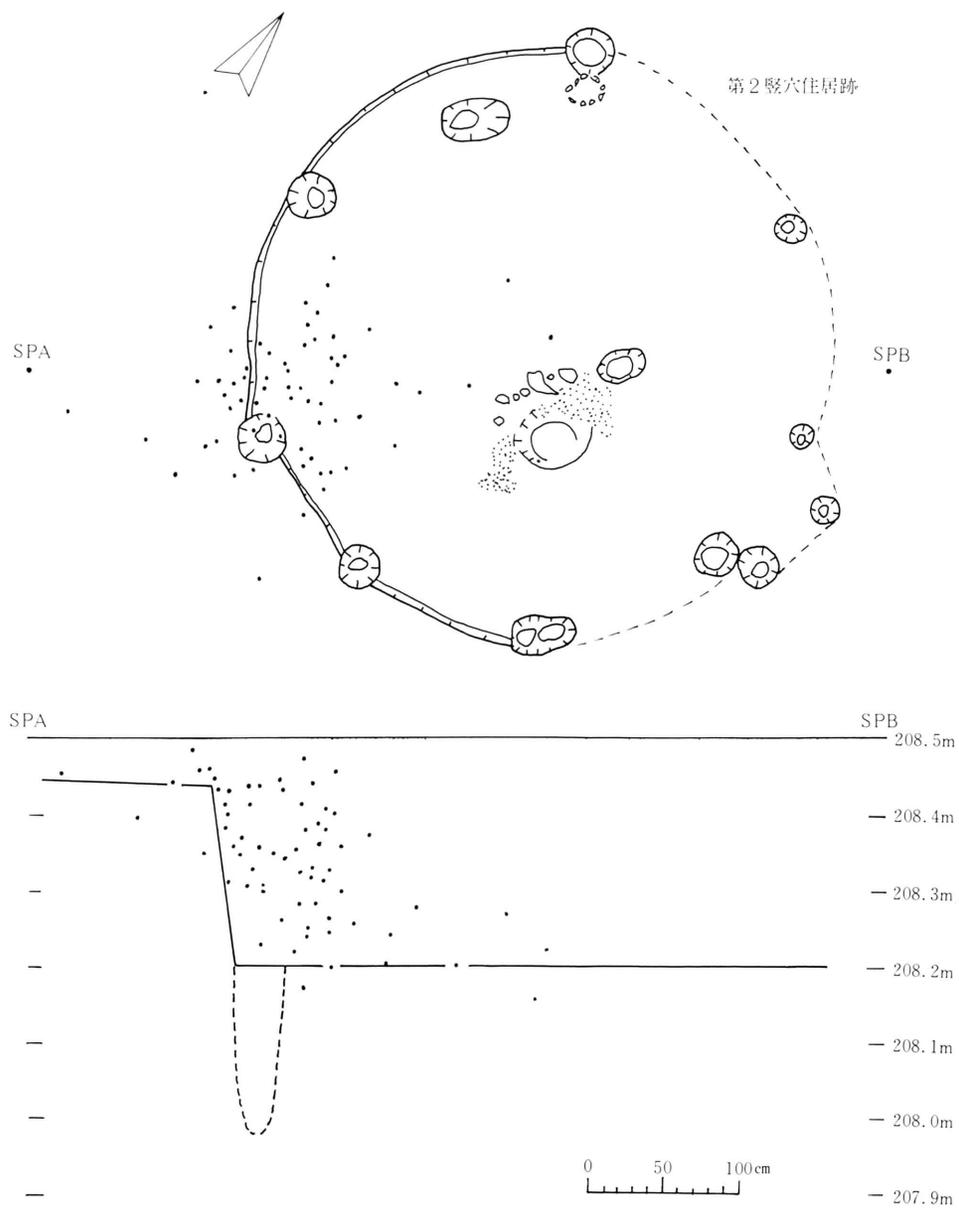
堅穴住居跡は遺物包含層との関連で把らえると2群に大別される。

1群……遺物包含層が直接堆積したもの。

2群……第一次堆積の上に遺物包含層が堆積したもの。である。

1群・2群の区別は西壁壁際の遺物の存否によって決定し、あるものを1群、ないものを2群とみなすことにした。遺物が検証された場合には極力包含層遺物と接合関係にあることを確認して決定した。それは共伴関係の確認された遺物以外を全て包含層遺物とみなすことにしたが、必ずしも遺物包含層の流入とは限らず、包含層遺物の中にも住居跡の遺物が含まれていると思われるからである。なお2群の堅穴住居跡は一次堆積層の状況から(2-1)壁際のみ認められるもの。(2-2)ほとんど埋没したもの。の両者が考えられる。(2-1)は埋没途上にあるもので放置されたことを示し、(2-2)は埋没が完了したもので完全廃棄を意味する。しかし、堆積状態は遺構が削平されて確認されず、(2-2)は検証されない。理論的には両者の存在が考えられるが、正確には識別できないのである。

1群の堅穴住居跡は床面に直接遺物包含層がのるもので、遺物包含層が埋土となっている。包含層が充満しているということは包含層の形成時に空洞になっていたことになり、埋没直前まで使用されていたことを示す。代表例が第2堅穴住居跡である。第63図に見られるように住居跡外の遺物が壁際から床面まで堆積しており、包含層遺物の流入堆積を意味している。



第63図 接合遺物分布図 (第35図2土器)

さらに、遺物は濃密に分布しており、その分布から住居跡範囲が推定できる。これは住居跡範囲がまわりより低くなっていたことを示すもので、空洞になっていたことを証明している。

これに対し2群の竪穴住居跡は第一次堆積層の上に遺物包含層がのるもので、包含層が上位堆積層となる。一次堆積層が認められるということはあらかじめ埋没が進行していたことになり、既に廃棄されたことを物語る。第10竪穴住居跡はこの例で住居跡東半に遺物が多く分布し、住居跡範囲と遺物の分布が一致しない。これは西半に第一次堆積層が存在することを示し、東半に遺物包含層が堆積したことを意味する。既に第一次堆積層が形成されていたことを証明しているものである。

土壌は形態からフラスコ状土壌・袋状土壌・溝状土壌に分類されるが、袋状土壌は規模が小さく遺物包含層との関係ではとらえられない。フラスコ状土壌は次のように分けられる。①埋土が遺物包含層のみで充填されるもの。②下半が自然堆積層で上半が遺物包含層の両層をもつもの。③自然堆積層のみのものである。①②は遺物包含層が流入堆積しており包含層形成時には空洞であったことを意味し、埋没直前まで使用(①)、あるいは放置(②)されていたことを示唆する。③は自然堆積層が堆積しており、遺物包含層の流入する余地のなかったことを示し、既に埋没していたと認識される。第3フラスコ状土壌が前者の②の例で、まず遺物が中頃まで認められ第64図で明らかなように土壌外のものとの接合し、遺物包含層の流入堆積であることを証明している。反面、開口部が大きく開き下半に自然堆積層が認められるので放置が予想される。

第7フラスコ状土壌が後者の例である。埋土は流入と崩落の結果形成された自然堆積で、遺物は全く検出されない。このことは遺物包含層の形成段階には既に埋没していたことを示し、廃棄されたことを証明している。

溝状土壌は全て自然堆積土で充滿されており、包含層形成以前に埋没していたと理解される。

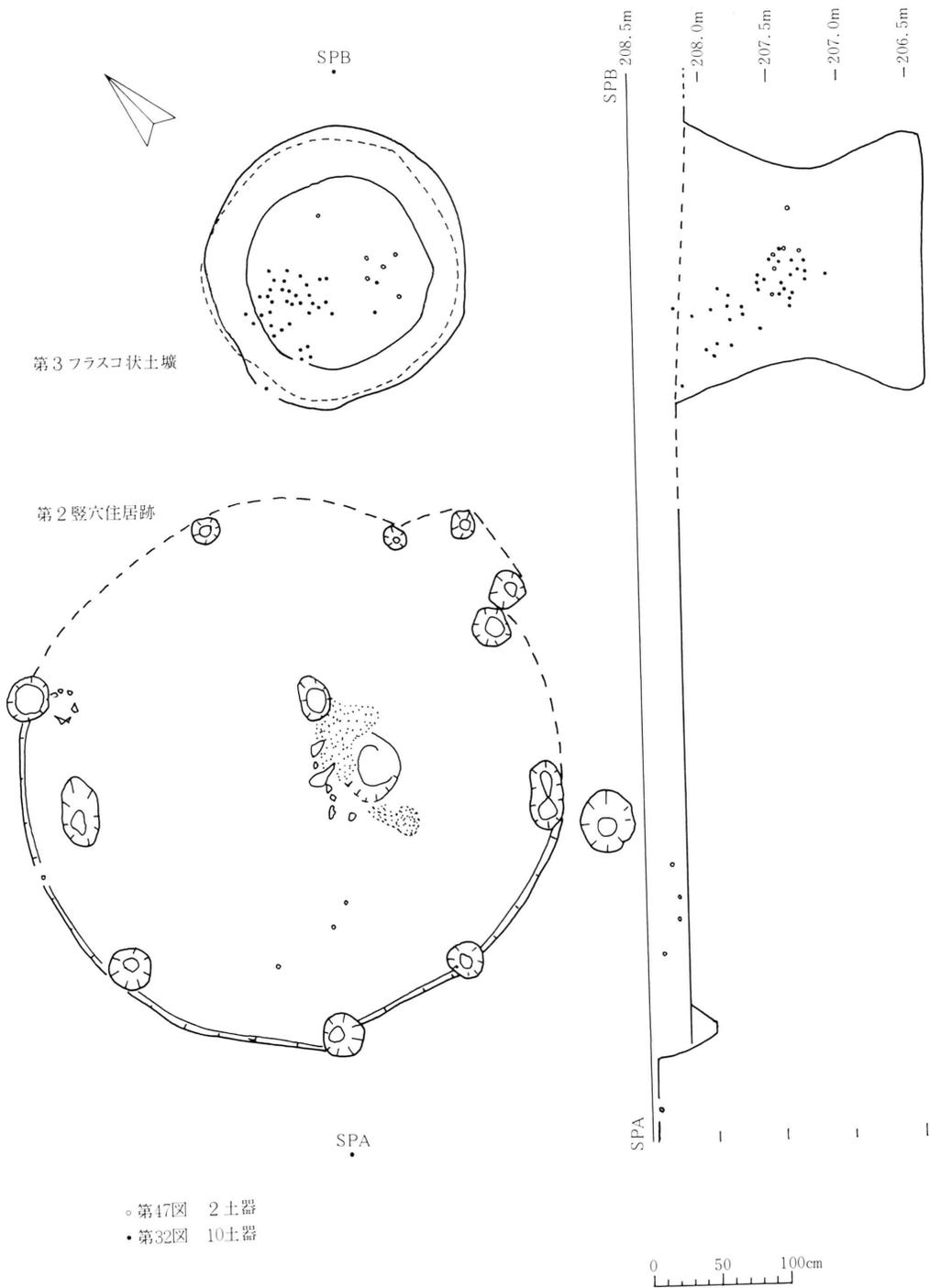
すなわち、当卯遠坂遺跡の遺構と遺物包含層の関係は、遺物包含層が流入堆積したものと、既に第一次堆積層が堆積し、包含層が被覆堆積したものとがある。換言すると、遺物包含層の形成時に、現に使用されていたものと、既に廃棄されていたものが存在したことになる。

4 遺物包含層の形成過程

遺物包含層を構成している遺物は、①破片が磨滅していない。②接合するものが多い。③竪穴住居跡に伴う遺物と区別できない。などにより、他の遺跡から流入堆積したものではないと言える。また次のことから竪穴住居跡の遺物が包含層の構成遺物になっていると推測される。

①竪穴住居跡の遺物と包含層の遺物が識別できない。

②接合して復原可能となるものが少なくない。



第64図 接合遺物分布図

③ 竪穴住居跡に流入堆積しているが、一方流出しているものが認められる。

比較的よく保存されている第2 竪穴住居跡は出土遺物数が633点である。この中には完形土器と7 個体の復原可能土器が含まれている。このうち共伴関係の明らかなものは埋設土器と土壙内土器だけで、他は遺物包含層遺物と分離できなく両者の混在を意味している。復原可能となるものは、卯遠坂遺跡全体では、20個体にのぼり、それらは広範囲にわたっている。第2 住居跡の第33図4・5、第35図2の3例は西方の遺物と接合し、流入堆積したことを示唆している。第33図1は第9 竪穴住居跡の埋土遺物と接合し（第69図）、第2 住居跡では口縁部を中心とした大破片で床面直上にあり、第9 住居跡では底部が中心で小破片が多く若干浮いた状態で発見された。このことは第2 住居跡から流出し、第9 住居跡に流入堆積したことを意味している。以上のことから遺物包含層を構成しているものは竪穴住居跡の遺物と考えられる。

第3 フラスコ状土壙は開口部が大きく開く鼓状を呈し、下半が自然堆積土で上半が遺物包含層である。この遺物包含層には復原可能土器が3 個体含まれ、そのうちの第47図2は包含層の下位・中位・上位の全ての層（細分された層）から出土し（第64図）、包含層には下半で見られた崩落土は認められない。接合個体が厚さ約1 mにわたって堆積しているのに崩落土が認められないということは、崩落の形成されえない短い期間に堆積したと考えられる。このことから遺物包含層の形成は短期間に行なわれたと見られる。

復原可能土器の中には第2 住居跡と第9 住居跡、第2 住居跡と第3 フラスコ状土壙、第7 住居跡と第4 フラスコ状土壙の埋土遺物が接合するものがある。また、実測可能とはならないが、遺構間で接合するものは7 例、各種遺構の埋土遺物と包含層遺物の接合ものは約40例とさらに多くなる。中には50 m離れたものが接合しているものもあり、遺物包含層は広範囲にわたっていると考えられ、また同時に形成されたと推測される。

遺物包含層の除去により遺構が検出されるのであるが、壁の確認されたものは西壁と北壁で高さが15cm未満であり、南壁・東壁は確認されないものが多い。中には壁高30cmを記録するものがあり、本来はもっと高かったと推測される。15cm未満と低いのは遺物包含層による削平と考えられ、検出されない東壁・南壁はそれによって破壊されたと推察される。また炉跡の中には炉縁石のなくなっているものがみられ、工事中の破壊ばかりとは限らないようである。さらに調査地には角礫・亜角礫が散在しており、包含層の形成段階に持ちこまれたものと思われる。このことから、遺物包含層の形成過程は竪穴住居跡を全体的に削平し、斜面側の壁を破壊しながら住居跡内の遺物を散乱し、遺跡全体を覆う包含層を形成したと理解される。

遺物包含層の成因には前述の如く①人為的行為によるもの。②自然作用によるもの。が考えられる。後者は遺物が自然作用によって散乱し、あるいは二次堆積したものである。当遺跡の場合は遺物が層をなしており単なる散乱ではなく、二次堆積と推察される。二次堆積の形成に

は流水が考えられるが、遺跡全体に、短期間で、しかも同時に形成されたとみられ、普通の流水ではないと想像される。

卯遠坂遺跡は諸葛川から約11 mの高さにある。諸葛川は岩手山の東麓、春子谷地に端を発し所々の小河川を合流して遺跡の西方約750 mから狭谷に流入する。流れは谷の中を南流し遺跡ののる丘陵に突きあたり北に向きを変え、さらに東流して開析谷にはいる。丘陵にあたる部分は北に向って谷が形成されておりその東側の台地は北に突き出している。それは流路を北に向ける原因となっている。そのため流水は狭い谷の中で一端北に向きを変えて東流する形となり増水時には直進が考えられ、卯遠坂遺跡の冠水が予想される。

2. フラスコ状土壙

今回の調査で発見されたフラスコ状土壙は9例である。

〔形状〕 形状は平面が円形か楕円形で、断面が底部の平坦なフラスコ状を呈し開口部が開く。開く度合によって次のように分けられる。

A類 開口部が大きく開くもの（1、3、7）

B類 開口部があまり開かないもの（2、4、5、6、8）

B類はさらに底部と最狭部の差の大小により2分される。

B-1類 差が大きくフラスコ型のもの（2、5）

B-2類 差があまりなく円筒形に近いもの（4、6）

A類は最狭部が中頃にあり開口部が大きく開くもので、底部より開口部が大きい。B類は最狭部が開口部近くにあり、B-1類はいわゆるフラスコ型をなすもので、B-2類は頸部を形成し開き気味の開口部へ続くもので、円筒形に近いフラスコ型である。

〔規模〕 大きさは一覧表の如くまちまちであるが次のように分けられる。

I群 大型のもの（1、2、3、4）

II群 小型のもの（5、6、7、8、9）

I群は開口部・最狭部・底部がそれぞれ100cmを越えるもので、深さ160cm以上のものであ

第 74 表 フラスコ状土壙 一覧表

	開口部	狭部	底部	深さ	備考
第1 フラスコ状土壙	228 × 222	116 × 135	158 × 164	197	土器 35
第2 フラスコ状土壙	107 × 115	90 × 100	171 × 181	217	土器 8
第3 フラスコ状土壙	188 × 194	136 × 138	180 × 184	34	石器 8 土器 72
第4 フラスコ状土壙	140 × 140	100 × 104	114 × 113	161	土製品 4、石器 6 土器 42
第5 フラスコ状土壙	86 × 65	63 × 55	138 × 114	105	石器 1
第6 フラスコ状土壙	100 × 108	72 × 77	98 × 73	100	石器 1 土器 7
第7 フラスコ状土壙	82 × 84	78 × 80	60 × 54	60	
第8 フラスコ状土壙	82 × 80	78 × 74	108 × 108	68	土器 7
第9 フラスコ状土壙	88 × 90		87 × 99	28	土器 6

る。Ⅱ群はいずれも100cmを越えず、深さも100cm以下のものである。

〔埋土〕 埋土は遺物包含層と自然堆積層に大別される。前者は壁の崩落による褐色・黄褐色火山灰土と、流入による黒色・黒褐色・暗褐色の汚れ火山灰土であり、後者は暗褐色・黒褐色混土の遺物包含層の流入堆積土である。いずれも自然堆積層で人為的堆積は認められない。堆積土により3つに分類される。

〔出土遺物〕 遺物は堆積層全体から出土し、中には土壌外のものと同接するものがある（1、2、3、4）。また、遺物はほとんどが破片で完形品はなく、土壌床面から出土した復原可能土器もない。このことから出土遺物はすべて遺物包含層の遺物で土壌に伴うものは無いと考えられる。また、人為的に持ち込まれたものも無いと判断される。

〔遺物包含層との関係〕 当遺跡の検出遺構は遺物包含層に覆われており、フラスコ状土壌も例外ではない。遺物包含層との関係からⅠ群 遺物包含層によって埋没したもの。Ⅱ群 上半が遺物包含層によって埋没したもの。Ⅲ群 包含層形成以前に埋没したもの。に分類される。これは遺物包含層の形成段階の状況によって次のように言換えられる。

Ⅰ群 全て空洞になっていたもの（2、4、6、8、9）

Ⅱ群 下半が埋没し上半が空洞になっていたもの（1、3）

Ⅲ群 全て埋没していたもの（5、7）

この分類は遺物包含層の形成時の堆積状況を示すものであり、時間差が表わされていると言える。次のように読み取ることができる。Ⅰ群は埋没直前まで使用されていたもので、Ⅱ群は放置されて半分埋まったもの。Ⅲ群は放置期間が長く既に埋まってしまったものである。

〔竪穴住居跡との関係〕 竪穴住居跡と重複関係にあるものは3例である。直接前後関係を把握されたものはないが遺物包含層を媒介として思考すれば把握することができる。それは検出遺構に遺物包含層が堆積していたかどうかによるもので、例えば遺構に遺物が入っている場合は包含層の形成直前まで使用されていたと考えられるから新しいものと見られ、遺物が全く入っていない場合には包含層の形成までに埋没していたと考えられることから古いものと見られる。

第1フラスコ状土壌は第1竪穴住居跡の中にあり、完全に複合している。土壌には35点の遺物が入っており、住居跡の埋土にも含まれている。土壌の遺物の中には包含層の遺物と接合するものがあり、土壌が新しいと考えられる。第5フラスコ状土壌は第9竪穴住居跡の北西部で一部重複している。土壌には遺物が含まれなく、遺物包含層の形成段階で既に埋没していたと考えられる。一方、住居跡は包含層によって埋没しており住居跡が新しい。第8フラスコ状土壌は第13竪穴住居跡の西部で一部重複している。土壌には遺物が入っており遺物包含層によって埋没されたと考えられる。住居跡の方は壁際に無遺物層が形成されており、既に廃棄され埋没途

上にあったことになる。よって、第8 フラスコ状土壙が新しい。以上のことを図に示すと

第1 住居跡 ^{新しい} → 第1 フラスコ状土壙
第9 住居跡 ← 第5 フラスコ状土壙
第13住居跡 → 第8 フラスコ状土壙

となる。

接合個体による同時存在が考えられるものは第3・第4 フラスコ状土壙である。第3 フラスコ状土壙の9例が第2 竪穴住居跡の埋土遺物と接合する。第4 フラスコ状土壙の23例は第7 竪穴住居跡の埋土遺物と接合する。遺物が接合するということは遺物包含層が入っていたことになり、どちらも空洞であったことになる。同時に空洞であったならば同時に存在したことになり、両者は互いに伴うものと見て誤りなからう。土壙は住居跡に関連ある施設ということになる。すなわち、住居跡と土壙とは隣接して同時に存在し集落を構成する1要素と捕えることができる。フラスコ状土壙のみが単独で発見された例があるが、当遺跡ではあるものは竪穴住居跡よりも新しく、あるものは古い。また遺物が接合することによって同時に存在し供伴することが証明された。個々の遺構について供伴するとは断言できないが、伴う可能性が大であることを付け加えておく。

まとめ

当遺跡の遺構は遺物包含層に覆われており一部遺構内に流入堆積している。流入している包含層を取り除くと埋没直前の姿があらわれる。それは使用・放置・廃棄を意味しており、3群に分類される。

第1 群土壙 埋没直前まで使用していたもの

第2 群土壙 放置されて半分埋まっていたもの

第3 群土壙 廃棄され放置期間が長く既に埋まってしまったもの

第1 群土壙は第2・第4・第6・第8・第9 フラスコ状土壙の5例で、大型のものと小型のものが見られる。出土遺物はあまり多くなく最狭部が開口部近くにある。土壙内には遺物包含層が充填されており、包含層形成時には空洞で現に使用されていたものと考えられる。

第Ⅱ群土壙は最狭部が中頃にあり開口部が大きく開く大型のものである。第1・第3 フラスコ状土壙の2例が検出され、遺物が多く含まれている。下半に自然堆積層が認められ、その上を遺物包含層が覆っている。包含層の形成時には半分埋没しており放置されていたことを物語るものであり、開口部が大きく開いているのも放置期間における崩落の結果と理解される。

第Ⅲ群土壙は第5・第7 フラスコ状土壙の2例でいずれも小型のものである。形状はフラスコ状を呈すものと開口部が大きく開くものがある。土壙内は遺物を含まない自然堆積層で充満しており、遺物包含層のはいる余地がなかったものと解される。既に廃棄され放置期間が長

く、埋没していたと考えられる。

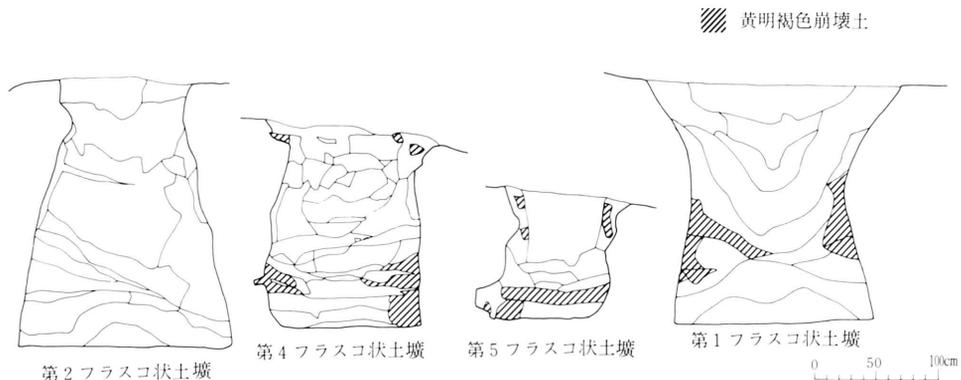
崩壊過程について

当遺跡で検出されたフラスコ状土壙は9例にすぎないが、崩壊過程を示す好資料に恵まれたのでそれを紹介する。

第65図の1は土壙内に遺物包含層が堆積しているもので、埋没直前まで使用されていたと考えられる。これには開口部の崩落が見られず崩落堆積土も認められない。ほぼ使用当時の原形をとどめていると見られる。第65図の2・3はほとんどが遺物包含層の堆積で下層に若干崩壊土が見られる。開口部は崩壊し始め崩落状況を示すものである。前者の西方はクラックが入ったにすぎず現位置を保っている状況であり、後者の東側はこれが進みブロック状に剝離し、遺物包含層が堆積しており現位置に近い所にとどまっている。前者の東側の2ブロックは移動しはじめ落下状態にある。西側の2ブロックも落下状態にあるがまさに落下しようとしている。開口部はブロック状に崩壊しズリ落ちによって形成されたと思われる。第1図の4は中ごろに崩落土が堆積し開口部が大きく開いている。崩壊がかなり進み末期段階のものと考えられる。前者は壁あるいは開口部が落下して堆積し、開口部が変化しはじめる状況のものである。後者は崩壊がさらに進行し大きく開きつゝある。ここでは同時に下半の崩壊も見られる。

土壙の崩壊過程は原形を保つ開口部の狭いものから開口部がブロック状に崩壊して落下堆積し、大きく開いて行く段階をたどるものである。

以上、個々の土壙の観察を行ない崩壊過程の段階を追ってきたが、このように見てくると開口部の変化は崩壊段階の違いであることが理解される。形状の上でA、Bの2類に分類したが、



第65図 フラスコ状土壙崩壊過程図

これは崩壊段階の違いによる分類で本来の形状の違いによる分類ではないことになる。

使用後の処理

第2群土壙は下半に自然堆積が認められ、その上を遺物包含層が覆っている。包含層の形成時には下半の自然堆積層が堆積していた。この自然堆積層は壁あるいは開口部の崩落土と流入による汚れ火山灰土からなっている。崩落土と汚れ火山灰土が互層に堆積しており時間経過が読み取れる。一方開口部は大きく開いており崩壊の末期段階を示している。包含層のように短期間に埋没したものならば崩壊することもないがこれは期間が長いためであろう。自然堆積層が形成され開口部が開いていることは廃棄され放置されたことを示す。使用目的の達せられた土壙は人為的に埋めもどされることなく自然埋没にゆだねられていたことになる。当遺跡のフラスコ状土壙は放置という廃棄行為を受けたことになる。

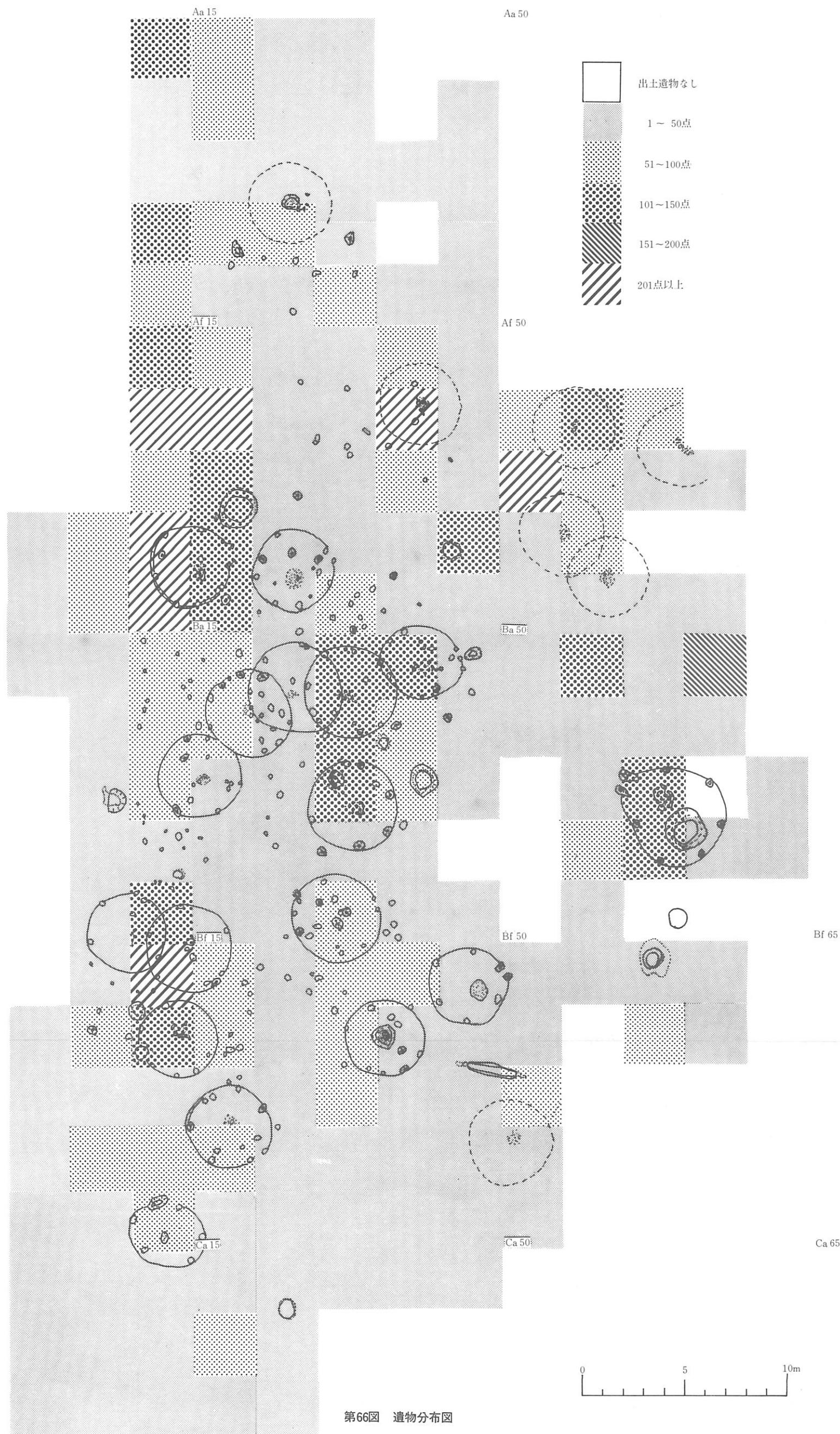
用途と使用方法

フラスコ状土壙は貯蔵穴・墓壙・冬期住居跡・落し穴等が考えられている。卯遠坂遺跡で発見された土壙をまとめると

- ① 堅穴住居跡の近くにあって住居跡と同時に使用されている。
- ② 空洞のまま使用されている。
- ③ 壁面に小さな穴が穿たれているものがある。

である。壁面の小さな穴は裏張りをとめた穴と考えられるものであり、これにより貯蔵穴と考えられる。この種の土壙は近年多数発見されており、猫谷地遺跡では中央に柱穴をもつものがある。また、土壙床面から1個ないし2個の深鉢形土器が発見されたものがあり容器を用いて貯蔵したと見られる。鳩岡崎遺跡では床面近くの壁からシソの実が検出され、発芽し観察された。

滝沢村清水沢遺跡では空洞のまま発見され蓋状施設が予想されたが既に破壊されており確認するまでには至らなかった。当遺跡では遺物包含層が充満されており容易に流入できたと考えられるので開口したままで使用したのではないかと考えられる。あるいは、あったとしても簡単な施設であったと推測される。



第66図 遺物分布図

3. 竪穴住居跡

今回の発掘調査で発見、確認された竪穴住居跡は17棟である。住居跡の中には同地点での建て替え（重複）のものも観察され、それを含むと21棟となるが、炉跡を伴わないものは全て1棟として数えた。

〔検出状況〕 当遺跡は工事中に発見されたもので既に削平されていた。遺構検出面がⅡc層と色別困難な上に住居跡床面はⅢ層には達していない。焼土・炉跡が浮いた状態で発見されるが基本的には住居跡に伴うものと仮定して壁、床面の検出に努めた。Ⅱc層はⅡa・Ⅱb層と同質の暗褐色土で壁の確認が困難であり、柱穴の検証も思うにまかせず、範囲を確定するまでには至らなかった。そこで遺構検出面を全面除去して柱穴の確認を行なった。その結果多くのピットが検出された。が、住居跡範囲は以前として把握できなかった。

〔確定理由〕 以上のような検出状況であり竪穴住居跡の範囲が調査時点で確定されたものは数例にすぎない。そこで保存状態の比較的良好な第2竪穴住居跡を指標として、出土遺物の水平・垂直分布・断面図の推定壁・切り合い等を考慮しながら炉跡と柱穴の配置によって推定確認した。なお個々の施設、柱穴、入口等は図上検討によって、壁・床面等は出土遺物の水平垂直分布によって、切り合い関係は両者の比較検討によって確定した。

〔分布状況〕 第66図の遺物分布図を見ると竪穴住居跡が二次調査地域に集中するように見えるが、この地域の焼土・炉跡が竪穴住居跡として確認されたためである。一次調査地域でも焼土・炉跡が多数発見されており住居跡として確認されると二次調査地域と同様の分布を示す。住居跡は傾斜がきつくなると認められなくなり、台地平坦部に占地している。平坦部は調査地と同様半円状を呈しており、その分布も半円状を示す。ただ東側は諸葛川によって浸食され断崖を成しているが、崖際で焼土が検出されており、本来はもっと東方に広がっていたものと推測される。

〔平面形〕 平面プランは円形を基調とし、ほとんどが正円に近い円形である。楕円形が1例（第15住）小判形が1例（第17住）卵形が1例（第1住）で方形のものはない。

〔規模〕 若干のバラつきが見られるが直径400cm前後が多い。最大は第1住居跡の575×485cmで、最小が第17住居跡の380×310cmである。いずれも柱穴外側間の距離である。

〔埋土〕 埋土の観察されたものは第2・第10・第11住居跡の3例にすぎない。壁の確認されたものは前述した如く第2住居跡のみであり、他は断面図の検討の結果壁が想定され埋土と判明したものである。それによると暗褐色土の単層と見られ、短期間に埋没したと推測される。遺物を含むものが多く遺物包含層の流入と考えられるが、必ずしも包含層のみではない。中には暗褐色土でも黒色が強く遺物を含まないものもあり、第一次堆積層が形成されていたと思われる。

〔炉跡〕 住居跡と確定されなかった焼土を除き、竪穴住居跡に伴う17例と炉跡と見られ

る2例の19例について分析考察する。まず炉の構造について検討すると次の3つに分類される。

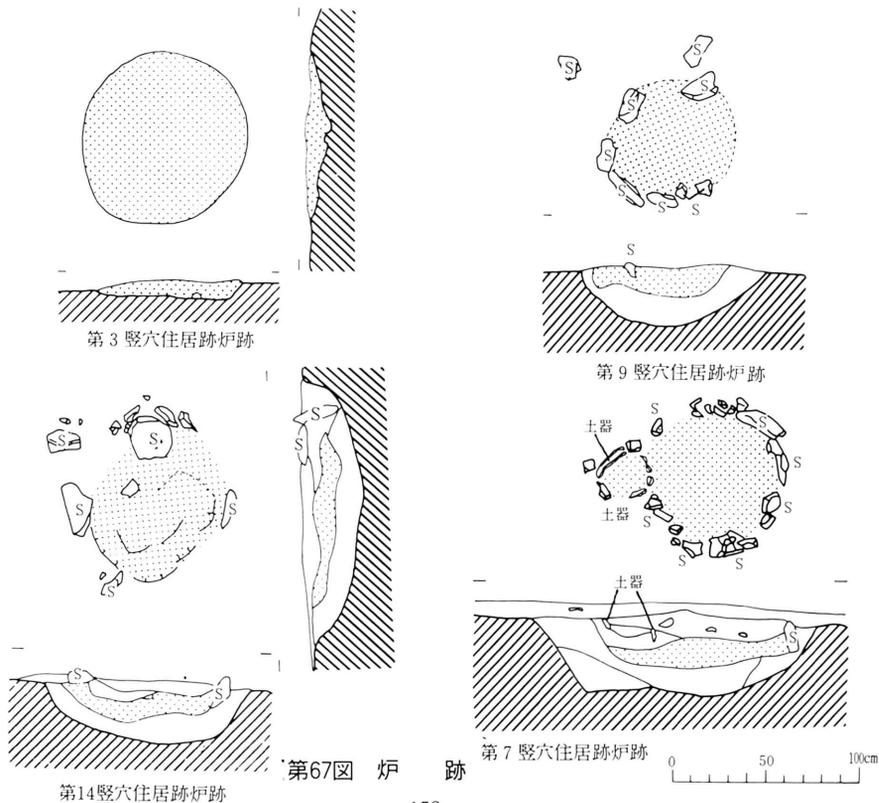
A類 地床炉……9例（3、5、10、11、12、13、15、17炉、炉跡1）

B類 石囲い炉……7例（1、2、4、8、9、14、16炉）

C類 複合炉……3例（6、7炉、炉跡2）

A類は焼土のみのもので地床炉と考えられる。窪み等は認められなく、焼面が円形あるいは不正楕円形に広がるものである。焼土には固く密なものとはボソボソした粗なものがある。第10住居跡の炉跡は炭化物が多く焼土の非常に少ないもので後者に属すると考えられる。この種の炉跡には焼土下に掘り込みをもつものと、もたないものがある。

B類は円形に石を配した石囲い炉で、内側あるいはその下に焼土が厚く堆積している。焼土下には明らかに掘り込みをもつ。炉縁石が完全な形で残っているものは少なくほとんど破壊されている。比較的原形をとどめているものは第9住居跡で、炉縁石が直径70cmの円形に9個配されている。大半はすき間なく並べられたと思われるが、第14住居跡のように点在するものもある。炉縁石は15～25cmの扁平な川石を利用し、側縁を上にして設置しており、内側に傾斜させているようである（第7住・第16住）。中には斜面低位に傾斜しているものもある（第14住）。また炉縁石が焼土に接しているが、一部埋没しているものもあり、またその上に乗っているものもある（炉1・炉2）。火熱を受けて赤色変化しているもの（第4住）、割れているもの（第1



第67図 炉 跡

住)等がある。抜き取り穴の確認されたものは第8住居跡の1例のみである。

C類は石囲い炉と埋設土器炉からなる複合炉である。全て焼土下に掘り込みを有し、焼土が厚く密になっている。完全に近い形で残るものが多いが、土器は散乱している。石囲い炉はB類のものと大差ないが、第7住居跡の炉縁石は2重・3重にめぐっており特筆に値する。石囲い炉と埋設土器炉とはダルマ形に接合し、両者で100cmを計測する。方向は西・南・東と一定しない。土器には甕形土器を用い、倒立状態に設置する。全て口縁部から肩部まで(約20cm)のもので、1個体そのまま埋設したものはない。土器の設置の時期には2種類あるようである。炉縁石と同時に設置されたものと、その後敷設されたものである。前者は炉縁石・土器が焼土と接し、焼土が別々に形成されたもので同時に設置されたと考えられる(炉跡2)。後者は焼土が削られ、土器と焼土の間に暗褐色土が入っているもので土器が後から敷設されたと推測される(第6・7住)。

炉跡の位置は南東に寄る第13住居跡を除く16例が住居跡のほぼ中央にあたる。A類の焼土は床面と同じ高さのものが多く、B・C類は床面下にあるものが多い。炉縁石は床面下に埋設されるものが大多数を占めるが、上端は床面に出ている。中には焼土の上に乗るものもある。C類の土器は全て床面下に設置されている。

焼土下の掘り込みはほとんどの炉跡で認められる。A類は掘り込みをもたないものもあり、15~20cmと比較的浅く、B・C類は30~35cmと深くなる。埋土は暗褐色土で、B・C類が焼土・炭化物を含み、A類では深さ50cmに達する第15住居跡を除き含まない。すなわち地床炉には掘り込みをもたないものがあり、あっても比較的浅く埋土に焼土・炭化物を含まない。これは新構築されたと考えられ、石囲い炉・複合炉は大きな掘り込みをもち、中に焼土粒を含み造り替えが考えられる。

〔柱穴〕 炉跡と同時に検出されたものは少なく、ほとんどが遺構検出面を除去した段階で発見されたものである。炉跡に伴う柱穴は、まず第2住居跡の柱穴配置を指標として①炉跡を中心にして半径200cmの円形あるいはそれに近い形に並ぶもの。②形状・深さの共通するもの。③全体的配置で規則性のあるもの。を選択・抽出した。柱穴間が250cm以上離れる場合には中間にあったものと考え、2・3個補わなければならないものは床面以下の遺物出土地点を考慮しながら推測した。また住居跡中央にあって他のピットより深いものを抽出して主柱とした。

中央の主柱の確認されたものは6例で、4例はほぼ中央に位置する。2例が若干壁に寄っている。炉跡の約50cm北側にあるものが多く(3例)入口の近くにあたるようである。(2・7・12住)柱穴は25×25cmと小さいが深さは50~65cmと深い。この外に住居跡の確認されないもので主柱をもつと考えられるものが2例ある(4-B・8-B)。壁際の柱穴は7・8個が多く、

第2住居跡の例では柱穴が壁に接するか、壁外に突き出している。25～35cmの円形プランが多いが、中には40×45cm（4住）60×55cm（8住）と特に大きいものもあり、他の施設の複合が考えられる。深さは住居跡ごとに異なるが20～55cmで30cm前後が多い。柱穴間の距離は180～220cmが多いようである。この外に柱穴様のピットが多数発見されたが性格は不明である。

〔入口〕 今回入口の確認されたものは17棟のうち12例である。検出の不備もあり完全に把握されたとは言えないが、次の2類に分けられる。

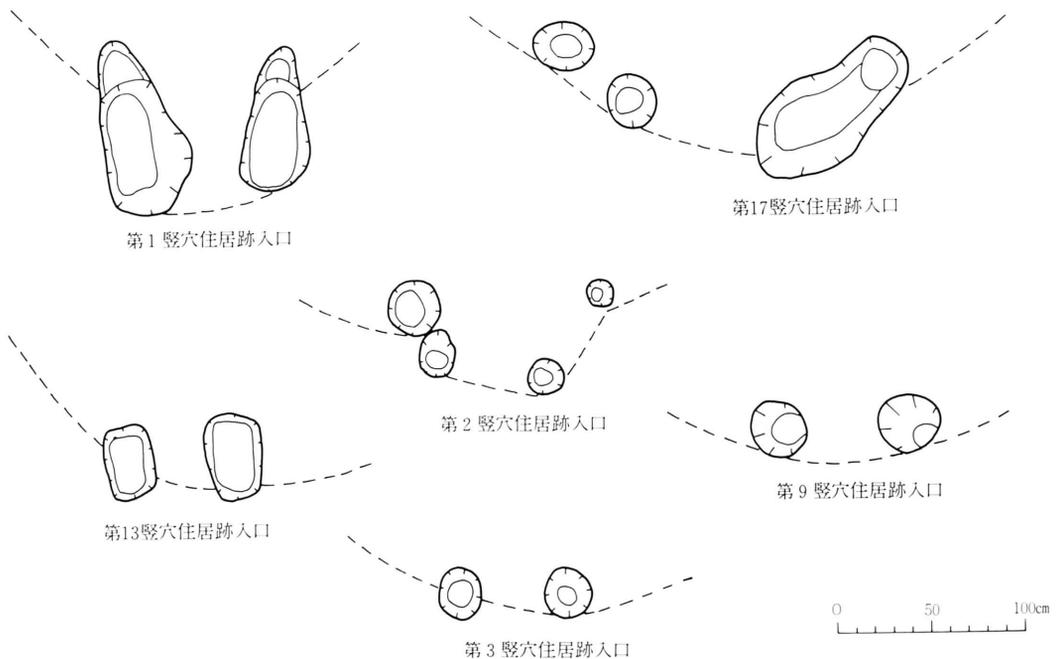
A類……施設をもつもの。4例（1・2・13・17住）

B類……柱穴間が狭くなっているもの。8例（3・4・7・9・10・11・12・16住）

A類は対になる4個の柱穴からなり、入口柱穴をもつものである。竪穴住居跡の外に突き出しているもので明らかに入口としての施設をもつ。開き方に違いがあるが「ハ」の字状に開き、先端が55～75cmと狭くなっている。入口基部は60～100cmを計測する。第17住居跡は90cm、170cmと一段広がっている。対になる一方の柱穴が接しているものもあるが、離れているものもあり、その距離は60cm以内である。

B類は柱穴間が55～75cmとA類の入口先端部の55～75cmと同じ値を示すもので入口と考えられる。7・10住の2例は床面下の遺物出土地点をもとに推測したものである。

入口の方向は北西2・北3・北東3・東2・南東2と一定しない。また斜面低位にあたるも



第68図 入 口

のが7例、高位にあたるものが5例とほぼ半々である。入口中央をたどるとほぼ中央の炉跡を通り住居跡を2分する。入口は炉跡あるいは主柱を向いていると見られる。

〔壁〕……壁の確認されたものは12例である。このうち検出されたものが2例（2・16住）、断面図で確認されたものが3例（2・10・11住）、出土遺物によって推定したものが10例（2・4・5・7・8・9・14・15・16・17住）である。西壁・北壁が比較的残りが良く約15cmを計測するが、東壁はほとんど残っていない。第2住居跡の例では壁の外側約50cmに約20cm高くなり、段状に立ち上がるようである。

新潟県小千谷市大平遺跡では2段の壁が認められている。『埋蔵文化財ニュース13』によると一段壁は柱穴のすぐ外側にあり高さ約20cmで、二段壁は柱穴の外側約50cmにあり高さが約40cmである。当遺跡の場合はほとんどが柱穴のすぐ外側にあり一段壁に該当するものと思われる。一段壁が満足に残っているものが少なく二段壁は破壊されたと推測される。その存在は貯蔵穴と考えられる土壌が柱穴外側約60～70cm以内にあることから想定され、また第2堅穴住居跡の柱穴外側約50cmに壁が認められ二段壁に相当すると考えられる。

〔床面〕 床面は第Ⅲ層に達したものはなく全て第Ⅱc層に形成されている。遺物から推察するとわずかに西方が高くなる。その差が10cm未満で水平と見てさしつかえない。凹んでいる所も見られるが遺物からは範囲が確定されない。

〔埋設土器〕 堅穴住居跡内で埋設された状態で検出されたものは第2住居跡の1例である。住居跡の北西に位置し壁際柱穴（ピット1）の内側に接している。これは入口の右手奥にあたる。この堅穴住居跡は前述の如く埋設土器の周辺が約15cm高くなっており、土器はこの高い部分に設置されている。直径40cm深さ30cmの土壌に正位に埋設され口縁部は約5cm出ていた。土器は体部下半に二次加熱痕が観察され、二次使用されたことがわかる。口径23cm、器高30cmの甕形土器である。埋設土器は①口縁部が床面から出ていること。②入口から遠い位置にあること。③壁際柱穴の内側にあること。などから貯蔵用に利用されたと推測される。

〔土壌〕 柱穴以外のピットで大き目のものを土壌として区別した。検出された位置により3つに分けられる。

A類……側柱柱穴外にあるもの。6例（2・5・6・9・12・14住）

B類……側柱柱穴の大きいもの。2例（4・8住）

C類……側柱柱穴の中間にあるもの。4例（2・3住2例・7住）

A類は側柱柱穴の外側にあるが、住居跡範囲に含まれると考えられる。全て南東部にあり、入口の左方あたり推定一段壁から60cm以内にある。第2住居跡のピット14では底部を欠いた深鉢形土器（第43図5）が入っていた。なお、第12住・第14の2例は炉跡の検出されない住居跡に伴うと推測される。

B類は大型の柱穴として検出されたもので、柱穴と他の施設が重複したものと考えられる。第2住居跡では柱穴の内側に接する形で埋設土器が発見され、第12住居跡では柱穴の外側に接する形で袋状土壌が検出されており、これらに類するものと推測される。第2・第12住居跡同様、入口の右手奥にあたる位置にあるが土器は発見されなかった。

C類は側柱柱穴間にあるもので、幾分推定一段壁から内側に入っている。住居跡における位置により細分が可能である。①入口の下にあるもの。と②入口の右手奥にあるもの。の両者である。前者は入口の内側で第1歩の位置にあたり、後者は住居跡の奥にあたる。

土壌は竪穴住居跡の占める位置により3つに細分されたが、入口との関連で見ると2つにまとめられる。一方は入口の奥にあるもの(A・B・C-②類)と入口の下にあるもの(C-①類)である。前者は第2住居跡の埋設土器・第12住居跡の袋状土壌の例があり貯蔵用の施設と推察される。これに対し後者は入口の真下ということもあり、貯蔵穴とは考えられない。特に遺物は発見されていないが、あるいは幼児甕棺に類する機能をもった埋葬施設であろうか。

〔伴出遺物〕 住居跡範囲内から出土する遺物は多きにわたるが、遺物包含層が流入堆積しており住居跡に伴う遺物を抽出することが難しい。明らかに伴うと認められるものは複合炉に使用された甕形土器3個と埋設土器・土壌内土器の5例にすぎない。

第2住居跡の埋設土器(第39図2)は頸部にゆるやかにくびれをもち外反ぎみに立ち上がる甕形土器で4個の波状突起をもつ。口縁部から頸部にかけては無文で下半は縦位の撚糸文を地文とする。波状突起から体部にかけて沈線による簡潔な入組状の蛇行文を付す。土壌内土器(第43図5)は6個の波状の複合口縁をもつ深鉢形土器で口縁部が最大となる。口縁文様帯は長円文と刺突からなり、体部は三角形文をもち磨消手法を用いている。長円文刺突・蛇行文は堀之内I式土器併行とみられ、長円文は十腰内I式土器の形式表徴となっている。

第6住居跡の複合炉土器(第49図1)は6個の波状突起を有する口縁から肩部にかけての甕形土器で頸部にゆるやかにくびれをもつ。口縁部から頸部にかけて無文で下半が単節斜縄文を地文とする。波状突起から体部にかけて渦巻文から蛇行文へと変化し、間に平行沈線文が横切る。十腰内I式土器に近似するものがあり、それに併行すると見られる。

第7住居跡の複合炉土器(第35図4)は肥厚する平口縁から肩部にかけての甕形土器で頸部にゆるやかにくびれをもつ。文様は口縁部文様帯上部の長円文・刺突と蛇行文をもつもので十腰内I式土器に比定される。

第2炉跡の土器(第39図5)は5個の波状突起をもつ口縁部から肩部にかけての甕形土器で頸部にゆるやかにくびれをもつ。第49図1に類似する三角形文をもち、その中に蛇行懸垂文をもつ。類例は北上市樺山遺跡、八天遺跡に見られ、堀之内I式土器併行と考えられる。

以上見て来たように遺構に伴う土器はいずれも堀之内I式土器、あるいは十腰内I式土器

に類似しており、それらに併行するものと考えられる。

〔遺物包含層との関係〕……当遺跡は全て遺物包含層に覆われており、竪穴住居跡もその下に埋没している。包含層を破壊して構築されたものはなく古いものと考えられる。竪穴住居跡には埋土遺物が多く含まれるが、住居跡外のものとは接合するものがあり、必ずしも住居跡に伴うものとは限らない。遺物包含層の流入堆積と推察される。

竪穴住居跡は遺物の出土状態によって次のように分類される。

① 壁際まで遺物が入っているもの。(第2・4・5・7・8・16住居跡)

② 壁際に遺物が検証されないもの。(第9・10・14・15・17住居跡)

壁際の遺物の有無は包含層の流入を示すものではないが、第63図で明らかのように包含層遺物が壁際床面まで及んでおり、遺物包含層の流入堆積の可能性が大である。遺物包含層は両者を同時に埋没しており、包含層の入り方が形成段階の状況を示している。前者は遺物包含層が埋土となっているもので、形成段階では空洞になっていたことを示し、現に使用されていたことを意味する。これに対し後者は第一次堆積層が形成され、包含層がその上を覆う形となるので埋没段階にあったことを示し、既に廃棄されたことを意味している。

なお、後者は第一次堆積層の形成によって、①一次堆積層が形成途上にあるもの。②一次堆積層で埋没したもの。に分けられる。①は上半に空間に残っているもので放置が考えられ、②は既に埋没したもので廃棄が推測される。両者の間には時間差が読み取れ、フラスコ状土壌のⅡ群とⅢ群に相当すると思われる。しかし、遺跡全体が削平され、しかも竪穴住居跡の東壁が破壊されており、両者の区別がつかない。本来は差違があったと推測されるが明確に把握できない。そこで全て廃棄されたものとして扱うことにする。

また、削平を受けて遺物包含層との関係を明かにできないものがあり、これを3群とすると次のように分類できる。

I 群……現に使用されていたもの。

Ⅱ 群……既に廃棄されていたもの。

Ⅲ 群……不明

〔外部施設との関係〕……竪穴住居跡以外で検出された遺構はフラスコ状土壌・袋状土壌・溝状土壌と埋設土器である。

発見されたフラスコ状土壌は9例で、重複関係にあるものは3例である。第1フラスコ状土壌は第1竪穴住居跡の南東内側にあり複合している。土壌内の遺物35点の中には包含層の遺物と接合するものがあり、土壌が新しいと考えられる。第5フラスコ状土壌は第9竪穴住居跡の北西内側に位置する。土壌には遺物が含まれなく包含層の形成段階に埋没していたと考えられ住居跡が新しいと推測される。また、第8フラスコ状土壌は第14竪穴住居跡の南西で一部重複し

ている。土壌には7点の遺物が含まれており、直接接合するものは発見されなかったが包含層が流入したと見られる。住居跡は壁際に無遺物層が認められ土壌が新しいと推察される。新しいものが2例、古いものが1例である。

フラスコ状土壌は遺物包含層との関係で3群に分類され、竪穴住居跡も3群に分類される。両者の関係はフラスコ状土壌Ⅰ群・Ⅱ群が竪穴住居跡Ⅰ群と、フラスコ状土壌Ⅱ群・Ⅲ群が竪穴住居跡Ⅱ群と共伴関係が想定される。

フラスコ状土壌Ⅰ群（使用されていたもの）	}	竪穴住居跡Ⅰ群（使用されていたもの）
フラスコ状土壌Ⅱ群（放置されていたもの）		竪穴住居跡Ⅱ群（廃棄されていたもの）
フラスコ状土壌Ⅲ群（廃棄されていたもの）		竪穴住居跡Ⅲ群（不明）

第3 フラスコ状土壌の遺物は第2 竪穴住居跡の埋土遺物と接合し（第32図10）、第4 フラスコ状土壌の遺物が第7 竪穴住居跡のものと同接合する（第32図4）。同一個体が土壌と住居跡の両者に入っているということはどちらも空洞になっていたことを示すものであり、同時に存在したことを意味する。フラスコ状土壌は単独で発見される例もあるが、住居跡の近くから発見される、第3 土壌は第2 住居跡の北東約1 mにあり、第4 土壌は第9 住居跡の北東約1.5 mの所にある。第9 住居跡は接合個体（第33図1）により第2・第7 住居跡と同時に存在していたと見られる。竪穴住居跡の範囲は柱穴から50～100 cmまであり、フラスコ状土壌は隣接した形となり、このことを側面から証明している。すなわちフラスコ状土壌は竪穴住居跡に伴う施設と理解され、集落を構成する一要素と認識される。

検出された袋状土壌は4例である。第2 袋状土壌は第9 竪穴住居跡の北約1 mの所にあり、第3 袋状土壌は第10竪穴住居跡の北西約1.5 mに位置する。第4 袋状土壌は第12竪穴住居跡の北西部にあたり、柱穴の北に接している。住居跡範囲は柱穴より約50cm外側に想定され内部施設と見られる。3例とも竪穴住居跡の北約1.5 m以内にあり同時存在が考えられ付属施設と見られる。

溝状土壌は調査区の南東部にあたり、住居跡群の中に位置している。直接重複関係はないが包含層との関連から古いものと推測される。

〔重複関係〕……竪穴住居跡で重複関係の予想されるものは9例で、このうち同位置での建替え（重複）の考えられるものが4例（第4・第8・第12・第16）である。当然建替え住居跡との前後関係も予想されるわけであるが、住居跡が確定できないのでそれは除外した。

新旧関係は次のような方法によって決定したが、必ずしも明確なものではない。重複部分に含まれる遺物が高位床面住居跡のものか、低位床面住居跡のものかによって判断した。高位床面下に遺物包含層が堆積しているということは低位床面住居跡の遺物ということになり低位住居跡が新しいことになる。高位床面下に遺物の認められない場合は高位住居跡が新しいことに

なる。遺物包含層がどの住居跡に流入堆積しているかを検討することによって決定したものである。

第4 竪穴住居跡は南西部を第8 竪穴住居跡と接し、東半を第5 竪穴住居跡と重複している。第4・第8 住居跡は重複部分が少なく明確に示えないが、第4 住居跡は炉跡が破壊され、南北の壁も確認されない。第8 住居跡は比較的炉跡がはっきりし、南北の壁が若干残っている。第8 住居跡が新しいと見られる。第5 住居跡は約15cm下位にあり、遺物は第4 住居跡の推定床面下に入っている。炉跡は第5 住居跡範囲と思われる地点から破壊されており第5 住居跡が新しい。

第5 竪穴住居跡はまた第6 竪穴住居跡の西半と重複している。両者の床面はほとんど区別されず、遺物包含層からは判断できない。第6 住居跡は四方の壁とも検出されないのに対し第5 住居跡は三方の壁が残存している。第5 住居跡が新しいと考えられる。

第6 竪穴住居跡はまた第7 竪穴住居跡と一部重複し、第7 住居跡が約15cm下位にある。第6 住居跡の推定床面下に遺物が堆積し、それが包含層遺物と接合する。第7 住居跡が新しいと判断される。この時第7 住居跡は南北の壁も若干ではあるが残っていたと見られる。

第10 竪穴住居跡の東半は第11 竪穴住居跡と重複している。遺物は第10 住居跡の東半から密になり、第10 住居跡の床面下に堆積している。また、断面図で明らかなように切られており第11 住居跡が新しい。以上のことをまとめると、

第8 住居跡 ←—— 第4 住居跡 ——→ 第5 住居跡 ←—— 第6 住居跡 ——→ 第7 住居跡

第10 住居跡 ——→ 第11 住居跡

となる。重複関係から少なくとも二時期が想定される。

4 集落の復原

「集落」は竪穴住居跡の集合体と考えられ、大規模遺跡における集落形態として把らえられている。集落とは本来的には同時存在という時間的制約を受けると思われ、同時存在したものでなければ集落とは言わないと推測される。たとえば、縄文時代の住居跡と歴史時代の住居跡が隣接して検出されたとしても、当然その両者は集落を形成していたとは言わない。また、単一土器形式内に重複関係が認められた場合にも同時存在とはならず集落とは見られない。前者は明らかに時代が異なるし、後者の場合には時間差を最小に縮めた異時期の住居跡と理解される。これらのことから本来的には竪穴住居跡が同時存在したものでなければ集落を構成しているとは言えないと考える。

しかし、発掘調査において同時存在を証明することは非常に困難であり不可能に近い。現状では単一土器形式内における竪穴住居跡は同時存在と見なして扱っているものがあり、その集落は土器形式区分における集落の変遷過程として把らえられている。また道・広場等のあり方によって集落形態の復原が考えられている。だが、ある一定期間における同時存在住居跡による集落の復原は行われていない。

(1) 集落復原の方法

当遺跡の場合は土器形式からは区分されない短期間であるが、竪穴住居跡には重複するものがあり単一時期内における前後（時間差）が指摘できる。検出遺溝は全て遺物包含層に覆われており、包含層を取り除くことによって包含層形成以前の姿を復原することができる。竪穴住居跡には、遺物包含層によって埋没しているものと、包含層が上位堆積層となっているものがあり、前者は住居跡が空洞になっていたことを示すもので、包含層の形成直前まで使用されていたと見られる。竪穴住居跡を遺物包含層との関係から同時存在のものを抽出することによって集落の復原が可能なのである。

この時、遺物包含層の形成時期に時間差があるかどうか大きな問題となるが、①接合個体が全域にわたる。②遺物包含層が2分できなく単層である。③フラスコ状土壙の接合個体が厚さ1 mにわたって混入しているなどにより、遺物包含層は短期間に形成され、しかも1回と考えられる。そこで遺物包含層の形成は短期間で1回限りという前程で進めることにした。

また、竪穴住居跡の範囲決定の仕方、遺物包含層の流入堆積の認定の仕方によっては同時存在ではなくなることがある。たとえば、範囲決定が東方にずれていた場合には、第1次堆積層が形成されていたとみなされ古いものと見られる。また、壁際遺物が竪穴住居跡に伴う遺物とすると包含層の流入とはならず、これも古いことになる。両者ともその判定が難かしく決定できない面が多い。そこで前者は炉跡と側柱柱穴の配置によって決定したものを住居跡範囲とみ